

茨城県教育財団文化財調査報告第228集

高 幡 遺 跡
加 茂 東 遺 跡
犬 田 山 神 古 墳

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 16 年 3 月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団

高 幡 遺 跡
加 茂 東 遺 跡
犬 田 山 神 古 墳

北関東自動車道（協和～友部）建設
事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅶ

平成 16 年 3 月

日 本 道 路 公 団
財団法人 茨城県教育財団

序

茨城県は、県土の均衡ある発展を念頭におきながら地域の特性を生かした振興を図るために、高規格幹線道路などの根幹的な県土基盤の整備とともに、広域的な交通ネットワークの整備を進めております。北関東自動車道建設事業も、その目的に添って計画されたものであります。

このたび、日本道路公団は、岩瀬町高幡・加茂部・犬田地区において、北関東自動車道（協和～友部）建設事業を決定いたしました。この事業地内には埋蔵文化財包蔵地である高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳が所在します。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年2月から平成15年2月まで発掘調査を実施しました。

本書は、高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳の調査成果を収録したものです。本書が、学術的な研究資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・文化の向上の一助として御活用いただければ幸いです。

なお、発掘調査から報告書の刊行に至るまで、委託者である日本道路公団から多大なる御協力を賜りましたことに対し、厚く御礼申し上げます。

また、茨城県教育委員会、岩瀬町教育委員会をはじめ、関係各位からいただいた御指導、御協力に対し、衷心より感謝申し上げます。

平成16年3月

財団法人 茨城県教育財団

理事長 齋藤佳郎

例 言

1 本書は、日本道路公団の委託により、財団法人茨城県教育財団が平成13年度および平成14年度に発掘調査を実施した、茨城県西茨城郡岩瀬町大字高幡に所在する高幡遺跡、大字加茂部に所在する加茂東遺跡、大字犬田に所在する犬田山神古墳の発掘調査報告書である。

2 各遺跡の発掘調査期間及び整理期間は、以下のとおりである。

高幡遺跡

調査 平成14年7月1日～平成14年8月8日

整理 平成15年12月1日～平成16年1月31日

加茂東遺跡

調査 平成14年2月12日～平成14年3月8日、平成15年2月12日～平成15年2月28日

整理 平成15年8月1日～平成15年8月31日

犬田山神古墳

調査 平成14年4月1日～平成14年4月30日

整理 平成16年3月1日～平成16年3月31日

3 各遺跡の発掘調査は、調査第一課長阿久津久、調査第二課長鈴木美治のもと、以下の者が担当した。

高幡遺跡

調査第1班長 萩野谷 悟 平成14年7月1日～平成14年8月8日

主任調査員 横倉 要次 平成14年7月1日～平成14年8月8日

主任調査員 柳 雅彦 平成14年7月1日～平成14年8月8日

加茂東遺跡

調査第1班長 海老澤 稔 平成14年2月12日～平成14年3月8日

調査第2班長 村上 和彦 平成15年2月12日～平成15年2月28日

主任調査員 藤田 哲也 平成14年2月12日～平成14年3月8日

調査員 早川 麗司 平成15年2月12日～平成15年2月28日

犬田山神古墳

調査第2班長 村上 和彦 平成14年4月1日～平成14年4月30日

主任調査員 近藤 恒重 平成14年4月1日～平成14年4月30日

調査員 越田真太郎 平成14年4月1日～平成14年4月30日

4 各遺跡の整理及び本書の執筆・編集は、整理第二課長鶴見貞雄のもと、以下の者が担当した。執筆分担は以下の通りである。

横倉 第3章

早川 第4章

越田 例言、凡例、抄録、第1章、第2章、第5章

凡 例

- 1 各遺跡の地区設定は、日本平面直角座標第IX系座標を原点とし、高幡遺跡は $X = +38, 120\text{m}$ 、 $Y = +28, 960\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とし、加茂東遺跡は $X = +38, 360\text{m}$ 、 $Y = +29, 600\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とし、犬田山神古墳は $X = +38, 420\text{m}$ 、 $Y = +24, 720\text{m}$ の交点を基準点 (A 1 a1) とした。なお、この原点は、日本測地系による基準点である。

大調査区は、この基準点を基に遺跡範囲内を東西南北各々40m四方の大調査区に分割し、さらに、この大調査区を東西・南北に各々10等分し、4m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は、アルファベットと算用数字を用い、北から南へA, B, C..., 西から東へ1, 2, 3...とし、「A 1 区」、「B 2 区」のように呼称した。さらに小調査区は、北から南へa, b, c... j, 西から東へ1, 2, 3... 0とし、名称は、大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」、「B 2 b2 区」のように呼称した。

- 2 抄録の北緯及び東経の欄には世界測地系に基づく緯度・経度を () を付して併記した。

- 3 実測図・一覧表・遺物観察等で使用した記号は次のとおりである。





住居跡—S I 土坑—SK 井戸跡—SE 溝跡—SD 道路跡—SF

柱穴—P 古墳—TM 攪乱—K

- 4 土層観察と遺物における色調の判定には、『新版標準土色帖』(小山正忠・竹原秀雄編著 日本色研事業株式会社)を使用した。

- 5 土層解説中の含有物については、各々総量で記述した。

- 6 遺構及び遺物の実測図中の表示は次の通りである。

焼土・釉・赤彩  炉・火床面・石器使用痕・被熱痕 
竈部材・粘土・炭化材・黒色処理  柱痕・油煙・煤・炭化物  硬化面 - - - - -
土器● 土製品○ 石器・石製品□ 金属製品△

- 7 遺構・遺物実測図の作成方法については、次のとおりである。

- (1) 遺構全体図は高幡遺跡を300分の1、加茂東遺跡を200分の1、犬田山神古墳を250分の1で掲載し、遺構は60分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。
- (2) 遺物は3分の1に縮尺して掲載したが、異なる場合もある。
- (3) 文字資料のうち、焼成前に線刻されたものを「ヘラ書き」、焼成後に線刻されたものを「刻書」と分けて記述した。

- 8 「主軸方向」は、炉または竈の中心と入り口を結んだ軸線あるいは南北の柱穴を結ぶ軸線を主軸とみなし、その主軸が座標北からみて、どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した。(例 N—10°—E)

- 9 遺物観察表の記載方法は次のとおりである。

- (1) 計測値の単位は、cm及びgで示した。なお、現存値は ()、推定値は [] を付して示した。
- (2) 備考の欄は、残存率や写真図版番号等、その他必要と思われる事項を記した。
- (3) 遺物番号については通し番号とし、挿図、観察表、写真図版に記した番号は同一とした。

- 10 遺構一覧表における計測値は、現存値は ()、推定値は [] を付して示した。

抄 録

ふりがな	たかはたいせき かもひがしいせき いぬだやまのかみこふん							
書名	高幡遺跡	加茂東遺跡	犬田山神古墳					
副書名	北関東自動車道(協和～友部)建設事業地内埋蔵文化財調査報告書							
巻次	VII							
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告							
シリーズ番号	第228集							
編著者名	横倉 要次 早川 麗司 越田 真太郎							
編集機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行機関	財団法人 茨城県教育財団							
所在地	〒310-0911 茨城県水戸市見和1丁目356番地の2 TEL 029-225-6587							
発行日	2004(平成16)年3月26日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
たか 高幡遺跡	いばらきけんにし 茨城県西茨城郡岩瀬町 おおあさか 大字高幡字六枚畑85番 地ほか	08324 - 073	36度 20分 35秒 (36度 20分 46秒)	138度 49分 21秒 (138度 49分 10秒)	60 ～ 61m	20020701 ～ 20020808	1,686.73㎡	北関東自動車道(協和～友部)建設事業に伴う事前調査
か 加茂東遺跡	いばらきけんにし 茨城県西茨城郡岩瀬町 おおあさか 大字加茂部字加茂1510 番地ほか	-	36度 20分 43秒 (36度 20分 54秒)	138度 49分 47秒 (138度 49分 35秒)	73 ～ 74m	20020212 ～ 20030228	573.76㎡	
いぬだ 犬田山神古墳	いばらきけんにし 茨城県西茨城郡岩瀬町 おおあさか 大字犬田字前田1665番 地の2ほか	08324 - 085	36度 20分 45秒 (36度 20分 56秒)	138度 46分 31秒 (138度 46分 20秒)	61 ～ 65m	20020401 ～ 20020430	705.31㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
高幡遺跡	狩猟場跡	縄文時代	陥し穴 2基		縄文土器, 磨石, 凹石, 石皿		縄文時代から中世以降までの複合遺跡である。特に, 弥生時代と古墳時代の集落跡が中心となっている。古墳時代の住居跡からは初期的な竈が確認された。	
	集落跡	弥生時代	竪穴住居跡 4軒		弥生土器, 紡錘車, 炉石			
		古墳時代	竪穴住居跡 8軒		土師器(坏, 高坏, 椀, 壺, 甕, 甌, 埴), 土玉, 双孔円板, 砥石			
	その他	中世	井戸跡 1基		土師質土器(小皿, 鍋),			
不明		溝跡 4条 土坑 3基		陶器(甕, 播鉢), 砥石				

加茂東遺跡	集落跡	平安時代	竪穴住居跡 4軒 溝跡 1条	土師器(坏, 椀, 皿, 甕), 須恵器(甕), 灰釉陶器(長 頸瓶), 砥石	山間部に形成され た集落跡であり, 遺 跡はさらに周辺に広 がっていると考えら れる。
	その他	不明	土坑 3基 道路跡 1条	縄文土器	
犬田山神古墳	墓跡	古墳時代	円墳 1基	土師器(椀)	墳丘が削平された円 墳の周溝を確認した。 また, 中世城郭の一 部と考えられる溝跡 を確認した。
	城跡	中世	溝跡 1条	土師質土器(小皿, 内耳鍋), 瓦質土器(火鉢)	
	その他	不明	土坑 2基 溝跡 1条	縄文土器, 弥生土器	

目 次

序	
例言	
凡例	
抄録	
目次	
第1章 調査経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査経過	1
第2章 位置と環境	2
第1節 地理的環境	2
第2節 歴史的環境	2
第3章 高幡遺跡	6
第1節 遺跡の概要	6
第2節 基本層序	6
第3節 遺構と遺物	9
1 縄文時代の遺構と遺物	9
(1) 陥し穴	9
(2) 遺構外出土遺物	10
2 弥生時代の遺構と遺物	11
(1) 竪穴住居跡	11
(2) 遺構外出土遺物	22
3 古墳時代の遺構と遺物	24
(1) 竪穴住居跡	24
(2) 遺構外出土遺物	40
4 中世以降の遺構と遺物	41
(1) 井戸跡	41
(2) 溝跡	41
5 その他の遺構	44
第4節 まとめ	46
第4章 加茂東遺跡	50
第1節 遺跡の概要	50
第2節 基本層序	50
第3節 遺構と遺物	53
1 平安時代の遺構と遺物	53
(1) 竪穴住居跡	53

(2) 溝跡	60
2 その他の遺構と遺物	63
(1) 道路跡	63
(2) 土坑	63
(3) 遺構外出土遺物	64
第4節 まとめ	65
第5章 犬田山神古墳	66
第1節 遺跡の概要	66
第2節 基本層序	66
第3節 遺構と遺物	66
1 古墳時代の遺構と遺物	66
(1) 古墳	66
2 中世の遺構と遺物	70
(1) 溝跡	70
3 その他の遺構と遺物	72
(1) 土坑	72
(2) 溝跡	75
(3) 遺構外出土遺物	76
第4節 まとめ	76
写真図版	

第1章 調査経緯

第1節 調査に至る経緯

日本道路公団は、常陸那珂港と北関東の各主要都市を結ぶ北関東自動車道の早期開通をめざしている。

平成10年11月4日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設事業地内における埋蔵文化財の所在の有無とその取り扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は、平成10年12月15～18日に岩瀬町高幡地区と犬田地区において、平成12年12月14日に加茂部地区において現地踏査を実施し、遺跡の所在を確認した。平成13年3月28日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに事業地内に高幡遺跡、犬田山神古墳が存在する旨、さらに平成13年6月26日に加茂東遺跡が存在する旨回答した。

平成13年7月12日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づき、土木工事等のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。茨城県教育委員会教育長は計画変更が困難であることから、記録保存のための発掘調査が必要であると判断し、平成13年7月13日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成13年10月9日、日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長は茨城県教育委員会教育長に対して、北関東自動車道建設に係わる埋蔵文化財発掘調査の実施について協議した。平成13年10月11日、茨城県教育委員会教育長は日本道路公団東京建設局水戸工事事務所長あてに、高幡遺跡、加茂東遺跡、犬田山神古墳について、発掘調査の範囲及び面積等について回答し、併せて埋蔵文化財の調査機関として財団法人茨城県教育財団を紹介した。

財団法人茨城県教育財団は、日本道路公団から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け、平成14年2月12日から調査を開始した。

第2節 調査経過

各遺跡の調査経過については、下表のとおりである。

年月 工程	高幡遺跡		加茂東遺跡			犬田山神古墳
	平成14年		平成14年		平成15年	平成14年
	7月	8月	2月	3月	2月	4月
調査準備	■		■		■	■
表土除去	■		■		■	■
遺構確認	■		■		■	■
遺構調査	■		■		■	■
洗浄・注記・写真整理作業	■		■		■	■

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳は、茨城県西茨城郡岩瀬町に所在している。岩瀬町は、茨城県の中西部に位置し、北には富谷山、雨巻山及び高峰山があり、栃木県真岡市・益子町・茂木町に接している。町は山地で取り囲まれた盆地をなし、町の北東部に位置する^{くわがら}の山間、鏡ヶ池に源を発する桜川が町の中央部を東西に貫流している。平地は、桜川、大川、筑輪川などの流域と山間部に入り込んだ谷状の低地などである。

当町を取り囲んでいる八溝山系は、八溝山塊、鷲の子山塊、鶏足山塊、筑波山塊の4つの山塊群から成り立っている。これらの山塊の地質は、中・古生代の地向斜に堆積された地層とこれを貫く花崗岩類からできている。台地の大部分は、関東ローム層に厚くおおわれた洪積台地である。この上層は赤土と呼ばれ、鹿沼軽石を含む火山灰が堆積したものである。また、水田に利用されている桜川流域一帯などは、河川の浸食・堆積作用による沖積地である¹⁾。高幡遺跡は高幡地区にあり、桜川支流の筑輪川右岸に面した標高60mほどの丘陵裾部の台地上に立地している。加茂東遺跡は加茂部地区にあり、北東側に羽黒山、西側に桜川支流の筑輪川を望む標高73～74mほどの丘陵裾部に立地している。犬田山神古墳は犬田地区にあり、筑波山塊の北部から西側に延びる標高61～65mの丘陵性の舌状台地上に立地している。調査前の現況はいずれも畑地である。

第2節 歴史的環境

岩瀬盆地の遺跡は桜川及びその支流域の台地上に多く分布し、縄文時代から中世にかけての遺跡が数多く存在している²⁾。

旧石器時代の遺跡については、遺構や出土状況などが明確ではないが、これまでに上野原地内で尖頭器が、富谷地内と高幡地内で石槍がそれぞれ発見されている。また、松田古墳群^{まつだ}〈4〉からも旧石器時代の遺物が出土している³⁾。

縄文時代には、桜川流域の沖積地から入り込む支谷に面した台地上の縁辺部に、集落が形成されるようになり、遺跡は磯辺遺跡〈5〉、曾根宮下遺跡〈6〉、長辺寺遺跡〈7〉、猪窪遺跡〈8〉、曾根東台遺跡〈9〉、加茂遺跡〈10〉、花園遺跡〈11〉、松田遺跡〈12〉、西小埜遺跡〈13〉、裏山遺跡〈14〉、宮前遺跡〈15〉、防人遺跡〈16〉、原遺跡〈17〉、月山寺東遺跡〈18〉、犬田神社前遺跡〈19〉などが所在している。このうち、犬田神社前遺跡と前述の松田古墳群は平成14年度に発掘調査が行われ、中期から後期の遺構・遺物が多数出土している⁴⁾。

弥生時代の遺跡は、縄文時代の遺跡と同じ台地上に多く分布している。これまでに栃木県との県境に近い大泉地区から細頸壺形土器と筒形土器が、磯部遺跡からは石包丁が出土している。これらの遺物は単独発見ではあるが、弥生時代中期の資料として特筆されるものである⁵⁾。また、南飯田遺跡と番匠免遺跡出土の土器は那珂川・久慈川流域に分布する弥生時代後期から終末期の土器と類似している⁶⁾。当遺跡周辺では、松田古墳群、長辺寺遺跡、猪窪遺跡、曾根東台遺跡、加茂遺跡、花園遺跡、西小埜遺跡、裏山遺跡、宮前遺跡、防人遺跡、原遺跡、月山寺東遺跡、犬田神社前遺跡などが所在している。

古墳時代になると、遺跡数は増加の傾向を見せるようになり、現在のところ46か所の古墳群、170基を超える古墳が確認されている。また、町の南に隣接する大和村では、桜川流域に沿って7か所の古墳群と4基の古

墳が確認されている⁷⁾。それらの古墳や古墳群は、桜川流域の沖積地を臨む丘陵上に位置している。これまでに調査された古墳は、狐塚古墳、間中古墳群、青柳古墳群〈20〉、花園古墳群〈第3号墳〉〈21〉、西沢古墳、稲古墳群〈22〉、松田古墳群である。狐塚古墳は長辺寺山西裾に所在し、昭和42年に工場建設のために緊急調査が実施された。古墳の軸線は正南よりわずかに東にふれ、規模は全長約40m、高さ約4m（後方部墳丘）の前方後方墳である⁸⁾。また、標高約130mの長辺寺山山頂には、長辺寺山古墳〈23〉が所在している。この古墳は未調査であるが、全長約120mの前方部を南東に向けて築造された前方後円墳であり、旧新治国東部地方における最大規模の古墳である。これら二つの古墳は岩瀬盆地のほぼ中央の独立丘陵上に築造されており、古墳時代前期の首長墓と考えられている。

古墳時代の集落とされる遺跡は、磯部遺跡、加茂遺跡、花園遺跡、裏山遺跡、木曾宮西遺跡〈24〉、防人遺跡、原遺跡、犬田神社前遺跡などが所在している。この中で磯部遺跡は、町立東中学校建設に伴って昭和45年に発掘調査が実施され、古墳時代中期から奈良・平安時代の集落跡であると報告されている⁹⁾。また、裏山遺跡では前期から後期にかけての住居跡30軒が調査された。特に中期の住居跡からは石製模造品が出土し、集落内の祭祀を考える上での貴重な資料を提供している。

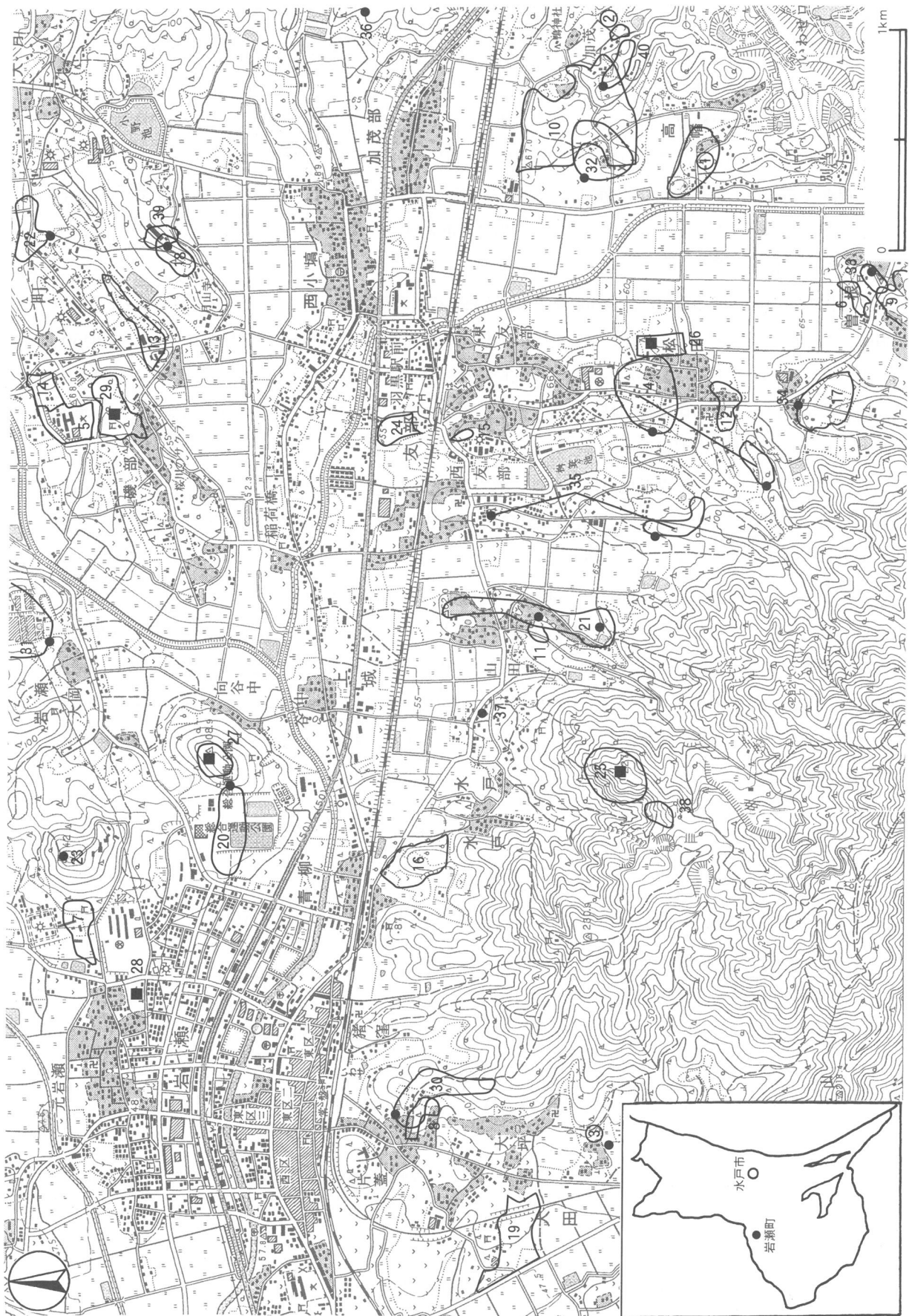
奈良・平安時代になると、岩瀬地方は新治郡に編入されることとなる。協和町古郡地区付近には新治郡衙跡が位置し、その北側に隣接する上野原地区には新治廃寺跡が位置している。奈良・平安時代の遺跡は、裏山遺跡、木曾宮西遺跡、防人遺跡などが位置している。

中世になると、岩瀬地方は「中郡」と呼ばれ、摂関藤原氏を本宗とする大中臣姓中郡氏が台頭してくるようになる。在地領主となった中郡氏は平安時代末期になると後白河法皇によって創建された京都の蓮華王院へその所領である中郡を寄進し、以後、岩瀬地方は中郡荘（庄）と呼ばれるようになる¹⁰⁾。中世の遺構は城館跡を中心とし、周辺には橋本城跡〈25〉、松田城跡〈26〉、谷中城跡〈27〉、岩瀬城跡〈28〉、磯辺城跡〈29〉などが所在するが、これらの城館跡は詳細については不明な部分が多い。また、犬田神社前遺跡からは中世の集落跡・墓城が検出されている¹¹⁾。

※文中の〈 〉内の番号は、第1図及び周辺遺跡一覧表の該当番号と同じである。

註)

- 1) 日本の地質『関東地方』編集委員会 『日本の地質3 関東地方』 共立出版 1986年10月
- 2) 茨城県教育委員会 『茨城県遺跡地図』 2001年3月
- 3) 調査報告書は茨城県教育財団より平成16年3月刊行予定。
- 4) 註3と同じ。
- 5) 岩瀬町史編さん委員会 『岩瀬町史 通史編』 岩瀬町 1987年3月
茨城県史編集会 『茨城県史料 考古資料編 弥生時代』 茨城県 1991年3月
- 6) 註5と同じ。
- 7) 瓦吹堅 「岩瀬盆地考古学点描」『領域の研究—阿久津久先生還暦記念論集—』 阿久津久先生還暦記念事業実行委員会 2003年4月
- 8) 西宮一男 『常陸狐塚古墳調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1969年4月
- 9) 野村幸希 『磯部遺跡調査報告書』 岩瀬町教育委員会 1972年7月
- 10) 中山信名 『新編常陸国誌』 崙書房 宮崎報恩会版 1979年12月
- 11) 註3と同じ。



第1図 高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳周辺遺跡位置図

表1 高幡遺跡・加茂東遺跡・犬田山神古墳周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	時代						番号	遺跡名	遺跡番号	時代					
			旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中世				近世	旧石器	縄文	弥生	古墳	奈・平
①	高幡遺跡	08324073		○	○	○			21	花園古墳群	08324019				○		
②	加茂東遺跡	-					○		22	稲古墳群	08324004				○		
③	犬田山神古墳	08324085		○	○	○	○	○	23	長辺寺山古墳	08324003				○		
4	松田古墳群	08324020	○	○	○	○		○	○	24	木曾宮西遺跡	08324065				○	○
5	磯辺遺跡	08324005		○		○				25	橋本城跡	08324035					○
6	曾根宮下遺跡	08324018		○						26	松田城跡	08324040					○
7	長辺寺遺跡	08324026		○	○					27	谷中城跡	08324041					○
8	猪窪遺跡	08324027		○	○					28	岩瀬城跡	08324042					○
9	曾根東台遺跡	08324028		○	○					29	磯辺城跡	08324043					○
10	加茂遺跡	08324029		○	○	○				30	猪窪古墳群	08324001				○	
11	花園遺跡	08324030		○	○	○				31	大岡古墳群	08324006				○	
12	松田遺跡	08324031		○						32	加茂A古墳群	08324016				○	
13	西小埜遺跡	08324052		○	○					33	曾根古墳群	08324017				○	
14	裏山遺跡	08324056		○	○	○	○			34	庚申塚古墳	08324022				○	
15	宮前遺跡	08324061		○	○					35	ますみ古墳群	08324045				○	
16	防人遺跡	08324068		○	○	○	○			36	諏訪古墳	08324053				○	
17	原遺跡	08324069		○	○	○				37	御領塚古墳	08324067				○	
18	月山寺東遺跡	08324074		○	○					38	車塚古墳群	08324071				○	
19	犬田神社前遺跡	08324086		○	○	○	○	○	○	39	池下古墳群	08324075				○	
20	青柳古墳群	08324050				○				40	加茂B古墳群	08324084				○	

第3章 高幡遺跡

第1節 遺跡の概要

高幡遺跡は、岩瀬町の南東部に位置し、岩瀬盆地の中央を東西に貫流する桜川の支流である筑輪川右岸に面した標高60mほどの丘陵性台地の裾部に立地している。調査面積は1,686.73㎡で、調査前の現況は畑地であった。

今回の調査で確認された遺構は、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡4軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、中世以降の井戸跡1基と溝跡4条、時期不明の土坑3基である。これらの遺構は、調査区内のほぼ全域に分布し、丘陵性台地の裾部平坦面に立地していた。

遺物は、遺物収納箱(60×40×20cm)に8箱出土している。縄文時代の遺物は、縄文土器片(深鉢)、石器(磨石、凹石、石皿)である。弥生時代の遺物は、弥生土器(壺、蓋、高坏)、土製品(紡錘車)、炉石などである。古墳時代の遺物は、土師器(坏、高坏、壺、甕、甑、甗、埴)、須恵器片(坏)、土製品(土玉)、石製品(双孔円板、砥石)などである。中世以降の遺物は、土師質土器片(小皿、内耳鍋)、陶器片(甕、挿鉢)、石製品(砥石)などである。

このように、当遺跡は縄文時代には狩猟場として利用され、弥生時代と古墳時代には集落が形成されていた。また、中世以降も生活の場として利用されていたことが確認され、縄文時代から古墳時代と中世以降の複合遺跡であることが明らかになった。

第2節 基本層序

調査区内の南西部(B1i3区)に深さ約2mのテストピットを設定して、基本土層の観察を行った。(第2図)

第1層 灰褐色の表土層で、耕作による攪乱が見られ、ロームブロックを少量含む。層厚は、35～45cmである。

第2層 にぶい褐色の旧表土層で、耕作による攪乱が見られロームブロックを中量含む。層厚は、12～18cmである。

第3層 明黄褐色のソフトローム層で、赤色粒子を少量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は、36～42cmである。

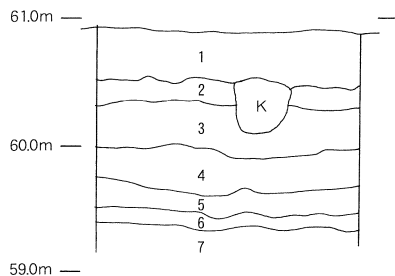
第4層 黄褐色のハードローム漸移層で、粘性と締まりはともに強い。層厚は、25～42cmである。

第5層 黄褐色のハードローム層で、鹿沼パミス少量含む。粘性と締まりはともに強い。層厚は、12～20cmである。

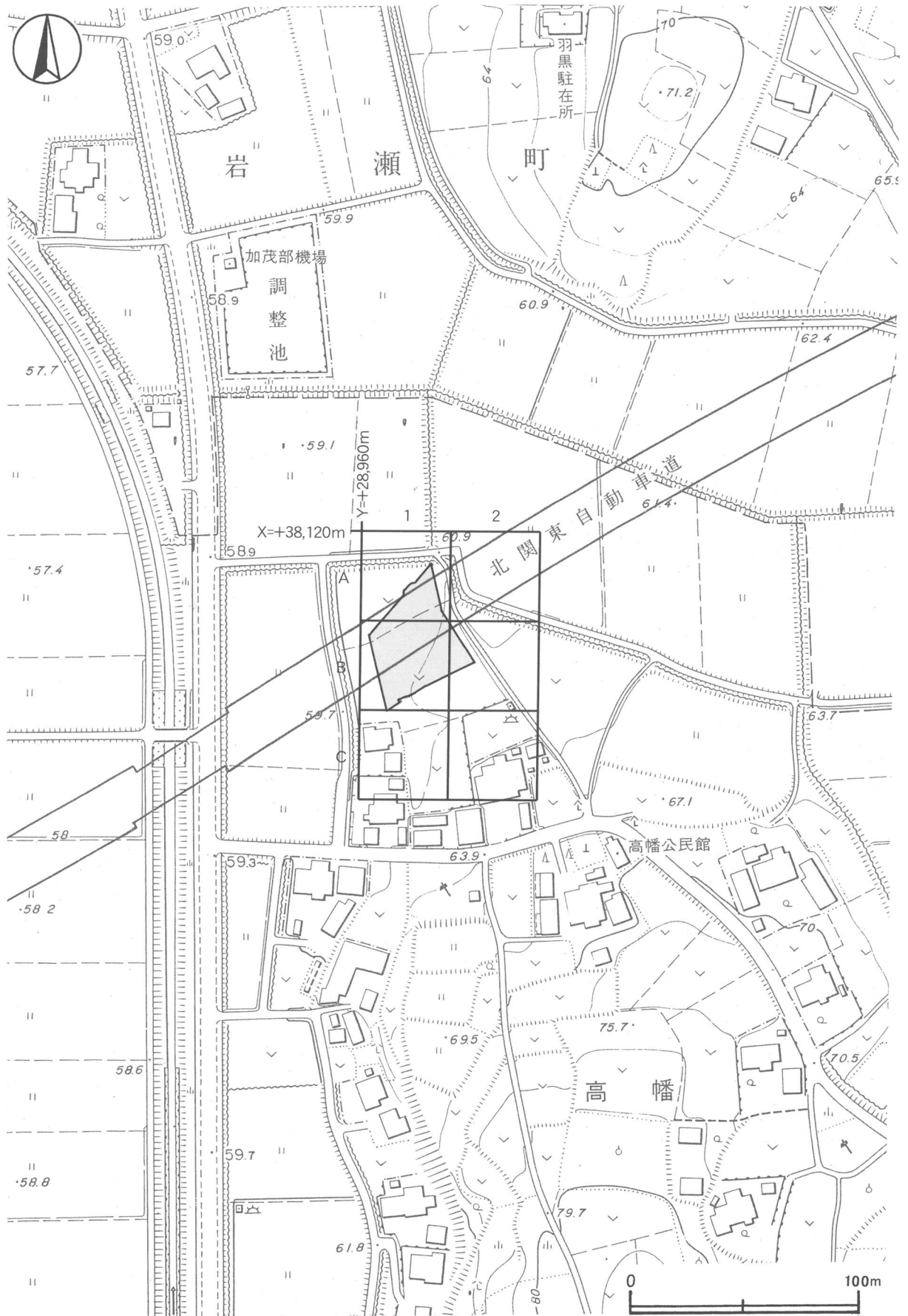
第6層 明黄褐色のハードローム層で、鹿沼パミス多量含む、鹿沼軽石層の漸移層と考えられる。粘性と締まりはともに強い。層厚は、10～14cmである。

第7層 黄褐色の鹿沼軽石層である。粘性と締まりは強い。以下、未掘のため本来の層の厚さは不明である。

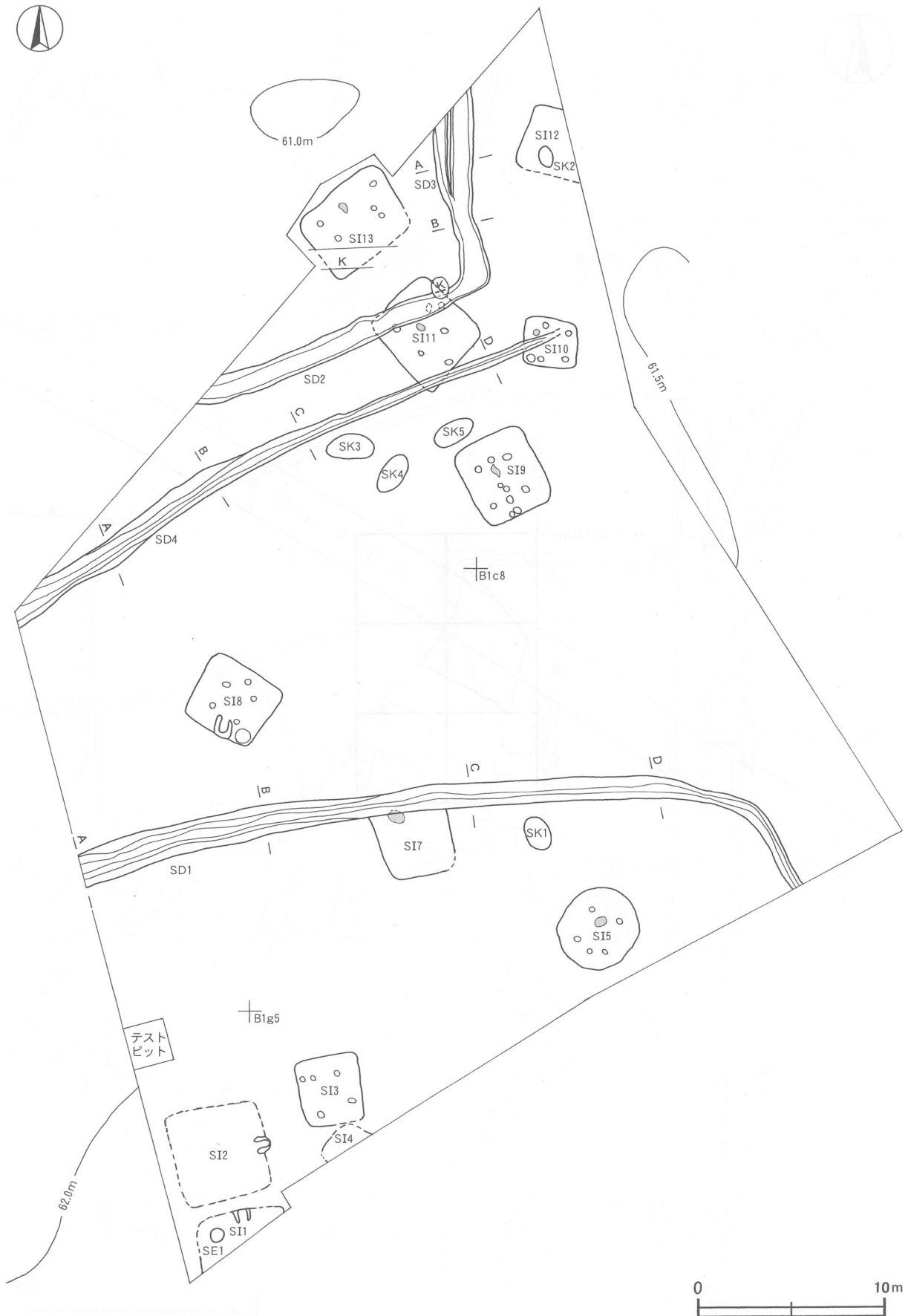
遺構は、第2層上面で確認され、第2層から第3層を掘り込んでいます。



第2図 基本土層図



第3図 高幡遺跡調査区設定図



第4図 高幡遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 縄文時代の遺構と遺物

今回の調査で、陥し穴と考えられる土坑2基が確認された。また、遺構外の遺物としては、縄文土器と石器が出土した。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 陥し穴

第1号陥し穴 (SK3) (第5図)

位置 調査区中央部のB1a6区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.53m、短径1.36mの長楕円形で、深さは36cmである。壁は緩やかに傾斜し、底面はわずかに凹凸がある。長径方向はN-86°-Eである。

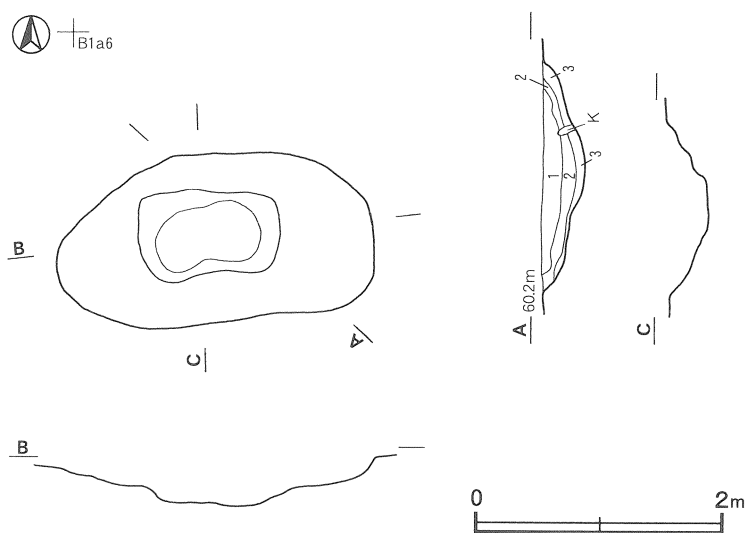
覆土 3層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ローム粒子中量
- 3 褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第5図 第1号陥し穴実測図

第2号陥し穴 (SK5) (第6図)

位置 調査区中央部のB1a7区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 長径2.34m、短径1.10mの楕円形で、深さは64cmである。壁は緩やかに傾斜して立ち上がり、底面は平坦である。長径方向はN-56°-Eである。

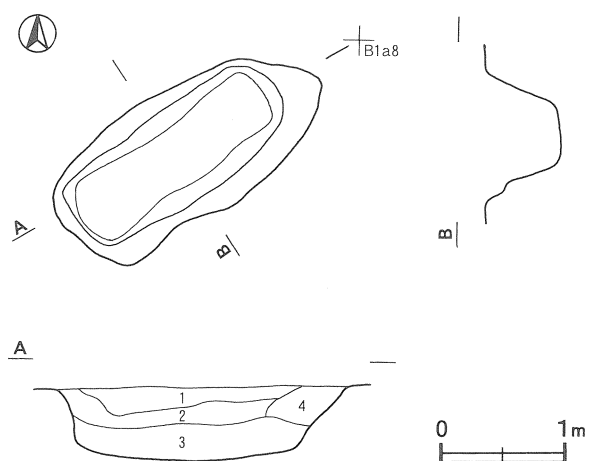
覆土 4層に分層される。壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子微量、焼土粒子極微量
- 2 黒褐色 ロームブロック少量、炭化粒子・焼土粒子極微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量
- 4 褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、遺構の形態から縄文時代と考えられる。



第6図 第2号陥し穴実測図

(2) 遺構外出土遺物 (第7図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第7図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第7図)

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	縄文土器	深鉢	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	沈線区画による磨消縄文施文。	S113覆土中	TP1 PL7
2	縄文土器	深鉢	石英・長石・赤色粒子	灰	普通	単節縄文上に沈線を伴う隆帯を貼付して文様構成。	B1g4区表土中	TP2 PL7

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
3	磨石	(9.8)	(5.4)	4.5	(271)	安山岩	自然礫素材。全面を研磨面に使用。	SD4覆土中	Q3 PL12
4	石皿(凹石)	(8.1)	(8.8)	4.5	(311)	安山岩	表面1か所、裏面8か所穿孔。	S18覆土中	Q4 PL12
5	石皿(凹石)	(10.0)	(10.7)	4.9	(509)	安山岩	裏面6か所、側面1か所穿孔。	S113覆土中	Q5 PL12
6	石皿(凹石)	(27.1)	26.5	10.2	(11400)	花崗岩	皿部わずかになくぼみ。表面3か所穿孔。	表土中	Q6 PL12
7	凹石	(13.3)	(9.8)	3.7	(640)	花崗岩	表面2か所穿孔。	SD2覆土中	Q7 PL12

2 弥生時代の遺構と遺物

後期後半の住居跡4軒が確認された。これらの遺構は、調査区南部から東部にかけて分布し、台地裾部の平坦面に立地している。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第3号住居跡 (第8・9図)

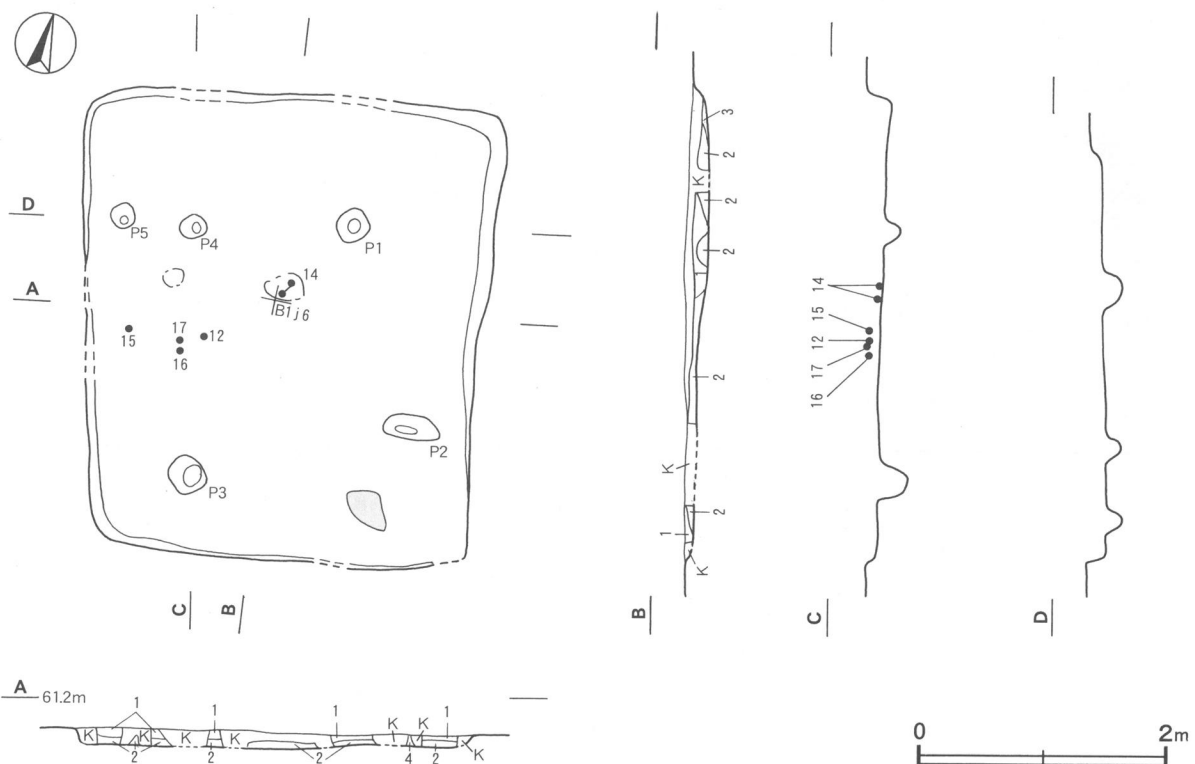
位置 調査区南部のB1j6区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 南東コーナー一部の壁と床は、一部遺存していないが、南北の長軸3.77m、東西の短軸3.32mの隅丸長方形である。南北の長軸をもとにした主軸方向は、N-12°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は最大で8cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による攪乱部分が多く、全体的に締まりは弱い。硬化面は中央部付近でわずかに確認された。南東部の壁際付近に焼土の散布が見られたが、掘り込みや硬化面がなく、炉と判断できなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 5か所。P1～P4は深さ18～25cmで、規模と配置から支柱穴と考えられる。P5の性格は不明である。



第8図 第3号住居跡実測図

覆土 4層に分層される。壁際から中央部に向かってレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

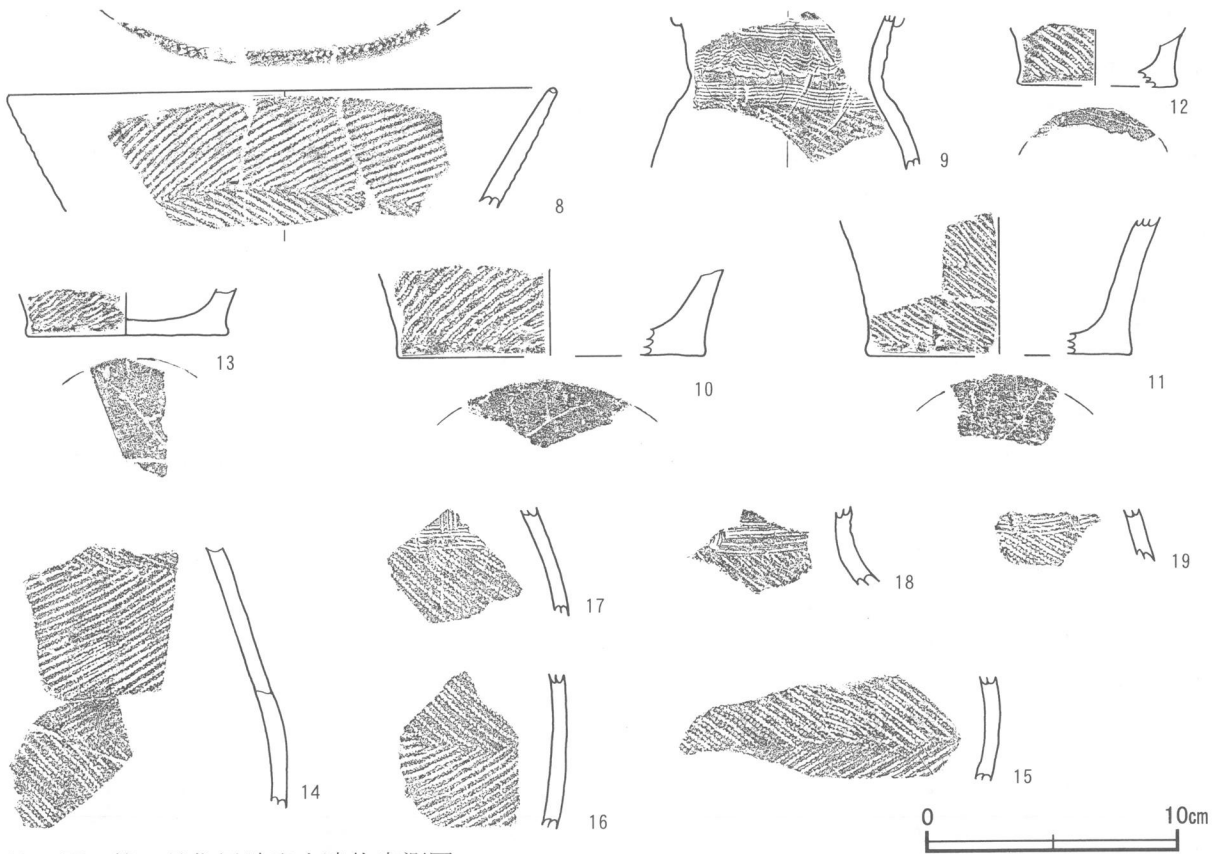
土層解説

1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子極微量
2 褐色 ローム粒子中量

3 褐色 ロームブロック中量
4 灰褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子極微量

遺物出土状況 弥生土器片23点(口縁部片1, 頸部片1, 胴部片17, 底部片4)と, 混入と考えられる土師器片27点, 陶器片2点が出土している。中央部の覆土中層から床面にかけて, 散在した状態で確認されており, すべて小破片である。第9図8・9は南西部の覆土中から, 12・15・16・17は中央部覆土下層から, 14は中央部床面上から, それぞれ出土している。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第9図 第3号住居跡出土遺物実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第9図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	弥生土器	壺	[22.2]	(4.7)	-	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	口唇部縄文施文。口縁部に附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	P8 PL7 5%
9	弥生土器	壺	-	(6.2)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部に櫛歯状工具(6本櫛歯)による横走文と波状文を施し, 胴部との区画に廉状の横走文施文。	南西部覆土中	P9 PL8 5%
10	弥生土器	壺	-	(3.4)	[12.4]	石英・長石・礫	にぶい褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	南西部覆土中	P10 5%
11	弥生土器	壺	-	(5.4)	[10.7]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	覆土中	P11 5%
12	弥生土器	壺	-	(2.3)	[6.5]	石英・長石・雲母	灰褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	中央部覆土下層	P12 5%
13	弥生土器	壺	-	(1.7)	[8.2]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	北西部覆土中	P13 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
14	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	中央部床面	TP14
15	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	中央部覆土下層	TP15
16	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	中央部覆土下層	TP16
17	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部に縦位の櫛描文施文。胴部との区画に櫛歯状工具（6本櫛歯）による康状の横走文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	中央部覆土下層	TP17 PL.8
18	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部に縦位の櫛描文施文。胴部との区画に櫛歯状工具（8本櫛歯）による横走文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南西部覆土中	TP18 PL.7
19	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	胴部との区画に櫛歯状工具（6本櫛歯）による康状の横走文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	覆土中	TP19

第5号住居跡（第10～12図）

位置 調査区南東部のB1g9区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 耕作による攪乱が著しく、壁と床の遺存状況は良好ではなかった。南北の長径4.59m、東西の短径3.90mの楕円形である。出入口施設に伴うと考えられるピットと、炉の位置を結ぶ線をもとにした主軸方向は、N-25°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は17～26cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による攪乱部分が多く、全体的に締まりは弱い。硬化面は炉を囲むように、中央部付近で確認された。また、主に壁に沿った覆土下層から、焼土の散布と炭化材の分布が確認された。

炉 中央部からやや北寄りに付設されている。長径約90cm、短径45cmの楕円形で、ほとんど掘り込みはなく床面を直接使用した地床炉と考えられる。炉床に赤変硬化面はなく、焼土と住居跡の主軸と直交する方向に据えられた炉石2点が確認された。

ピット 5か所。P1～P4は、深さ25～60cmで一定ではないが、その規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ15cmで、出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。

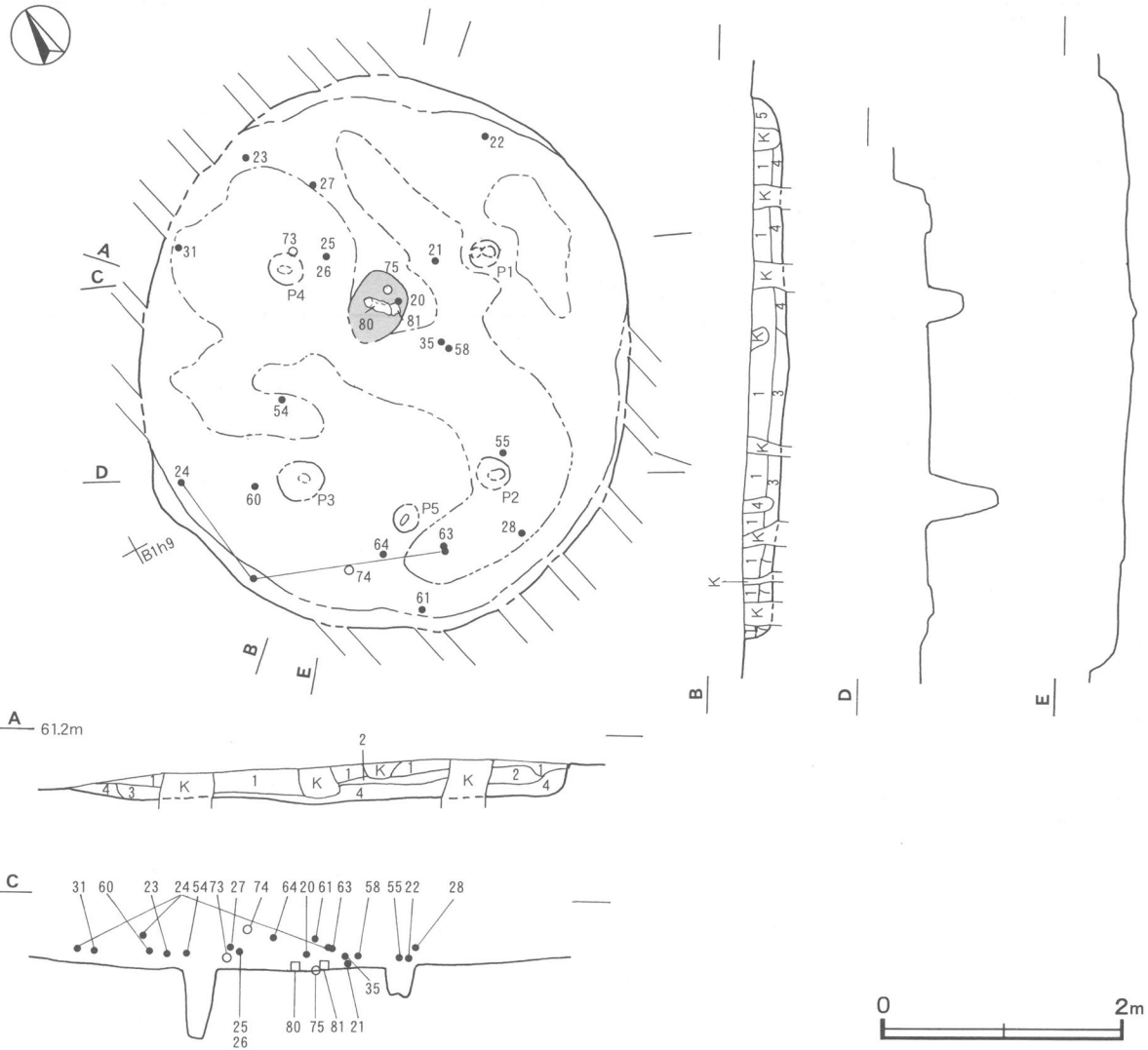
覆土 3層に分層される。全体的に褐色を呈し、各層ともローム粒子を含んでいる。壁際から床面の傾斜に沿って緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、焼土粒子極微量 | 3 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 褐色 | ローム粒子中量、炭化粒子極微量 | | |

遺物出土状況 比較的形状が復元できた弥生土器5点、弥生土器片213点（口縁部片12、頸部片25、胴部片166、底部片10）、土製品3点（紡錘車）、焼成された粘土塊16点、炉石2点と、混入と考えられる土師器片10点が出土している。遺物の多くは小破片で、全域の覆土下層から床面で確認されている。第11図20・21は破損した状態で中央部の床面から、22・23は横位の状態で北部と北東部壁際の床面から、それぞれ出土している。24は南西部壁際付近から、散在した状態で出土した破片が接合したものである。73は北西部、74は南部覆土中層から、75は炉床から出土している。80・81は炉床上で直線状に並んで出土した。また、焼成された粘土塊は、北西部を中心とした覆土中で確認された。

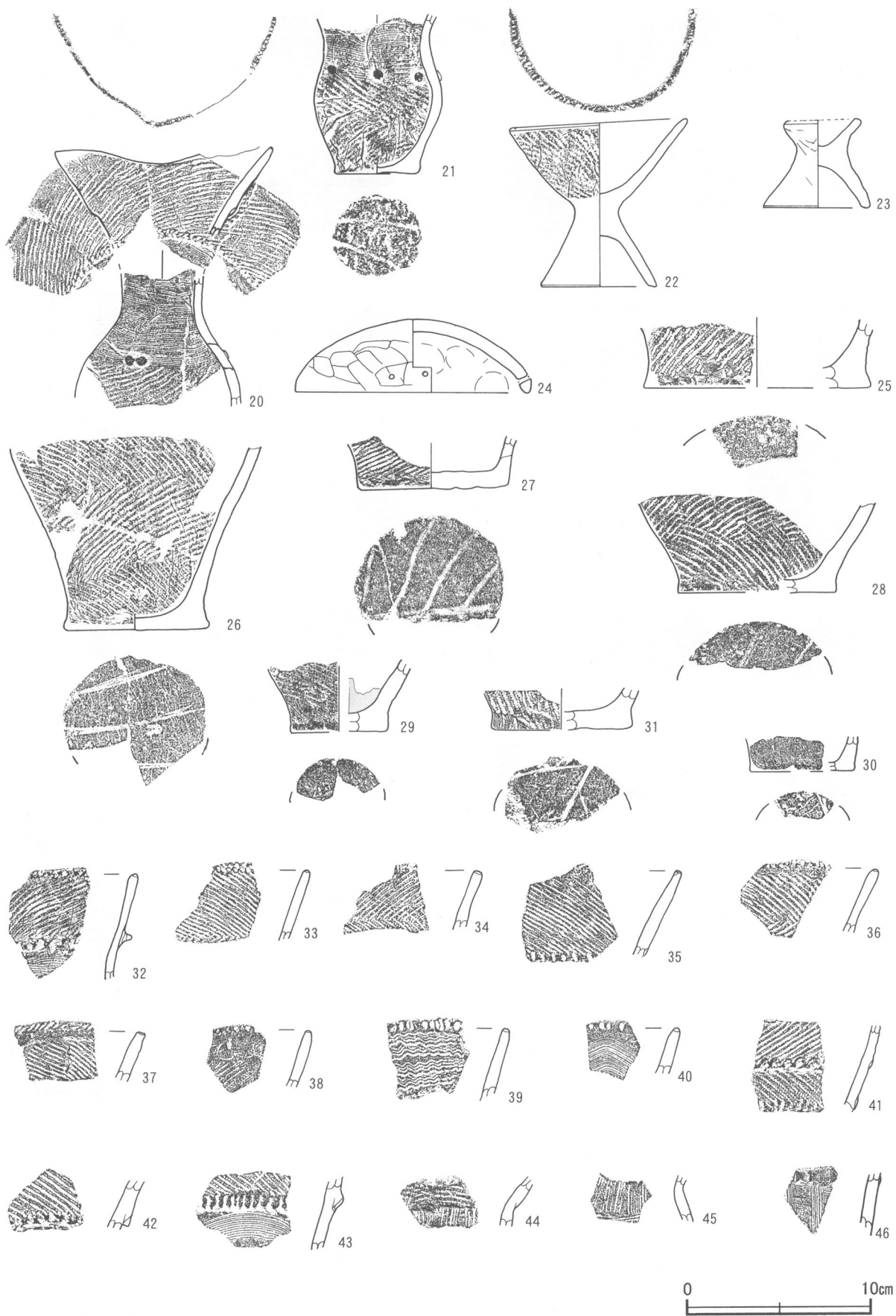
所見 壁に沿うように覆土下層から焼土や炭化材が確認されたことなどから、焼失住居と考えられる。また、蓋、高坏、ミニチュア土器、紡錘車など多様な出土遺物の出土状況からは、集落内における特異性がうかがわれる。さらに、焼成された粘土塊は、土器や土製品の生産に関わる過程で生まれた可能性が推定される。時期は、出土土器と遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



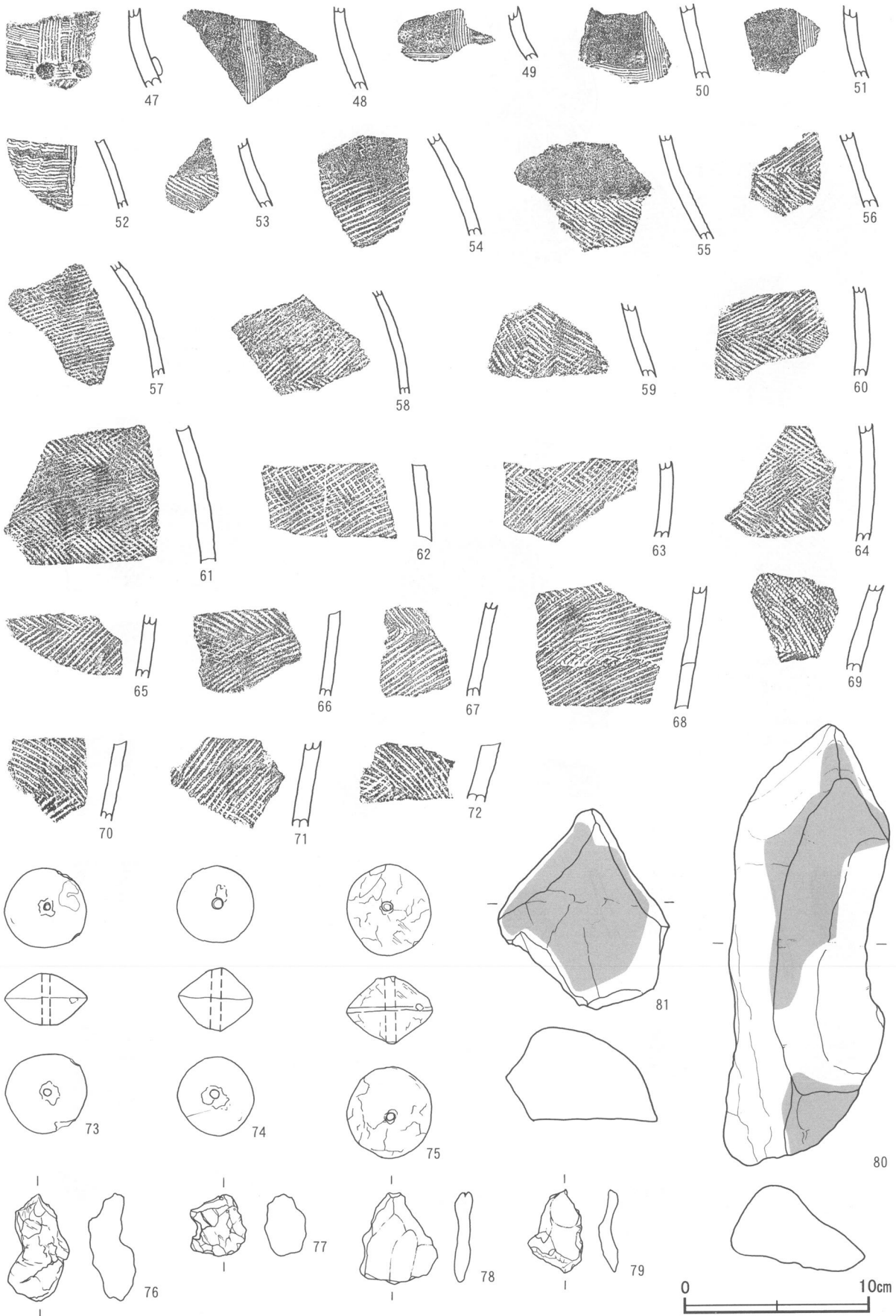
第10図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡出土遺物観察表 (第11・12図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
20	弥生土器	壺	[11.6]	(12.5)	-	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁は片口状。口唇部キザミ。口縁部と胴部附加条一種(附加2条)縄文。口縁部下端縄文原体押圧。頸部櫛歯状工具(6本櫛歯)による横走文充填。頸部下端に2個1単位のボタン状の瘤貼付。	中央部覆土下層	P20 PL8 30%
21	弥生土器	壺	-	(8.6)	4.4	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文と、胴部との区画に横走文施文。ボタン状の瘤貼付。胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。	中央部床面	P21 PL9 80%
22	弥生土器	高坏	9.6	9.0	6.2	石英・雲母	にぶい黄褐	普通	口唇部縄文原体押圧。坏部外面附加条一種(附加2条)縄文施文。脚部無文。坏部内面、脚部内面指頭によるナデ。	北東部壁際床面	P22 PL9 100%
23	弥生土器	高坏	(4.1)	(4.8)	5.8	石英・雲母	にぶい黄橙	普通	無文。坏部内面、脚部内・外面指頭によるナデ。坏部破断面研磨。器台転用カ	北部壁際床面	P23 PL9 20%
24	弥生土器	蓋カ	-	3.9	12.7	長石・雲母	にぶい橙	普通	外面指頭によるナデ、内面に指頭痕あり。端部付近に2個1単位の焼成前穿孔。	南西部覆土下層	P24 PL9 60%
25	弥生土器	壺	-	(3.8)	[12.4]	石英・長石・雲母	灰黄褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部布目痕。	中央部覆土下層	P25 5%
26	弥生土器	壺	-	(9.7)	7.8	石英・長石・雲母	灰褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。底部木葉痕。	中央部覆土下層	P26 10%
27	弥生土器	壺	-	(2.7)	8.2	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	北部覆土下層	P27 5%
28	弥生土器	壺	-	(4.7)	[8.6]	石英・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。底部木葉痕。	南西壁際床面	P28 5%
29	弥生土器	壺	-	(3.9)	[5.3]	石英・長石・雲母	黄灰	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部無文。	南東部覆土中	P29 PL9 5%
30	弥生土器	壺	-	(1.9)	[5.7]	石英・長石	灰黄褐	普通	胴部下端無文。底部木葉痕。	南西部覆土中	P30 5%



第11图 第5号住居跡出土遺物実測図(1)



第12图 第5号住居跡出土遺物実測図(2)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
31	弥生土器	壺	-	(2.2)	[7.8]	石英・雲母	にぶい・橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。底部木葉痕。	北西部覆土下層	P31 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
32	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。口唇と口縁下端の隆帯上に縄文原 体押圧。頸部に連弧状の多条櫛描文施文。	南東部覆土中	TP32 PL7
33	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・黄褐	普通	口唇部縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP33 PL7
34	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	口唇部キザミ。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP34
35	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	口唇と口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。口縁部下端縄文原体押圧。	中央部覆土下層	TP35 PL7
36	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰褐	普通	口唇部縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	北西部覆土中	TP36
37	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	暗褐	普通	口唇部と口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南東部覆土中	TP37
38	弥生土器	壺	石英・雲母	黒褐	普通	口唇部縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。	北東部覆土中	TP38
39	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	口唇部棒状工具による押圧。口縁部櫛歯状工具（4本櫛歯）で波状文充填。	南西部覆土中	TP39 PL7
40	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	口唇部縄文原体押圧。口縁部櫛歯状工具（9本櫛歯）で波状文充填。	南東部覆土中	TP40
41	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	2段の複合口縁部下端縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南西部覆土中	TP41
42	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	複合口縁部下端縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南西部覆土中	TP42
43	弥生土器	壺	石英・長石	明褐	普通	複合口縁部下端縄文原体押圧。口縁部附加条一種（附加2条）縄文施文。頸 部櫛歯状工具（12本櫛歯）による弧状の文様施文。	南西部覆土中	TP43 PL7
44	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明褐	普通	複合口縁部附加条一種（附加2条）縄文。頸部櫛歯状工具（6本櫛歯）による 縦位直状文施文。	北東部覆土中	TP44
45	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明褐	普通	頸部櫛歯状工具（6本櫛歯）で縦位直状文施文。下端は多条櫛描文で区画。	北東部覆土中	TP45
46	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	頸部上端に指頭押圧の隆帯貼付。頸部櫛歯状工具（7本櫛歯）による縦位区 画と横走文施文。	南西部覆土中	TP46
47	弥生土器	壺	石英・長石	橙	普通	頸部櫛歯状工具（7本櫛歯）で横走文充填後、縦位の区画文施文。下端に2 個1単位のボタン状の瘤貼付。	南西部覆土中	TP47 PL8
48	弥生土器	壺	石英・長石	灰褐	普通	頸部櫛歯状工具（8本櫛歯）による縦位の直状文施文。	南西部覆土中	TP48
49	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	頸部下端を横位に区画後、櫛歯状工具（8本櫛歯）で縦位の直状文施文。	北東部覆土中	TP49
50	弥生土器	壺	石英・長石	明褐	普通	頸部下端を櫛歯状工具（8本櫛歯）で横位に区画後、縦位の直状文施文。	南西部覆土中	TP50 PL8
51	弥生土器	壺	長石・雲母	橙	普通	頸部櫛歯状工具（8本櫛歯）による縦位の直状文施文。	覆土中	TP51
52	弥生土器	壺	石英・雲母	灰黄褐	普通	頸部櫛歯状工具で縦区画後、5本単位の波状文充填。胴部附加条縄文施文。	南東部覆土中	TP52
53	弥生土器	壺	石英・長石	褐	普通	頸部無文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	北東部覆土中	TP53
54	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	頸部無文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	中央部覆土下層	TP54
55	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	頸部無文。胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南東部覆土下層	TP55
56	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP56
57	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP57
58	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	中央部覆土下層	TP58
59	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP59
60	弥生土器	壺	石英・長石	黒褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土下層	TP60
61	弥生土器	壺	石英・雲母	灰褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南部壁際覆土 中層	TP61
62	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	北東部覆土中	TP62
63	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南部覆土中層	TP63
64	弥生土器	壺	石英・雲母	褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南部覆土中層	TP64
65	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい・褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP65
66	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP66
67	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい・黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部覆土中	TP67
68	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	覆土中	TP68
69	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黄褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP69
70	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP70
71	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐灰	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP71

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
72	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP72

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
73	紡錘車	4.2	4.5	2.9	44.8	石英・長石	にぶい橙	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	北西部覆土下層	DP73 PL 9
74	紡錘車	4.2	4.0	3.4	41.1	石英・長石	にぶい橙	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	南部覆土中層	DP74 PL 9
75	紡錘車	4.9	4.6	3.7	53.4	石英・長石	にぶい橙	普通	断面形算盤玉状。指頭ナデ	炉内北部床面	DP75 PL 9
76	粘土塊	5.8	3.4	2.4	23.7	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	指頭による押圧痕有り。	南西部覆土中	DP76
77	粘土塊	3.3	3.0	2.2	16.2	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	指頭による押圧痕有り。	南西部覆土中	DP77
78	粘土塊	4.9	4.1	1.0	10.5	石英	暗灰黄	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部覆土中	DP78
79	粘土塊	4.4	2.9	1.0	7.9	石英・雲母	黄灰	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部覆土中	DP79

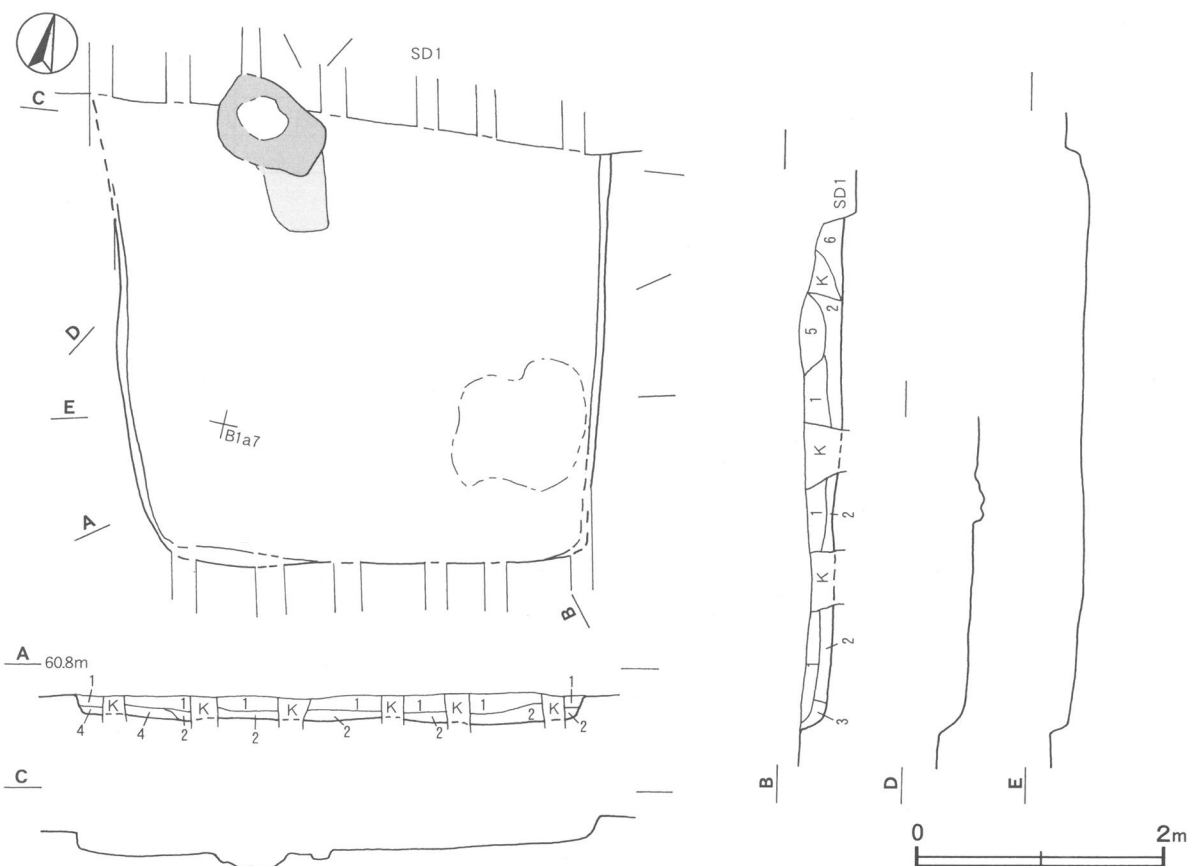
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
80	炉石	24.0	9.2	4.7	1210	花崗岩	柱状の自然礫素材。被熱痕有り。一部赤変。	炉床中央部	Q80
81	炉石	11.0	9.5	5.3	490	砂岩	被熱痕有り。ヒビが入り脆弱。一部赤変および煤付着。	炉床東部	Q81

第7号住居跡 (第13・14図)

位置 調査区中央部のB1f7区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 北側の約3分の1は、第1号溝に掘り込まれている。また、壁と床の一部は、耕作による著しい攪乱を受けている。

規模と形状 南部の壁はほとんど遺存していないが、南北の長軸は3.90mが確認され、東西の短軸3.71mであ



第13図 第7号住居跡実測図

ることから、隅丸長方形と考えられる。南北の長軸と炉の位置をもとにした主軸方向は、N-18°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は15~20cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による攪乱部分が多く、全体的に締まりは弱い。硬化面は南東部付近でわずかに確認された。

炉 北西部寄りに付設されている。北側部分は第1号溝との重複によって掘り込まれ、規模が明確でないが、長径約95cm、短径約65cmの不整楕円形を呈し、炉床部の深さは約15cmである。炉床面は全体的に赤変し、中央部に硬化面が見られた。また、炉に接して南側部分に焼土が確認された。

ピット 確認されなかった。

覆土 6層に分層される。全体に水平な堆積状況を示すとともに、第4~6層には焼土粒子や炭化粒子などが含まれ、ブロック状に堆積していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------|-------|----------------------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量 | 4 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量, 炭化粒子少量 |
| 2 暗褐色 | ロームブロック中量 | 5 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック多量 | 6 黒褐色 | 焼土粒子・ローム粒子中量 |

遺物出土状況 弥生土器片2点(胴部片, 底部片)が出土している。遺物はいずれも小破片で、第14図82・83は覆土中から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第14図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物観察表(第14図)

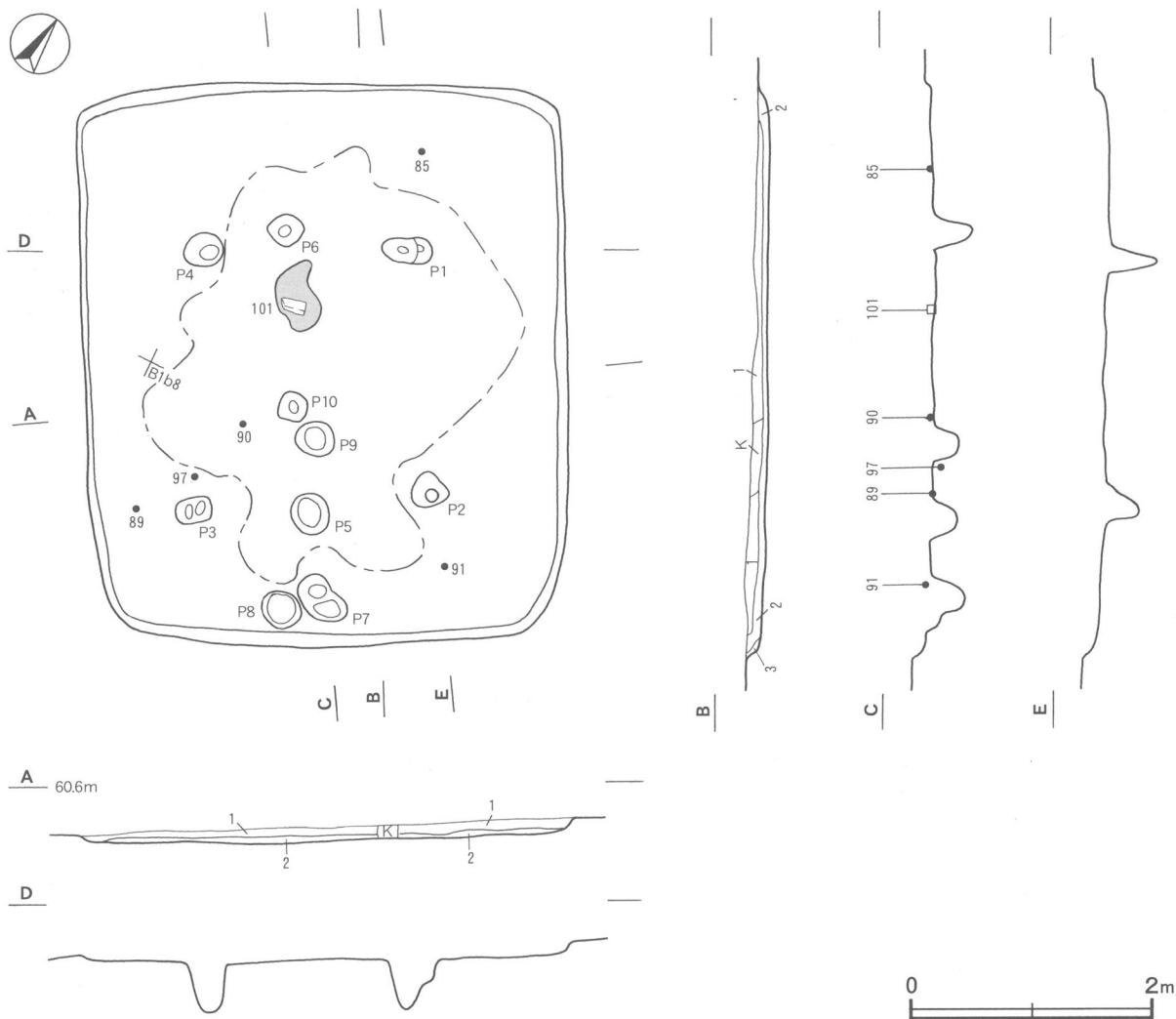
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
82	弥生土器	壺	-	(3.4)	[15.6]	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	覆土中	P82 5%
83	弥生土器	壺				石英・長石・雲母	褐灰	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	北東部覆土中	TP83

第9号住居跡(第15・16図)

位置 調査区中央部のB 1 a8区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 南北の長軸4.62m、東西の短軸4.02mの隅丸長方形である。出入口施設に伴うと考えられるピットと、炉の位置を結ぶ線をもとにした主軸方向は、N-28°-Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は4~12cmである。

床 ほぼ平坦で、支柱穴と考えられる4か所のピットに囲まれた内側を中心にして、炉を囲むように踏み固められた硬化面が見られる。



第15図 第9号住居跡実測図

炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。長径約60cm、短径約35cmの不整形円で、ほとんど掘り込みはなく床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床に硬化面は確認されず、焼土と住居跡の主軸と直交する方向に据えられた炉石1点が確認された。

ピット 10か所。P1～P4の深さは25～42cmで、規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P5とP6は深さ20cmと32cmで、位置的に棟持ち柱のピットと想定される。P7とP8は深さ25cmほどで、出入口施設に伴うピットの可能性が考えられる。P9とP10の性格は不明である。

覆土 3層に分層される。壁際から緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

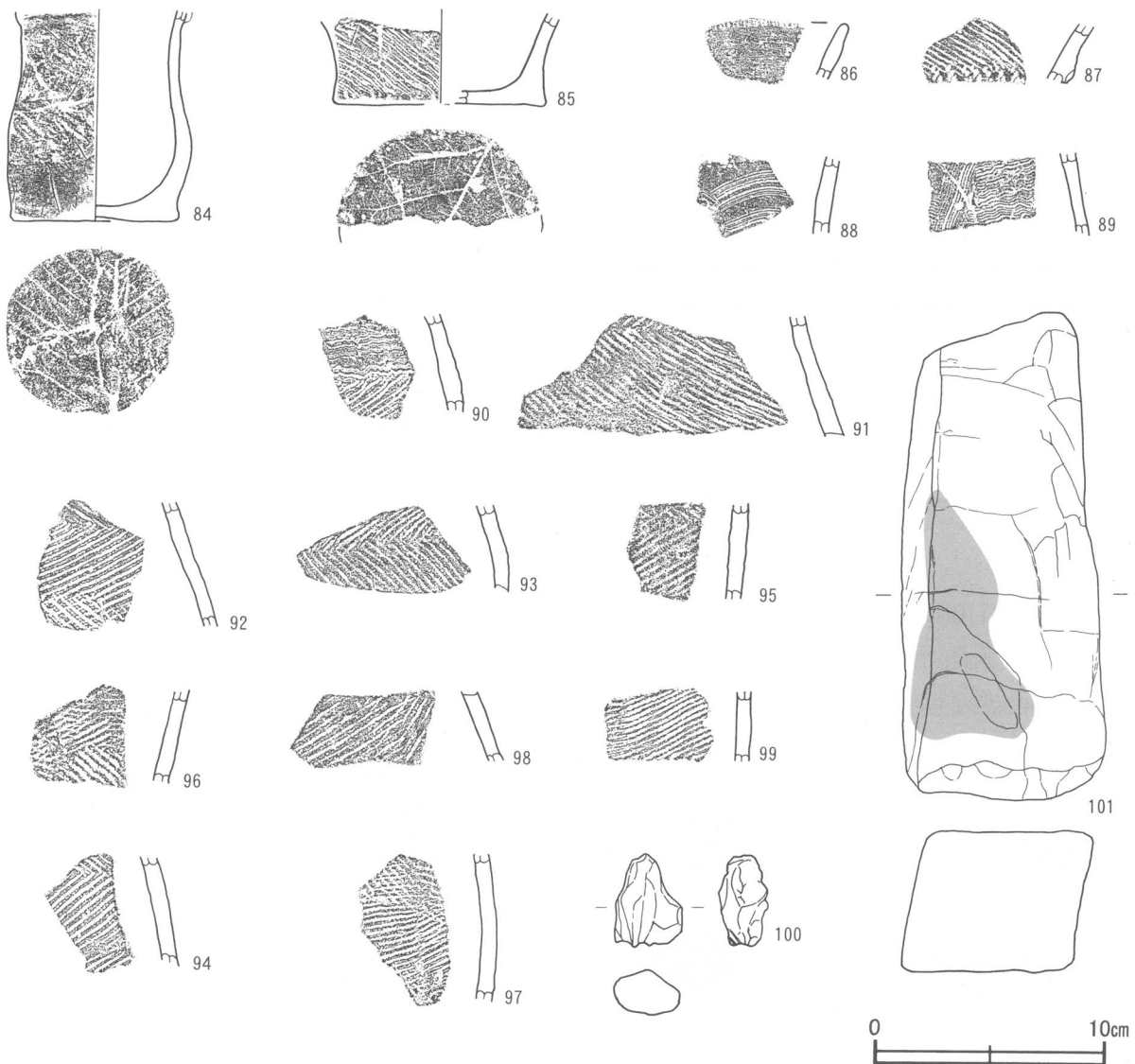
土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子極微量
- 2 暗褐色 ロームブロック少量、炭化物極微量
- 3 暗褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 比較的形狀が復元できた弥生土器1点、弥生土器片41点（口縁部片2、頸部片3、胴部片35、底部片1）、焼成された粘土塊2点、炉石1点と、混入と考えられる土師器片17点が出土している。遺物量は少なく、ほとんどが小破片である。主に中央部から南側を中心とする覆土中層から床面上で確認されている。床面上から出土した遺物は、全体量に比較して少ない。第16図84は、南東部の覆土中から散在した状態で確認

された。85・89～91・97は、床面から出土している。101は南側の炉床から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から弥生時代後期後半と考えられる。



第16図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物観察表(第16図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
84	弥生土器	壺	-	(9.0)	7.2	長石	にぶい褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	南東部覆土中	P84 PL.9 60%
85	弥生土器	壺	-	(4.0)	[9.1]	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	北東部床面	P85 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
86	弥生土器	壺	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口唇部に連続するキザミ施文。	北西部覆土中	TP86 PL.7
87	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部に附加条一種(附加2条)縄文施文。口縁部下端に縄文原体押圧。	覆土中	TP87 PL.7
88	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	頸部に櫛歯状工具(5本櫛歯)による連弧文施文。	南西部覆土中	TP88 PL.8
89	弥生土器	壺	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	頸部に櫛歯状工具(8本櫛歯)による斜位の区画文と波状文充填。	南西部床面	TP89 PL.8

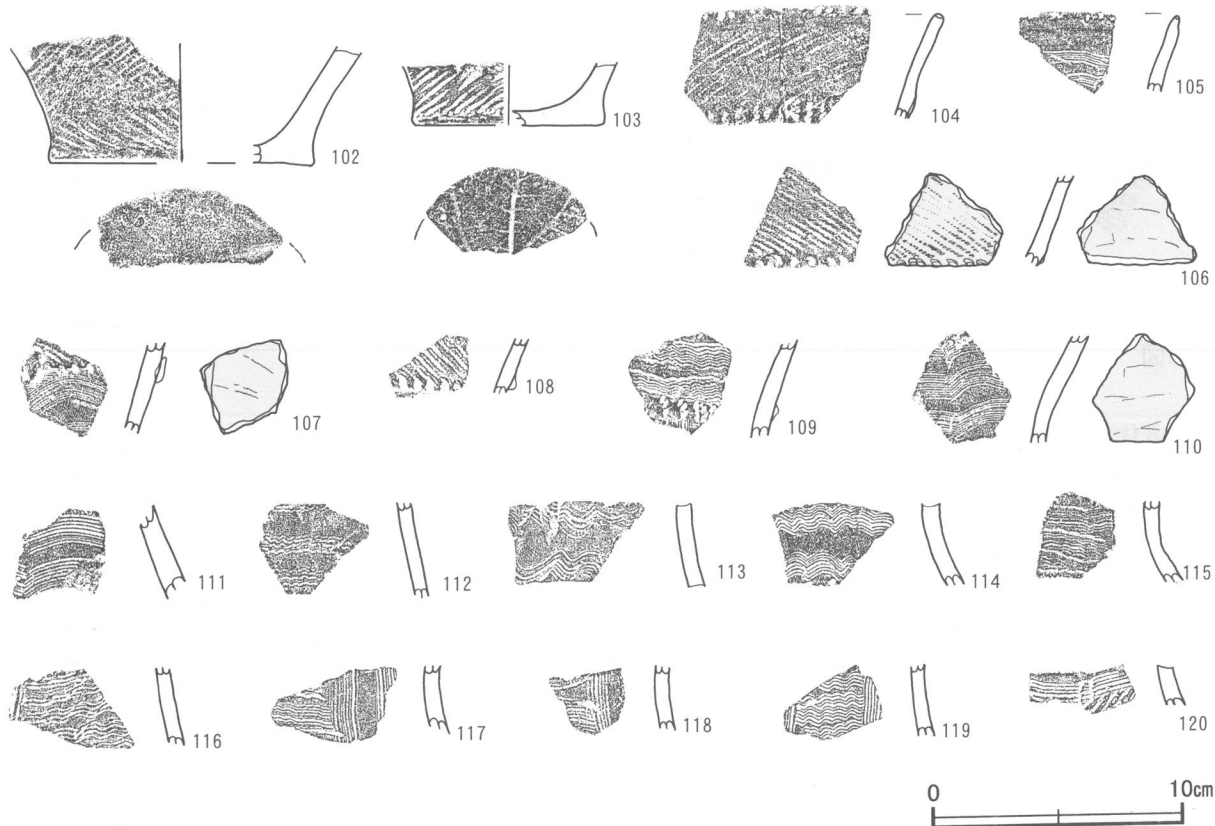
番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
90	弥生土器	壺	石英・長石	黒褐	普通	頸部に櫛歯状工具（6本櫛歯）で横位波状文、胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	中央部床面	TP90 PL8
91	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部床面	TP91
92	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP92
93	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	北西部覆土中	TP93
94	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP94
95	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	浅黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	北西部覆土中	TP95
96	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南東部覆土中	TP96
97	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	南西部床面	TP97
98	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南東部覆土中	TP98
99	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	南東部覆土中	TP99

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
100	粘土塊	3.9	2.8	2.1	13.2	長石・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	指頭による押圧痕有り。	北西部覆土中	DP100

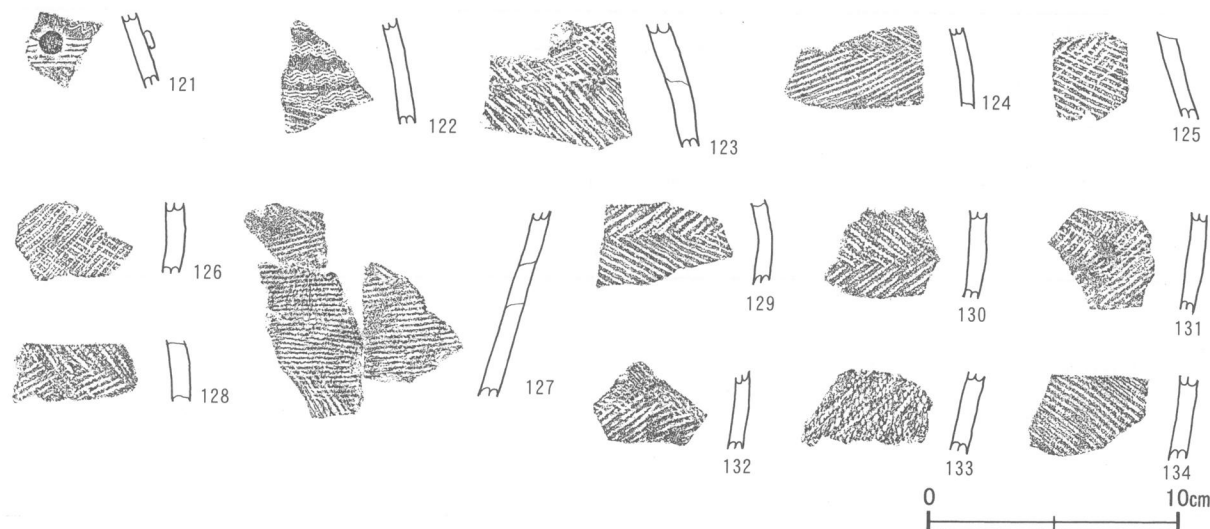
番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
101	炉石	20.7	8.7	6.0	1810	砂岩	柱状の自然礫素材。被熱痕有り。ヒビが入り脆弱。一部赤変。	炉床中央部	Q101

（2）遺構外出土遺物（第17・18図）

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物や、他時期の遺構への流れ込みまたは混入と判断された遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第17図 遺構外出土遺物実測図(1)



第18図 遺構外出土遺物実測図(2)

遺構外出土遺物観察表(第17・18図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
102	弥生土器	壺	-	(4.5)	[10.6]	石英・長石	浅黄橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。底部木葉痕。	S I 10 覆土中	P102 5%
103	弥生土器	壺	-	(2.5)	[7.5]	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。底部木葉痕。	S I 2 覆土中	P103 5%

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
104	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部と口縁部下端縄文原体押圧。口縁部に附加条一種(附加2条)縄文施文。	S I 10 覆土中	TP104 PL7
105	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口唇部縄文原体押圧。口縁部櫛歯状工具(5本櫛歯)による波状文施文。	S I 2 覆土中	TP105
106	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい赤褐	普通	複合口縁部附加条一種(附加2条)縄文施文。口縁部下端縄文原体押圧。	SD1 覆土中	TP106表裏面赤彩 PL7
107	弥生土器	壺	石英・長石	橙	普通	複合口縁部附加条一種(附加2条)縄文施文。口縁部下端刺突。頸部櫛歯状工具(10本櫛歯)による連弧文施文。	S I 8 覆土中	TP107裏面赤彩 PL7
108	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	黒褐	普通	複合口縁部附加条一種(附加2条)縄文施文。口縁部下端縄文原体押圧。	S I 10 覆土中	TP108
109	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰黄橙	普通	口辺部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文充填。下部部に隆帯を貼付し縄文原体押圧。頸部櫛歯状工具による縦区画文。	S I 8 覆土中	TP109 PL7
110	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具(10本櫛歯)による連弧文充填。	SD1 覆土中	TP110裏面赤彩
111	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(9本櫛歯)による連弧文充填。	S I 2 覆土中	TP111
112	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(5本櫛歯)による波状文充填。	S I 13 覆土中	TP112
113	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文充填。	B1e8区表土中	TP113 PL8
114	弥生土器	壺	石英・長石	にぶい黄褐	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文充填。	S I 13 覆土中	TP114
115	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による波状文充填。	S I 8 覆土中	TP115
116	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具(4本櫛歯)による縦区画と波状文充填。	S I 10 覆土中	TP116
117	弥生土器	壺	石英・長石	黒褐	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)によるスリット手法の縦区画と波状文充填。	S I 8 覆土中	TP117 PL8
118	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	浅黄	普通	頸部櫛歯状工具(6本櫛歯)によるスリット手法の縦区画と波状文充填。	S I 13 覆土中	TP118
119	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	頸部櫛歯状工具(8本櫛歯)による縦区画と波状文充填。	S I 8 覆土中	TP119
120	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	橙	普通	頸部下端櫛歯状工具(5本櫛歯)による廉状の横走文。胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。	S I 10 覆土中	TP120
121	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	頸部櫛歯状工具による波状文。頸部下端に横位の区画文とボタン状の瘤貼付。胴部附加条縄文施文。	S I 2 覆土中	TP121
122	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	頸部櫛歯状工具(4本櫛歯)で波状文充填。胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。	SD4 覆土中	TP122
123	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	SD1 覆土中	TP123
124	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐灰	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	S I 8 覆土中	TP124
125	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	S I 8 覆土中	TP125
126	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	灰褐	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	S I 8 覆土中	TP126
127	弥生土器	壺	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	SD1 覆土中	TP127
128	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	胴部附加条一種(附加2条)縄文施文。羽状構成。	S I 10 覆土中	TP128

番号	種別	器種	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
129	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	S12覆土中	TP129
130	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	S12覆土中	TP130
131	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	S12覆土中	TP131
132	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。羽状構成。	S113覆土中	TP132
133	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	褐灰	普通	胴部附加条一種（附加1条）縄文施文。	S113覆土中	TP133
134	弥生土器	壺	石英・長石・雲母	にぶい黄橙	普通	胴部附加条一種（附加2条）縄文施文。	B1e8区表土中	TP134

3 古墳時代の遺構と遺物

中期後半から後期前半の竪穴住居跡8軒が確認された。これらの遺構は、調査区南部から東部にかけて分布し、台地裾部の平坦面に立地している。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

第1号住居跡（第19図）

位置 調査区南部のC1a4区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 北西部は、第1号井戸に掘り込まれている。

規模と形状 南部の大半は調査区域外に位置し、確認された南北軸2.63m、東西軸4.61mの方形または長方形と推定される。竈の位置と南北軸をもとにした主軸方向は、N-4°-Wである。壁はわずかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は6~14cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による攪乱が著しく、硬化面は竈の付近でわずかに確認された。

竈 北壁の中央部に付設されていた。焚き口部から煙道部までの長さは80cmで、燃烧部は長軸65cm、短軸50cmの隅丸長方形を呈している。火床面の掘り込みはなく、床面と同じ高さで使用したと考えられる。火床面には焼土と赤変部分が存在したが、硬化面は確認されなかった。煙道部は壁外への掘り込みがほとんど見られず、燃烧部から外傾して立ち上がっている。袖部は最大幅が132cmで、砂質粘土で構築されている。覆土は6層からなり、焼土粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒を含む層が見られた。第7~10層は袖部の構築材で、火床部に面する内側は赤変および硬化していた。

竈土層解説

- | | |
|-----------------------------|--------------------------------|
| 1 暗赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量 | 6 灰褐色 ロームブロック・砂粒少量 |
| 2 暗赤褐色 ロームブロック・焼土粒子少量 | 7 にぶい褐色 砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子・粘土粒少量 |
| 3 暗赤褐色 焼土粒子中量, ロームブロック少量 | 8 にぶい褐色 砂粒多量, 粘土粒中量, ローム粒子微量 |
| 4 にぶい赤褐色 砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子少量 | 9 暗褐色 ロームブロック・砂粒少量, 炭化粒子極微量 |
| 5 灰褐色 焼土粒子・砂粒中量, ローム粒子少量 | 10 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子極微量 |

ピット 確認されなかった。

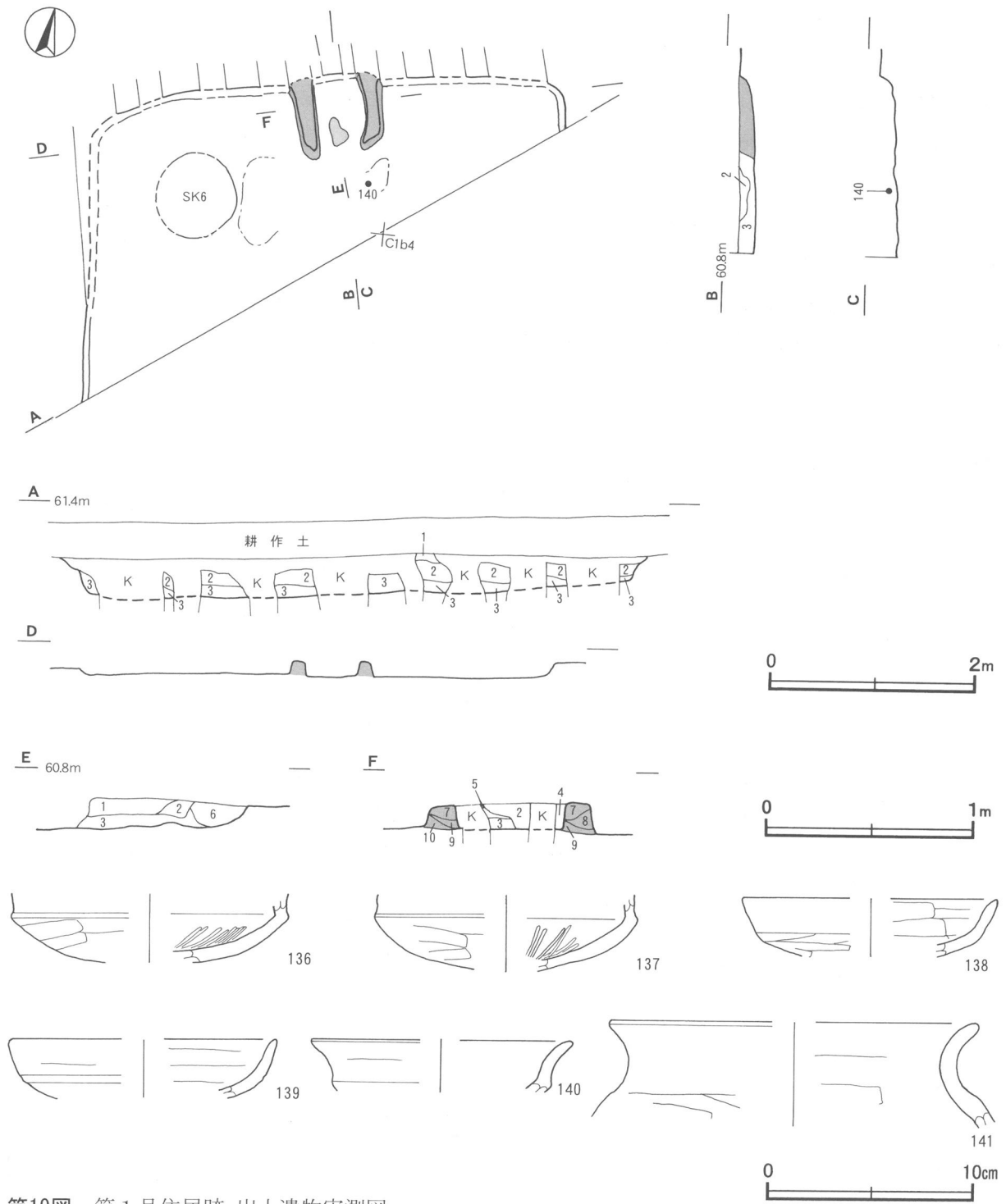
覆土 3層に分層される。攪乱部分が多いため明確でないが、全体に水平な堆積状況を示すとともに、各層には焼土粒子や炭化粒子などが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | |
|--------------------------------|-------------------------------|
| 1 黒褐色 ローム粒子微量, 炭化粒子極微量 | 3 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子少量, 焼土粒子極微量 |
| 2 黒褐色 ローム粒子少量, 炭化粒子微量, 焼土粒子極微量 | |

遺物出土状況 土師器片40点（坏類26、甕類14）、須恵器片1点（坏）と、流れ込みと考えられる弥生土器片3点が出土している。すべて小破片で、全域の覆土中から散在した状態で確認されたが、攪乱により原位置を保っているものはほとんど存在しなかった。第19図140は、北部竈前方の覆土中層から出土している。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から古墳時代後期前半と考えられる。



第19図 第1号住居跡・出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第19図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
136	土師器	坏	-	(3.3)	-	長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。	覆土中	P136 20%
137	土師器	坏	-	(3.7)	-	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。	覆土中	P137 10%
138	土師器	坏	[12.4]	(2.8)	-	赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	覆土中	P138 20%
139	土師器	坏	[13.0]	(2.9)	-	長石・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	覆土中	P139 15%
140	土師器	坏	[12.6]	(2.5)	-	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。	北部覆土中層	P140 15%
141	土師器	甕	[17.6]	(5.1)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	覆土中	P141 10%

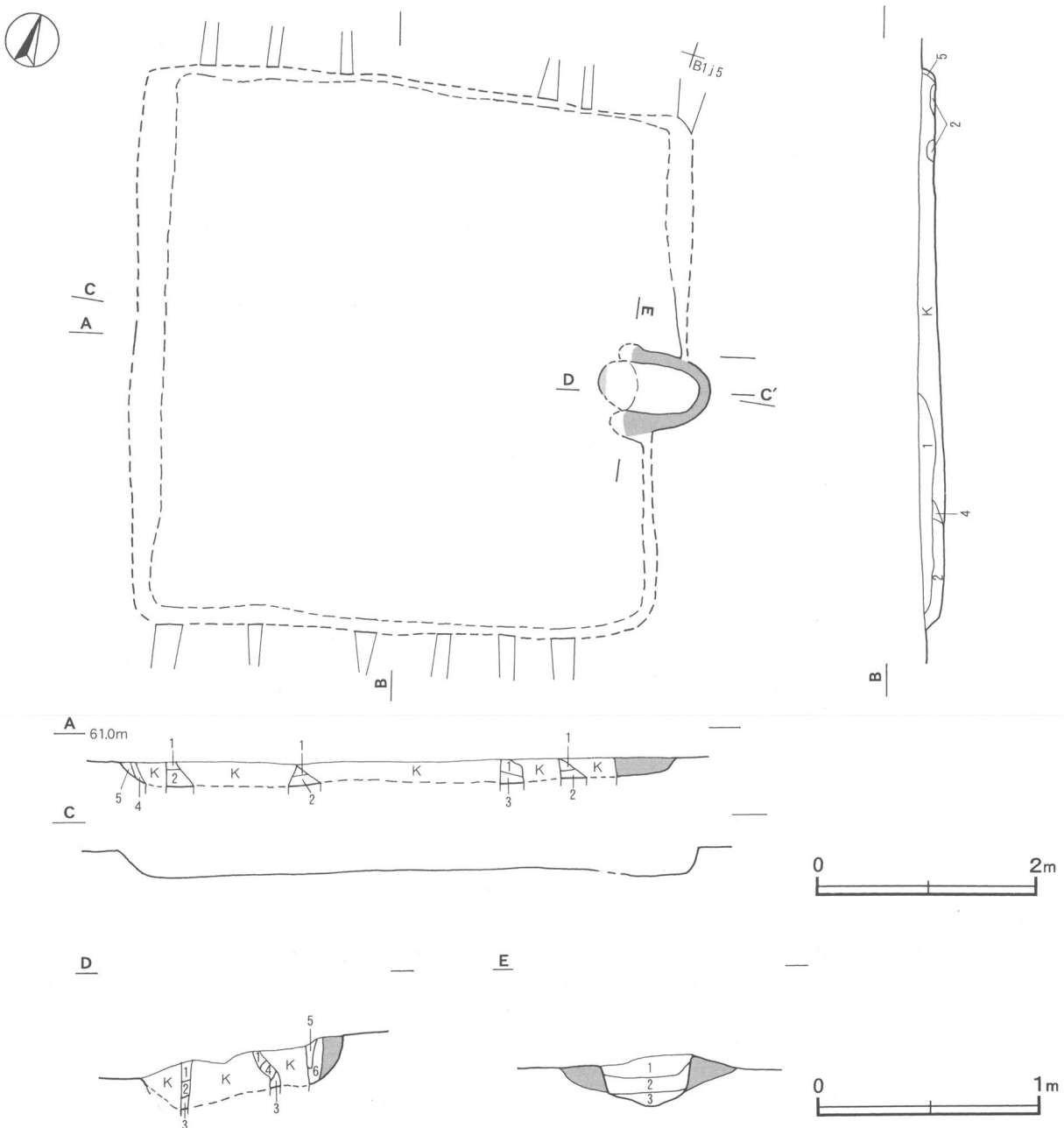
第2号住居跡（第20・21図）

位置 調査区南部のB 1 j4 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 耕作による攪乱が著しく、壁や床面の遺存状況は極めて不良である。部分的に確認された南北軸約5.09m、東西軸5.05mの方形と推定される。竈の位置と東西軸をもとにした主軸方向は、N-77°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は最大で25cmである。

床 ほぼ平坦である。耕作による攪乱が著しく、全体的に締まりは弱い。

竈 東壁の中央部に付設されていた。攪乱のため規模が明確でないが、焚き口部から煙道部までの推定される長さは95cmで、燃烧部は長径85cm、短径40cmの楕円形を呈している。火床面は床面を20cmほど掘りくぼめており、焼土と赤変部分が確認された。煙道部は壁外へ35cm掘り込み、火床部から直立している。両袖の上部は耕



第20図 第2号住居跡実測図

作により削平されているが、最大幅は90cmである。袖部は床面を掘り下げて基底部とし、砂質粘土を積み上げて構築している。覆土は6層からなり、焼土粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒を含む層が見られた。特に、第6層は袖部の構築材を含んでいる。

竈土層解説

- | | | | | | |
|---|--------|-------------------------|---|-----|--------------------|
| 1 | にぶい赤褐色 | 焼土粒子・砂粒中量, ローム粒子・炭化粒子少量 | 4 | 灰褐色 | 砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子少量 |
| 2 | 赤褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂粒中量, 炭化粒子少量 | 5 | 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・砂粒少量 |
| 3 | 暗赤褐色 | ローム粒子中量, 焼土粒子・砂粒少量 | 6 | 灰褐色 | 砂粒・粘土粒多量, ローム粒子少量 |

ピット 確認されなかった。

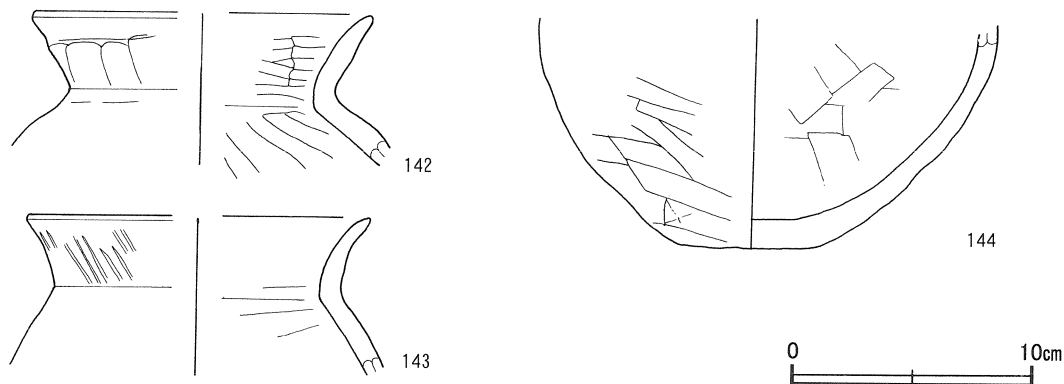
覆土 5層に分層される。攪乱部分が多いため明確でないが、全体に水平な堆積状況を示すとともに、各層には焼土粒子や炭化粒子などが含まれていることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | | | |
|---|-----|-------------------|---|-----|----------------|
| 1 | 暗褐色 | ローム粒子中量 | 4 | 褐色 | ロームブロック・焼土粒子少量 |
| 2 | 褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子極微量 | 5 | 灰褐色 | ロームブロック中量 |
| 3 | 褐色 | 焼土粒子中量, ロームブロック少量 | | | |

遺物出土状況 土師器片113点（坏類30，甕類77，埴6），須恵器片1点（坏）と、流れ込みと考えられる弥生土器片41点が出土している。すべて小破片で、全域の覆土中から散在した状態で確認された。

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から古墳時代後期前半と考えられる。



第21図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第21図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
142	土師器	甕	[13.9]	(6.3)	-	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土中	P142 5%
143	土師器	甕	[14.0]	(6.5)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。口縁部ミガキ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土中	P143 5%
144	土師器	甕	-	(9.3)	6.0	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土中	P144 5%

第4号住居跡（第22図）

位置 調査区南部のB1j6区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 南部の大半は調査区域外に位置するとともに、耕作による攪乱が著しく、壁と床面の遺存状況は極めて不良である。部分的に確認された床面は、南北軸1.10m、東西軸2.76mの方形または長方形と推定される。南北軸をもとにした主軸方向は、N-10°-Eである。壁の立ち上がりは確認されなかった。

床 攪乱部分が多く遺存状態は不良であるが、ほぼ平坦と考えられる。硬化面が部分的に確認された。

竈 確認されなかった。

ピット 確認されなかった。

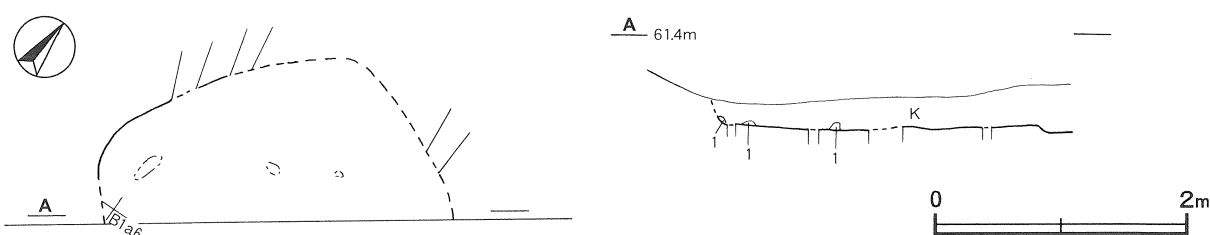
覆土 床面上部の1層だけが確認された。遺存部分がわずかで、堆積状況は不明である。

土層解説

1 褐色 ローム粒子中量, 炭化粒子極微量

遺物出土状況 土師器片2点(甕類)と, 流れ込みと考えられる弥生土器片2点が覆土中から出土している。

所見 遺存状況が不良で出土土器が細片のため, 時期の詳細は不明である。推定される主軸方向が, 調査区内の古墳時代後期の住居跡とほぼ一致することから判断して同時期と考えられる。



第22図 第4号住居跡実測図

第8号住居跡 (第23～25図)

位置 調査区中央部のB1d4区に位置し, 台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 長軸4.26m, 短軸3.83mの長方形と推定される。竈と出入口施設に伴うピットの位置をもとにした主軸方向は, N-151°-Wである。壁は外傾して立ち上がり, 確認された壁高は10~35cmである。

床 ほぼ平坦である。支柱穴と考えられるP1~P4の内側および竈の前面には, 踏み固められた硬化面が確認された。壁溝は, 北西および南東コーナー部を除いた部分にめぐっている。深さは3~10cmである。

竈 南西壁のほぼ中央部に付設されていた。焚き口部から煙道部までの長さは90cmで, 火床部は長径80cm, 短径50cmの楕円形を呈している。火床面の掘り込みは確認されず, 床面をそのまま同じ高さで使用したと考えられる。火床面には焼土と赤変部分が存在したが, 硬化面は確認されなかった。煙道部は壁外への掘り込みが見られず, 火床部から外傾して立ち上がっている。袖部は最大幅が95cmで, 砂質粘土で構築されている。覆土は4層からなり, 焼土粒子と袖部と天井部の構築材と考えられる砂粒や粘土粒を含む層が見られた。第5~9層は袖部の構築材で, 燃焼部に面する内側は硬化していた。

竈土層解説

- | | |
|---|-------------------------------------|
| 1 赤黒色 炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量 | 6 灰褐色 砂粒多量, 粘土粒中量, ローム粒子少量, 炭化粒子極微量 |
| 2 暗赤褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒・砂粒少量, ローム粒子微量 | 7 黒褐色 ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子微量 |
| 3 におい赤褐色 粘土粒・砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子少量, 炭化粒子微量 | 8 灰褐色 ローム粒子・砂粒・粘土粒少量 |
| 4 赤褐色 焼土粒子中量, ローム粒子少量, 炭化粒子微量 | 9 暗褐色 ロームブロック少量 |
| 5 灰褐色 砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒少量 | |

ピット 6か所。P1~P4の深さは35~56cmで, 規模と配置から支柱穴と考えられる。また, P5は深さ18cmで北東壁際寄りの中央部に位置し, 竈と向い合っていることなどから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。P6は径80cm, 深さ46cmで, 竈左側の南東コーナー部に位置しており, 貯蔵穴と考えられる。

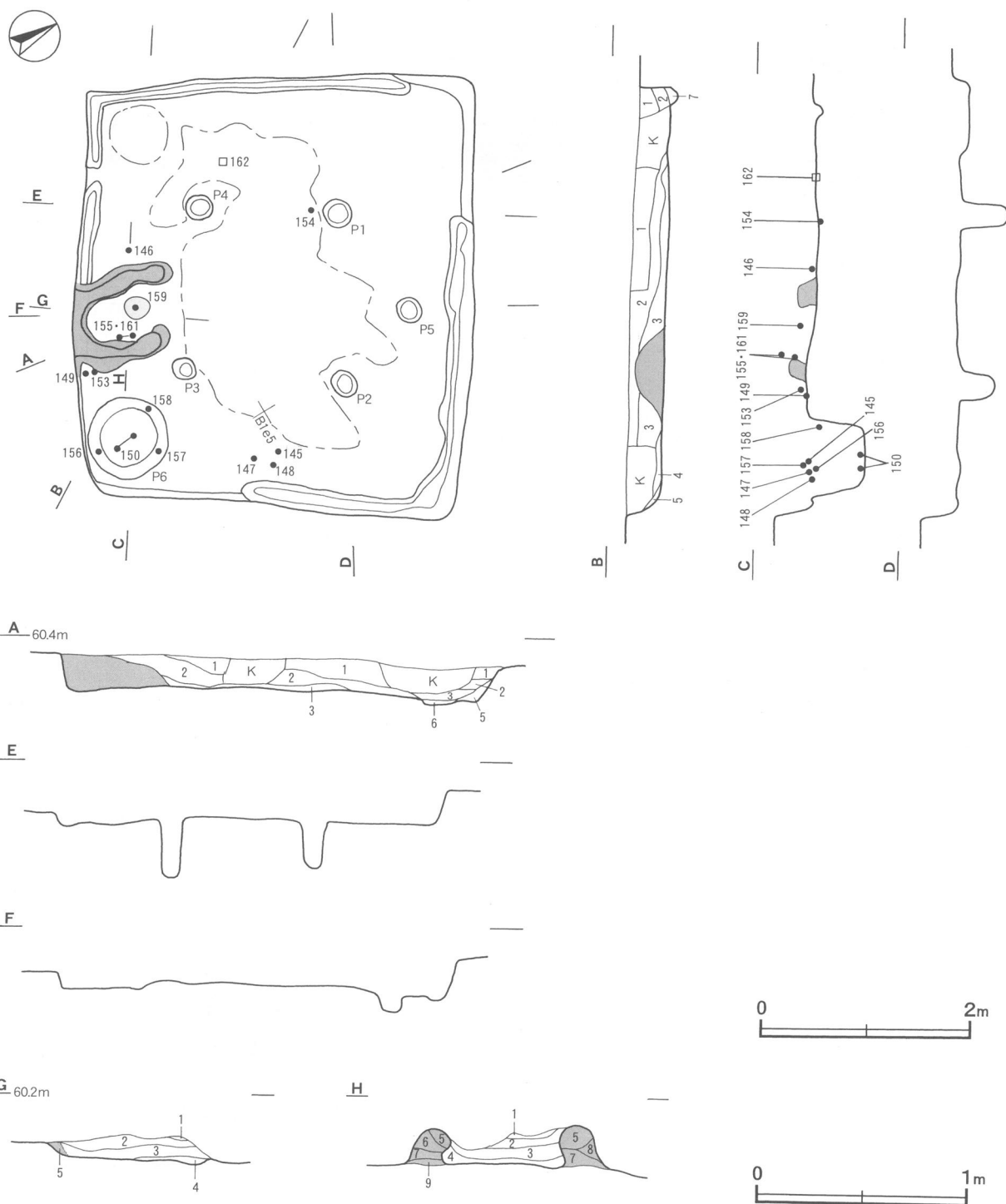
覆土 7層に分層される。全体的に褐色を呈し, 各層ともロームブロックまたはローム粒子を含んでいる。壁

際から緩やかなレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

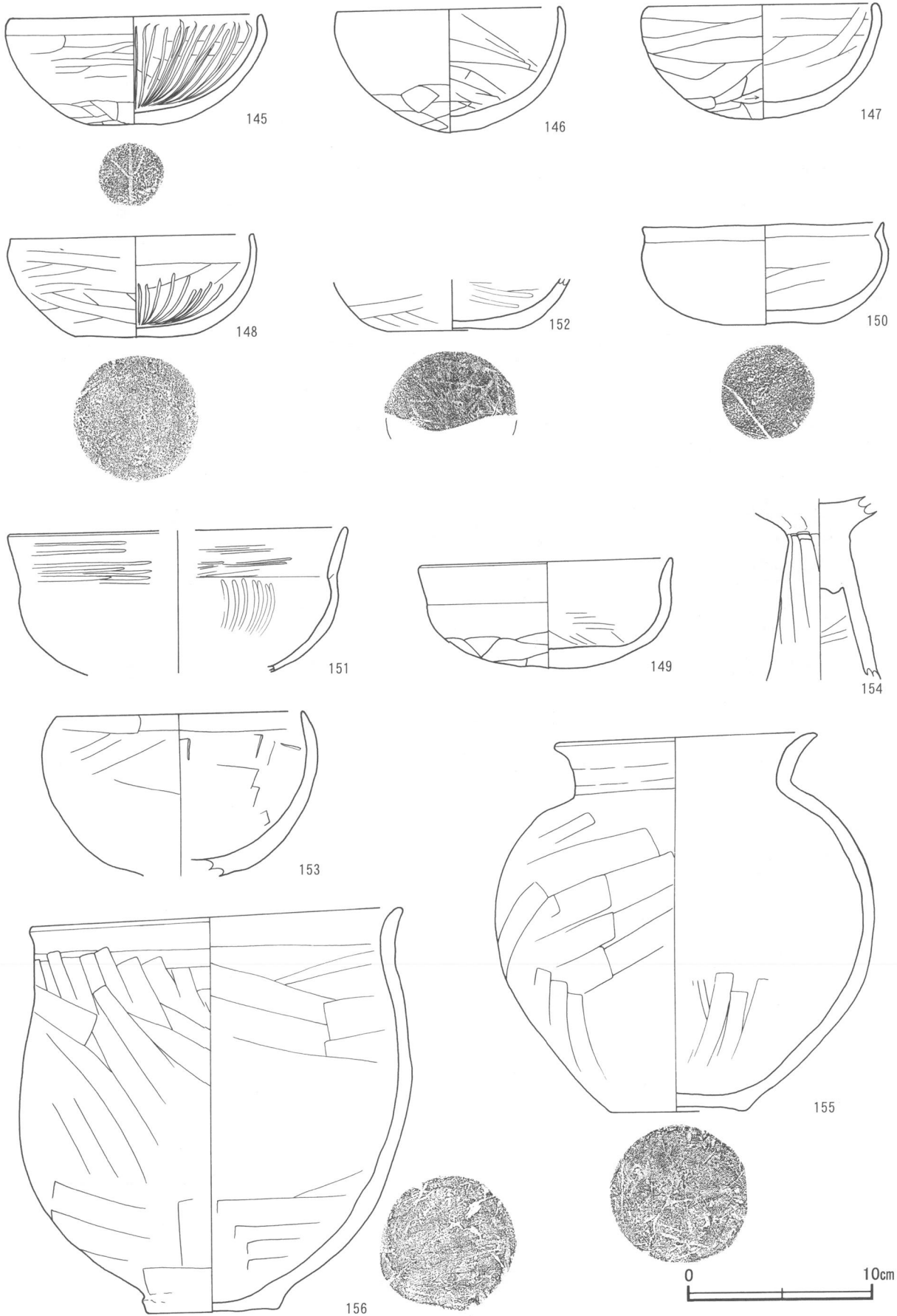
土層解説

- | | | | |
|-------|------------------------|---------|------------------------|
| 1 灰褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 5 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 灰褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子少量 | 6 にぶい褐色 | ロームブロック中量, 焼土粒子・炭化粒子少量 |
| 3 褐色 | ロームブロック・炭化粒子中量, 焼土粒子少量 | 7 にぶい褐色 | ローム粒子中量, 炭化粒子極微量 |
| 4 暗褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量 | | |

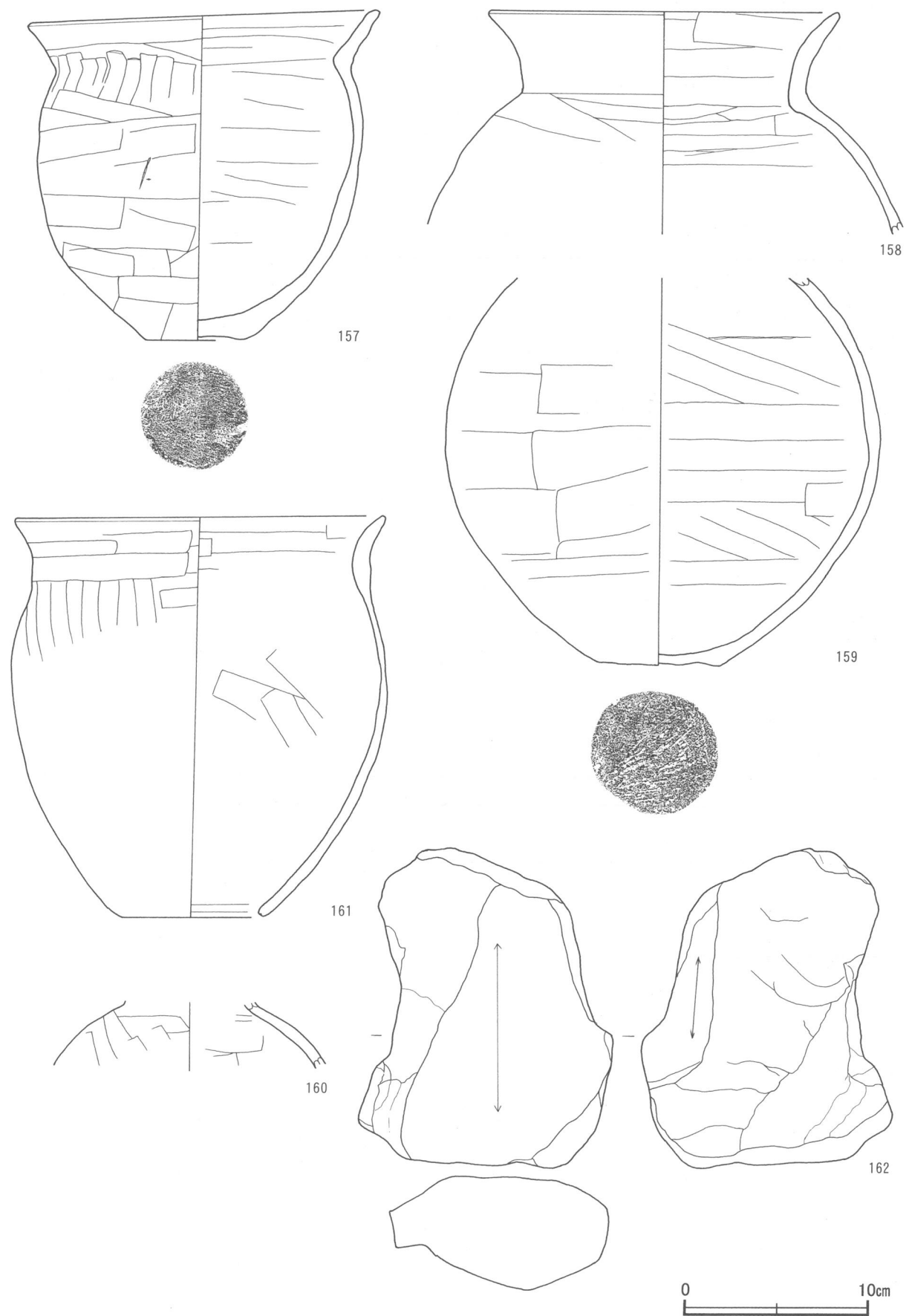
遺物出土状況 土師器片132点(坏・椀類32, 高坏1, 甕類98, 甗1)と、流れ込みと考えられる弥生土器片21点が出土している。また、自然礫2点が覆土中から出土している。遺物は、主に南西部の竈と貯蔵穴と考



第23図 第8号住居跡実測図



第24图 第8号住居跡出土遺物実測図(1)



第25図 第8号住居跡出土遺物実測図(2)

えられるP6周辺に集中し、覆土下層から床面で出土している。第24図145～149は、東部から西部の床面で、150はP6の底面で確認された。155・156、第25図157～159・161は、竈の上部と周辺部から出土している。

所見 遺構および遺物の遺存状況が比較的良好で、竈と貯蔵穴が明確に確認された。特に、竈は南西壁のほぼ中央部に付設され、壁外への掘り込みは見られなかった。形態から初期の竈と判断される。時期は、出土土器および竈の形態から、古墳時代中期末葉と考えられる。

第8号住居跡出土遺物観察表(第24・25図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
145	土師器	坏	13.8	6.0	3.0	石英・長石	明赤褐	普通	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。底部木葉痕。	東部床面	P145 PL10 100%
146	土師器	坏	12.2	6.7	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	口縁部外面横ナデ。体部外面ヘラナデ、ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	西部床面	P146 PL10 100%
147	土師器	坏	12.4	6.2	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面ヘラナデ。体部外面ヘラ削り。	東部床面	P147 PL10 100%
148	土師器	坏	13.3	5.5	6.7	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	東部床面	P148 PL10 95%
149	土師器	坏	13.6	5.9	-	石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り、ヘラナデ。体部内面ミガキ。	南西部床面	P149 PL10 100%
150	土師器	坏	13.1	5.4	5.0	石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	P6底面	P150 PL10 90%
151	土師器	坏	[18.2]	(7.7)	-	石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。	北西部覆土中	P151 35%
152	土師器	坏	-	(2.7)	[6.0]	長石・雲母	明赤褐	普通	体部外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。底部木葉痕。	北東部覆土中	P152 40%
153	土師器	椀	13.5	8.9	-	石英・長石	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部床面	P153 PL10 90%
154	土師器	高坏	-	(9.9)	-	石英・長石・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部内・外面ヘラナデ。	北西部床面	P154 30%
155	土師器	甗	13.8	20.5	7.4	石英・長石・赤色粒子	にぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	竈上部	P155 PL11 95%
156	土師器	甗	20.3	21.9	7.3	石英・長石・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	P6覆土上層	P156 90%
157	土師器	甗	18.9	17.7	5.5	石英・雲母	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	P6覆土上層	P157 PL10 95%
158	土師器	甗	18.8	(12.0)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	P6覆土上層	P158 10%
159	土師器	甗	-	(20.9)	6.5	石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	体部内・外面ヘラナデ。	竈覆土中	P159 40%
160	土師器	壺	-	(3.7)	-	石英・長石	橙	普通	体部内・外面ヘラナデ。	北西部覆土中	P160 10%
161	土師器	甗	19.7	21.6	7.5	石英・長石	にぶい橙	普通	無底式。口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	竈上部	P161 PL10 95%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
162	砥石	17.2	13.8	6.2	1970	砂岩	自然礫素材。表裏2面を砥面に使用。	北西部床面	Q162

第10号住居跡(第26図)

位置 調査区北部のA1i8区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

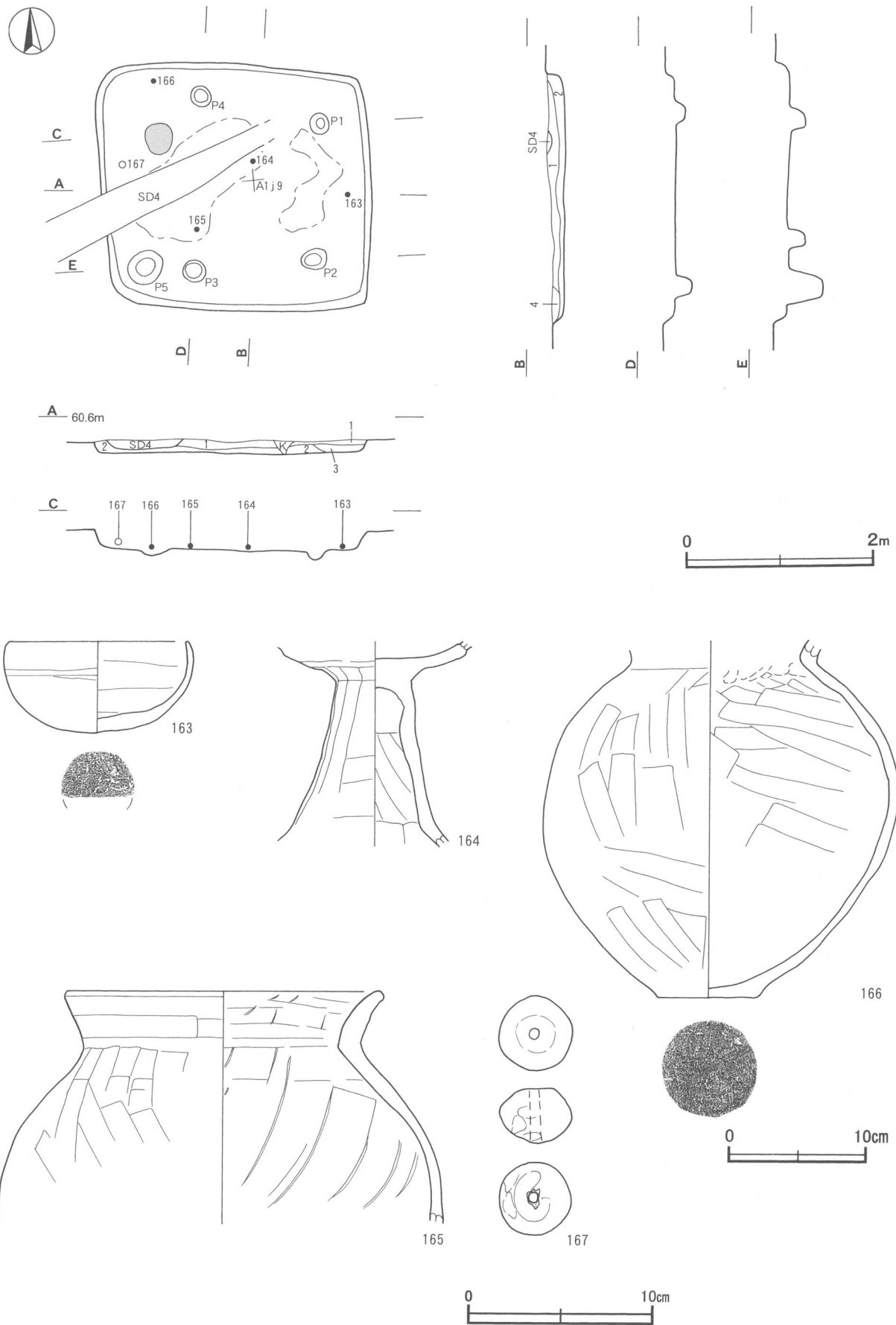
重複関係 中央部やや北寄りの東側から西側は、第4号溝に掘り込まれている。

規模と形状 長軸2.88m、短軸2.66mの長方形である。南北軸をもとにした主軸方向は、N-8°-Eである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は10~20cmである。

床 ほぼ平坦である。主柱穴と考えられるP1~P4の内側に、部分的ではあるがよく踏み固められた硬化面が確認された。壁溝は、確認されなかった。

炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。径28~34cmのほぼ円形の範囲内に、わずかに焼土が確認された。掘り込みはなく、床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床に硬化面は確認されなかった。

ピット 5か所。P1~P4の深さは12~20cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。また、P5は深さ38cmで、南西コーナー部の壁際に位置しているが、性格は不明である。



第26图 第10号住居跡・出土遺物実測図

覆土 4層に分層される。各層に焼土粒子と炭化物または炭化粒子を含み、ブロック状の堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|-----------------------|-------|----------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 3 黒褐色 | ロームブロック・炭化物少量 |
| 2 暗褐色 | ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量 | 4 黒褐色 | ローム粒子・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 |

遺物出土状況 土師器片47点(坏類8, 高坏2, 甕類37), 土製品1点(土玉)と, 流れ込みと考えられる弥生土器片13点が出土している。第26図163~166は, いずれも床面から出土している。

所見 時期は, 出土土器及び遺構の形態から, 古墳時代中期後半と考えられる。

第10号住居跡出土遺物観察表(第26図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
163	土師器	坏	[9.6]	4.9	3.6	長石・雲母	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	東部床面	P163 30% PL11
164	土師器	高坏	-	(11.0)	-	石英・長石	明赤褐	普通	脚部内・外面ヘラナデ。	中央部床面	P164 50%
165	土師器	甕	18.6	(12.5)	-	石英・長石	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	中央部床面	P165 30%
166	土師器	甕	-	(25.7)	7.0	石英・雲母	にぶい褐	普通	頸部外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。頸部内面指頭押圧。	北西部床面	P166 50%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
167	土玉	3.9	4.0	3.0	40	石英・長石	にぶい橙	普通	上下面平坦。指頭ナデ。孔径0.55。片面穿孔。	西部床面	DP167 PL9

第11号住居跡(第27・28図)

位置 調査区北部のA1i7区に位置し, 台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 北側部分は第2号溝に, 南側コーナー部付近は第4号溝に, それぞれ掘り込まれている。また, 北東壁の一部は, 攪乱のため遺存していない。

規模と形状 長軸4.90m, 短軸4.30mの長方形である。炉と出入口施設に伴うピットの位置と南北軸をもとにした主軸方向は, N-41°-Wである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり, 確認された壁高は12~20cmである。

床 ほぼ平坦である。中央部の支柱穴と考えられるP1~P4の内側から南側にかけて, 部分的ではあるがよく踏み固められた硬化面が確認された。また, 南東部でわずかに焼土の散布と炭化材がわずかに確認された。

炉 中央部からやや北西寄りに付設されている。長径42cm, 短径26cmの楕円形の範囲内に, 焼土が確認された。掘り込みはなく, 床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床にはわずかに硬化面が確認された。

ピット 6か所。P1~P4の深さは35~58cmで, その規模と配置から支柱穴と考えられる。P5は深さ18cmで南東壁際寄りの中央部に位置し, 竈と向かい合っていることなどから, 出入口施設に伴うピットと考えられる。また, P6は深さ14cmで北東部の壁際に位置しているが, 性格は不明である。

覆土 5層に分層される。ほとんどの層に焼土粒子と炭化粒子を含み, ブロック状の堆積状況を示していることから, 人為堆積と考えられる。

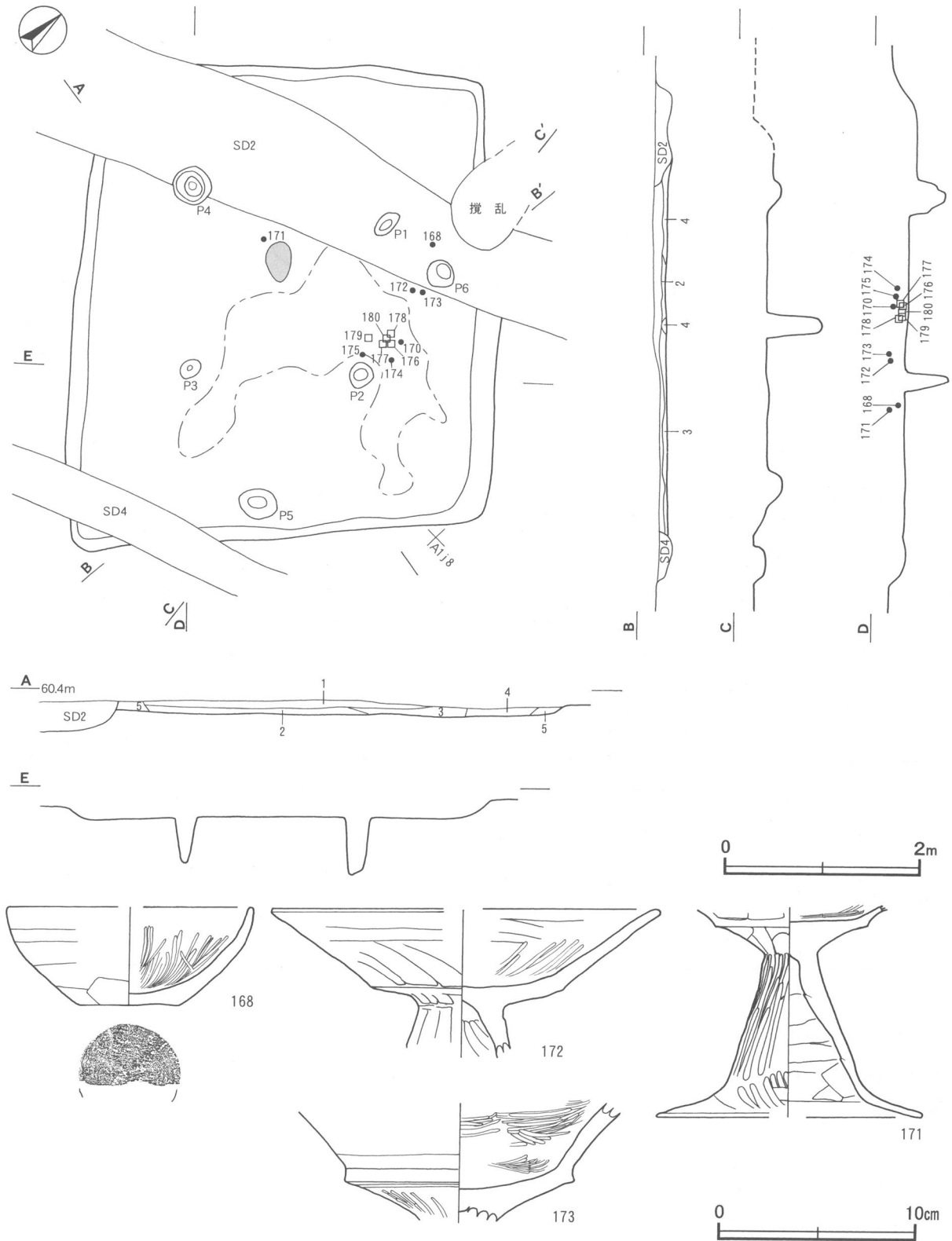
土層解説

- | | | | |
|-------|--------------------------|-------|-------------------------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 | 4 灰褐色 | ロームブロック少量, 焼土粒子・炭化粒子極微量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子少量, 焼土粒子微量, 炭化粒子極微量 | 5 褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 黒褐色 | ローム粒子・炭化材・炭化粒子少量, 焼土粒子微量 | | |

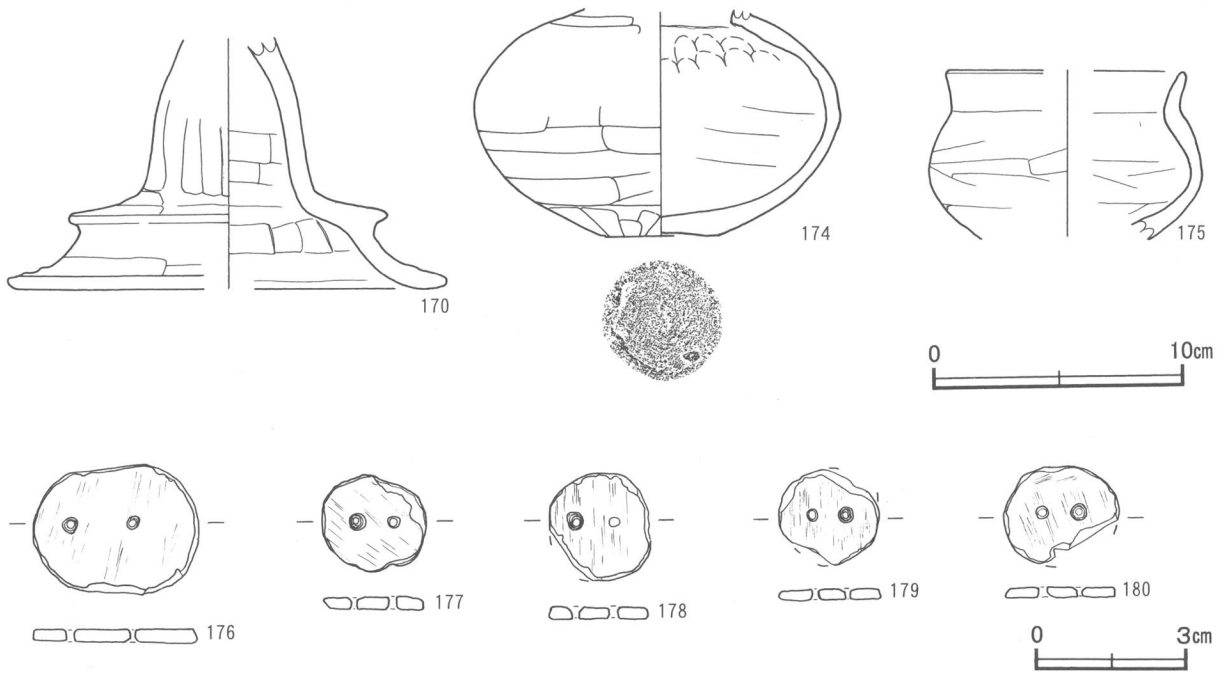
遺物出土状況 土師器片28点(坏6, 高坏13, 埴3, 甕類6), 須恵器片3点(坏1, 甕類2), 石製品5点(双孔円板), 剥片1点と, 流れ込みと考えられる弥生土器片6点が出土している。また, 台石と考えられる人頭大の礫1点を含む自然礫7点が覆土中から出土している。第27図171~173, 第28図170・174・175は, 主に中

央部から北東部に集中して、覆土中層から下層にかけて破損した状態で確認された。176～180は、北東部の床面からまとめて出土している。

所見 高杯の出土割合が高いことや双孔円板が出土していることなどから、祭祀に関わる行為がなされた住居跡と推定される。時期は、出土土器及び遺構の形態から、古墳時代中期後葉と考えられる。



第27図 第11号住居跡・出土遺物実測図



第28図 第11号住居跡出土遺物実測図

第11号住居跡出土遺物観察表(第27・28図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
168	土師器	坏	[12.3]	5.0	[5.0]	長石・赤色粒子	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り。体部内面ヘラナデ後、ミガキ。	北東部覆土下層	P168 30%
170	土師器	高坏	-	(10.0)	[17.3]	石英・長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部内・外面ヘラナデ。脚部内面・外面横ナデ。	北東部覆土下層	P170 25%
171	土師器	高坏	-	(10.8)	[13.7]	雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	坏部外面ヘラナデ。坏部内面・脚部外面ミガキ。脚部内面ヘラナデ。	中央部覆土中層	P171 50%
172	土師器	高坏	[18.0]	(7.8)	-	石英・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。坏部・脚部外面ヘラナデ。坏部内面ミガキ。	北東部覆土中層	P172 20%
173	土師器	高坏	-	(6.0)	-	石英・長石・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	坏部外面ヘラナデ。坏部内面・脚部外面ミガキ。	北東部覆土中層	P173 10%
174	土師器	埴	-	(8.9)	4.6	石英・長石・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	体部内・外面ヘラナデ。体部内面指頭圧痕。	北東部覆土下層	P174 55%
175	土師器	甕	[9.6]	(6.7)	-	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	北東部覆土下層	P175 40%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
176	双孔円板	2.47	3.28	0.31	4.64	滑石	孔径0.15。2孔とも両面から穿孔。両面斜位の研磨。	北東部床面	Q176 PL12
177	双孔円板	1.89	2.07	0.25	1.72	滑石	孔径0.1。1孔ずつ異方向から穿孔。両面斜位の研磨。	北東部床面	Q177 PL12
178	双孔円板	2.19	2.00	0.25	(1.94)	滑石	孔径0.15。1孔ずつ異方向から穿孔。表両縦位、裏面斜位の研磨。	北東部床面	Q178 PL12
179	双孔円板	1.85	1.95	0.21	(1.28)	滑石	孔径0.1。2孔とも両面から穿孔。表両縦位、裏面斜位の研磨。	北東部床面	Q179 PL12
180	双孔円板	1.90	2.22	0.20	(1.36)	滑石	孔径0.15。2孔とも両面から穿孔。両面斜位の研磨。	北東部床面	Q180 PL12

第12号住居跡(第29図)

位置 調査区北部のA1g8区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 中央部からやや南西寄りの部分は、第2号土坑を埋め戻して床面を構築している。南側の床面と壁は削平されており、遺存状況は不良である。東側部分は調査区域外に延びている。

規模と形状 南北軸3.40m、東西軸3.86mが確認され、北西コーナー部の形状から、平面形は方形または長方形と推定される。南北軸をもとにした主軸方向は、N-24°-Eである。壁は緩やかに外傾して立ち上がり、確認された壁高は9~12cmである。

床 ほぼ平坦である。硬化面および壁溝は、確認されなかった。

炉 確認されなかった。

ピット 確認されなかった。

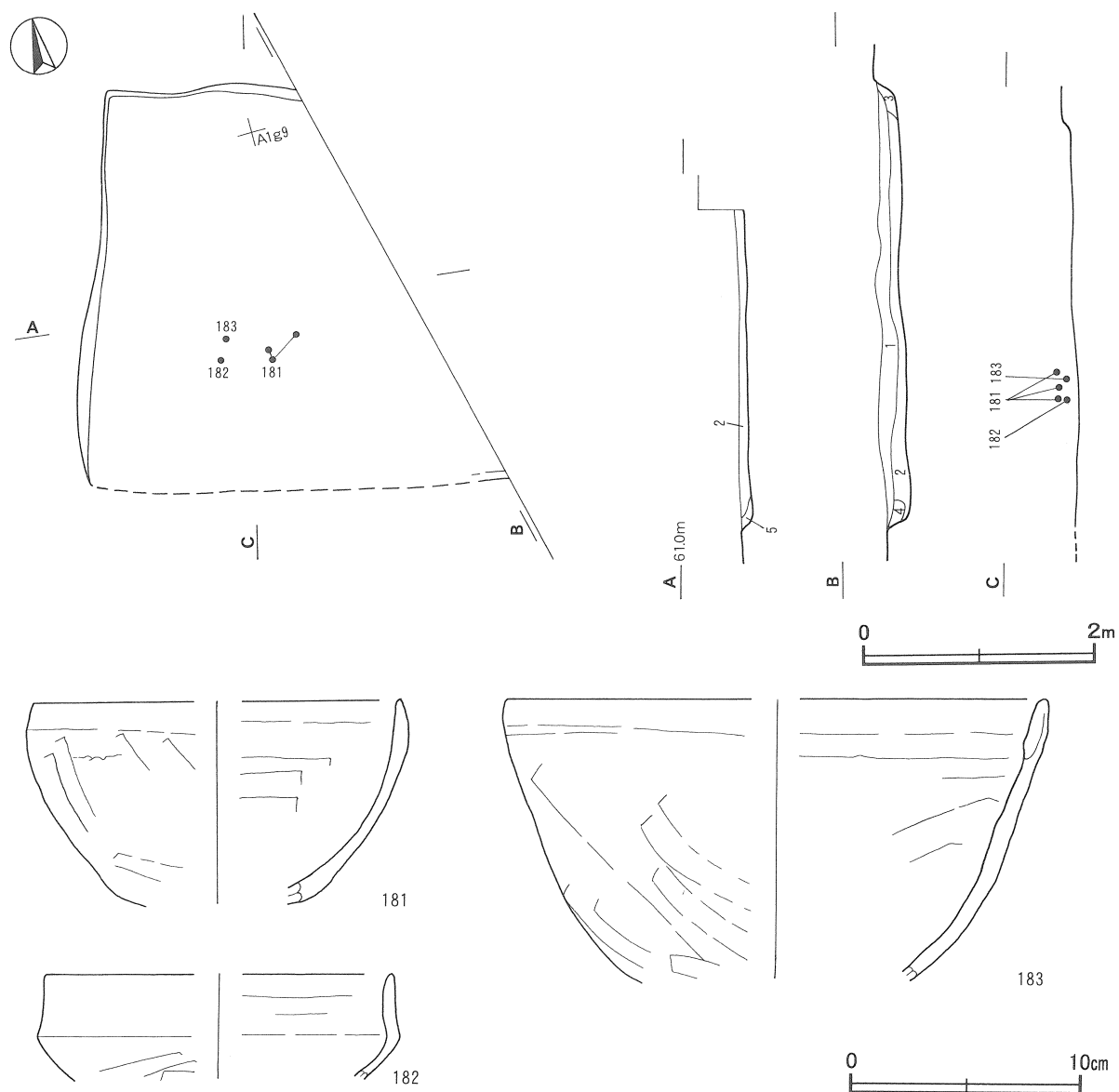
覆土 5層に分層される。各層にロームブロックまたはローム粒子を含み、壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|----------------|------|-----------|
| 1 暗褐色 | ローム粒子少量、炭化粒子微量 | 4 褐色 | ロームブロック中量 |
| 2 灰褐色 | ローム粒子中量 | 5 褐色 | ロームブロック少量 |
| 3 灰褐色 | ローム粒子微量 | | |

遺物出土状況 土師器片29点（坏3，甕類26）が出土している。遺物はわずかで、出土した土器はいずれも細片である。第29図181～183は、中央部からやや南西寄りの覆土下層から、比較的まとまって出土している。

所見 遺存状況が不良であり、出土遺物も少ないため詳細は不明であるが、出土土器および推定される主軸方向が調査区内の同時期の住居跡と一致することなどから、時期は古墳時代後期前半と考えられる。



第29図 第12号住居跡・出土遺物実測図

第12号住居跡出土遺物観察表(第29図)

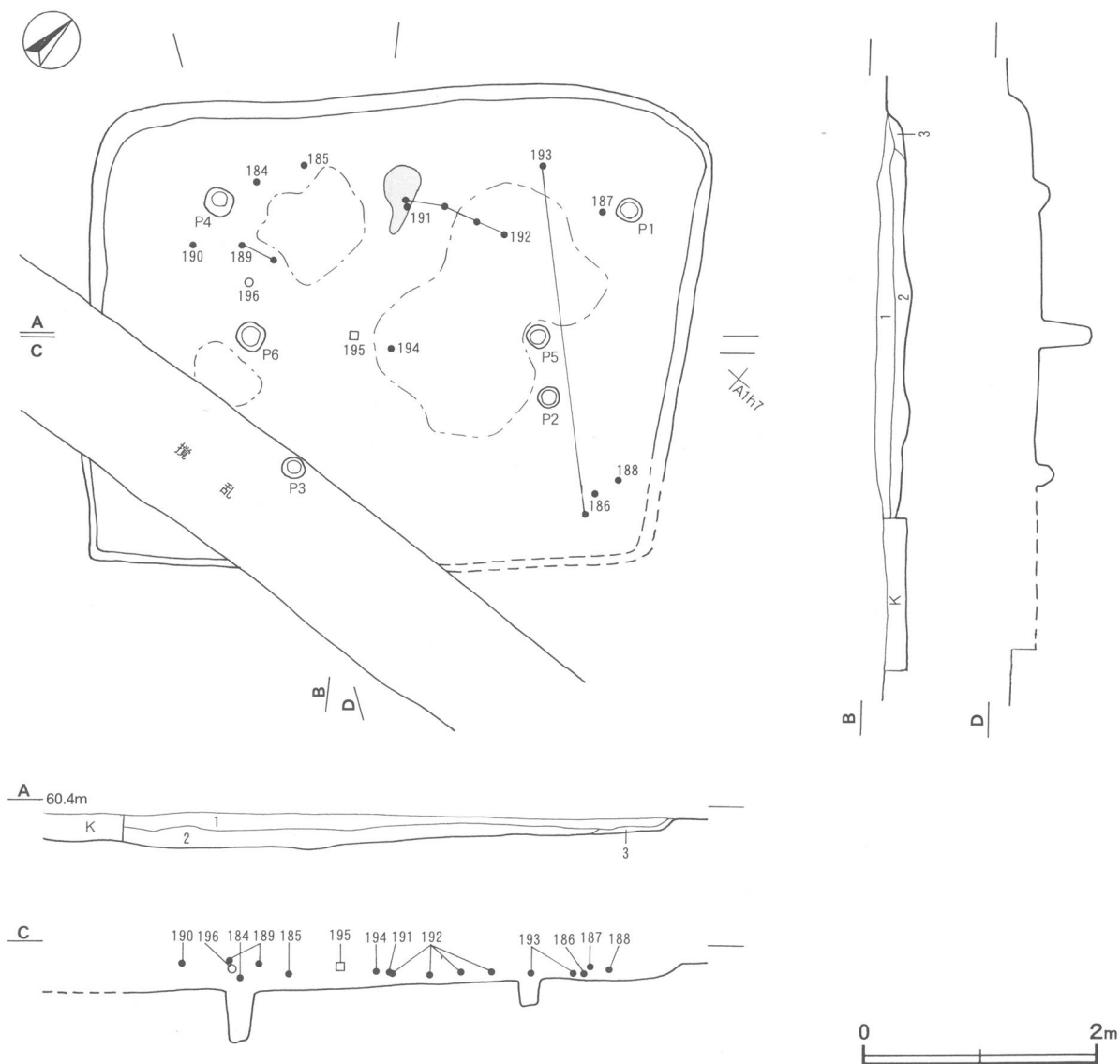
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
181	土師器	坏	[15.9]	8.9	-	石英・長石・雲母	こぶい褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下層	P181 30%
182	土師器	坏	[14.9]	(2.0)	-	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下層	P182 10%
183	土師器	鉢	[23.5]	(12.2)	-	石英・長石・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	南東部覆土下層	P183 20%

第13号住居跡 (第30・31図)

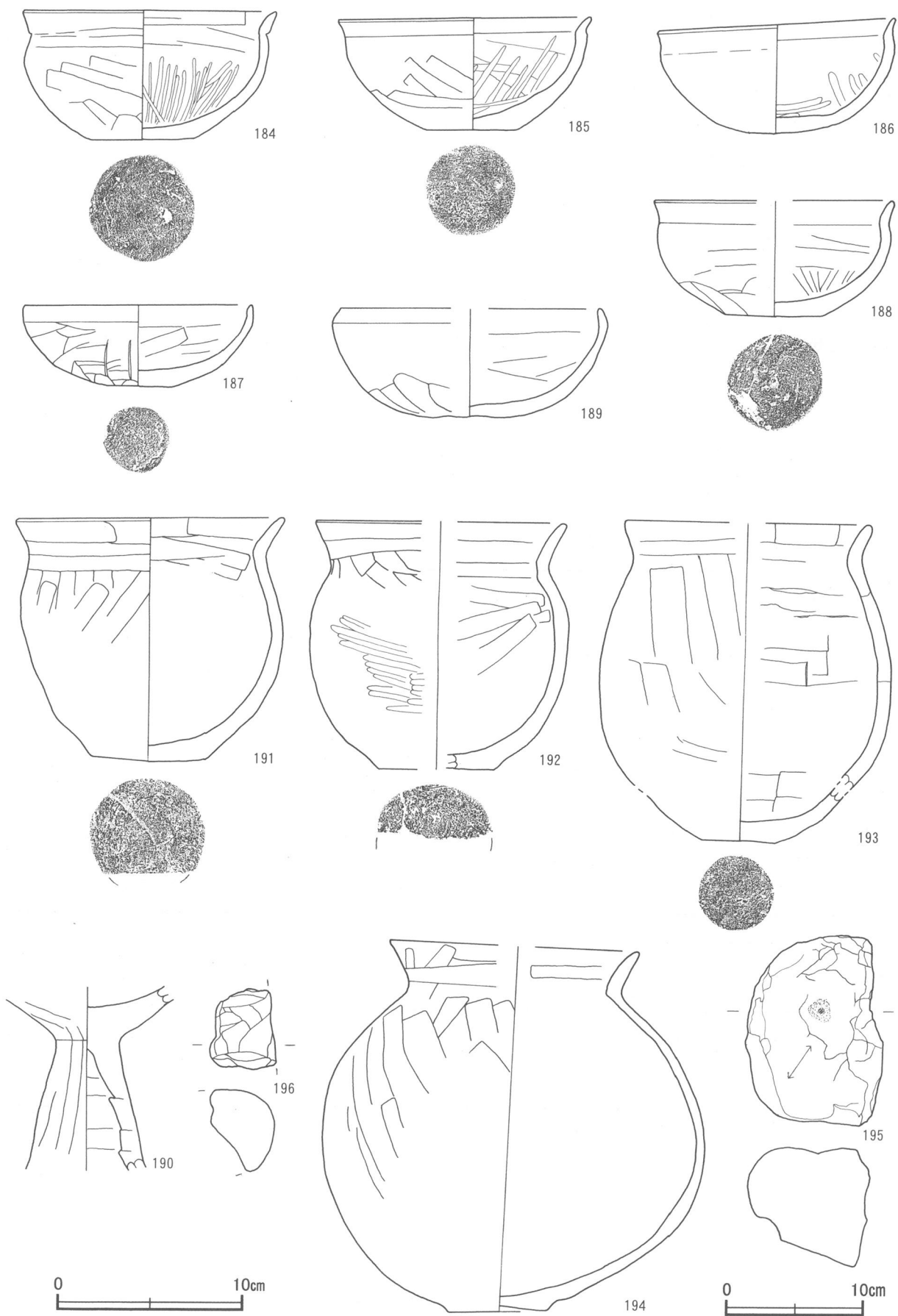
位置 調査区北部のA 1 h6 区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

規模と形状 南東コーナー部と南壁の一部が遺存していないが、長軸5.16m、短軸4.01mの隅丸長方形である。炉の位置と南北軸をもとにした主軸方向は、N-43°-Wである。壁は外傾して立ち上がり、確認された壁高は、13~18cmである。

床 ほぼ平坦である。炉の周囲および柱穴と考えられるP1~P6の内側を中心に、部分的ではあるがよく踏



第30図 第13号住居跡実測図



第31图 第13号住居跡出土遺物実測図

み固められた硬化面が確認された。また、焼土と炭化物の散布が、主に壁際付近で確認された。

炉 中央部から北西寄りに付設されている。長径60cm、短径30cmの長楕円形の範囲内に、焼土が確認された。掘り込みはなく、床面を直接炉床とした地床炉と考えられる。炉床にはわずかに硬化面が確認された。

ピット 6か所。P1～P4の深さは12～25cmで、その規模と配置から主柱穴と考えられる。P5とP6は深さ25cmと45cmで、棟持ち柱の柱穴または補助柱穴の可能性が考えられる。

覆土 3層に分層される。各層にローム粒子またはロームブロックを含み、壁際からレンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 ローム粒子少量、焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 ロームブロック・焼土粒子少量、炭化粒子微量
- 3 灰褐色 ロームブロック中量、焼土粒子極微量

遺物出土状況 土師器片106点（坏類31，高坏4，甕類71），土製品3点（支脚1，不明2），石製品1点（砥石）と、流れ込みと考えられる縄文土器片1点，弥生土器片6点が出土している。また、自然礫2点が覆土中から出土している。遺物量は比較的多く、主に中央部からやや北寄りの範囲を中心に、覆土下層から床面で確認された。第31図184～188・193は、床面から出土している

所見 時期は、出土土器及び遺構の形態から、古墳時代中期後葉と考えられる。

第13号住居跡出土遺物観察表(第31図)

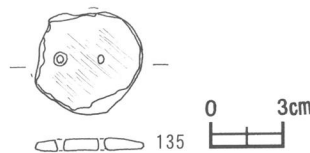
番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
184	土師器	坏	13.8	7.0	5.5	石英・雲母	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り。体部内面ミガキ。	北西部床面	P184 PL11 100%
185	土師器	坏	13.7	6.2	4.8	石英・長石・雲母	橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。	北西部床面	P185 PL11 100%
186	土師器	坏	13.0	6.3	-	石英・長石・赤色粒子	黒褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。体部内面ミガキ。	南東部床面	P186 PL11 95%
187	土師器	坏	12.4	4.5	3.4	長石・雲母・赤色粒子	灰黄褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り。体部内・外面ヘラナデ。	北東部床面	P187 PL11 90%
188	土師器	坏	[13.0]	6.3	5.1	石英・雲母	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り。体部内・外面ヘラナデ。	北東部床面	P188 PL11 60%
189	土師器	坏	[14.1]	5.9	-	長石・赤色粒子	にぶい橙	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面下端ヘラ削り。体部内面ヘラナデ。	北西部覆土中層	P189 PL11 30%
190	土師器	高坏	-	[10.0]	-	石英・雲母・赤色粒子	明赤褐	普通	脚部外面ヘラナデ。脚部内面輪積痕。	北西部覆土中層	P190 PL11 60%
191	土師器	甕	14.6	13.5	6.0	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	北部覆土下層	P191 PL11 75%
192	土師器	甕	[13.4]	13.5	[6.2]	石英・赤色粒子	明赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部外面ヘラナデ後、ミガキ。体部内面ヘラナデ。	北部覆土下層	P192 PL11 40%
193	土師器	甕	[13.2]	[15.4]	4.0	石英・長石・赤色粒子	灰褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	北東部・南東部床面	P193 PL11 30%
194	土師器	甕	[17.8]	26.7	7.0	石英・長石	にぶい赤褐	普通	口縁部内・外面横ナデ。体部内・外面ヘラナデ。	中央部覆土下層	P194 PL11 80%

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
195	砥石	14.0	9.9	8.8	1590	安山岩	自然礫素材。表面を砥面に使用。凹石の転用カ。	中央部覆土下層	Q195

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	胎土	色調	焼成	特徴	出土位置	備考
196	支脚	(4.4)	(3.7)	(4.3)	(62)	石英・長石	にぶい褐	普通	指頭ナデによる成形。	北西部覆土下層	DP196

(2) 遺構外出土遺物 (第32図)

ここでは、調査区内の表土中から出土した遺物のうち、特徴的なものを実測図と観察表で記載する。



第32図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
135	双孔円板	1.96	2.22	0.25	1.92	滑石	孔径0.1。1孔ずつ異方向から穿孔。両面斜位の研磨。	表土中	Q135 PL12

4 中世以降の遺構と遺物

井戸跡1基と溝跡4条が確認された。以下、遺構と主な出土遺物について記述する。なお、溝跡の平面図については、全体図で示すことにする。

(1) 井戸跡

第1号井戸跡 (SK6) (第33図)

位置 調査区南西部のC1b4区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

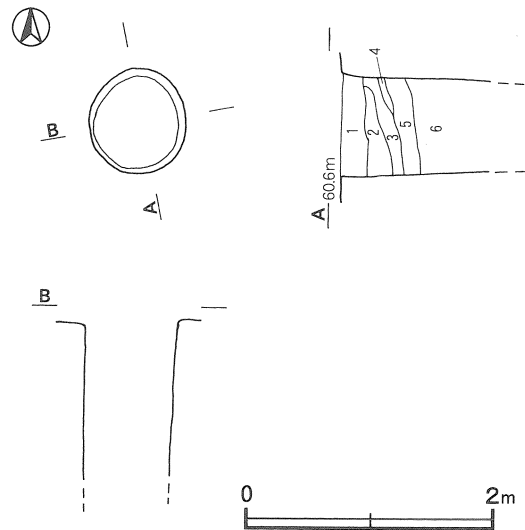
重複関係 第1号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 平面形は長径0.83m、短径0.79mの円形である。確認面から円筒状に掘り込まれているが、湧水のため、深さ1.30mまでしか明らかにできなかった。ローム層および粘土層を掘り抜いていることが、壁面の観察から確認された。

覆土 6層に分層される。全体に水平な堆積状況を示していることから、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰褐色 ロームブロック・鹿沼バミス中量
- 2 黒褐色 ローム粒子中量
- 3 黒褐色 焼土粒子少量, ローム粒子微量
- 4 黒褐色 焼土粒子・ローム粒子微量
- 5 黒褐色 ローム粒子少量
- 6 黒褐色 ロームブロック少量



第33図 第1号井戸跡実測図

遺物出土状況 出土していない。

所見 時期は、出土遺物がないため明確ではないが、古墳時代の第1号住居跡を掘り込んでいることや遺構の形態などから、中世以降と考えられる。

(2) 溝跡

第1号溝跡 (第4・34図)

位置 調査区南東部から西部のB1f2～B2g2区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 第7号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認した長さは40.20mである。調査区南東側から西側へ向かって弧状に曲線を描きながら、N-75°-Eの方向へ延びている。上幅0.51～1.98m、下幅0.16～0.49m、深さ20～46cmで、幅と深さは南東側から西側に向かって大きくなっている。なだらかに立ち上がり、底面は皿状を呈している。

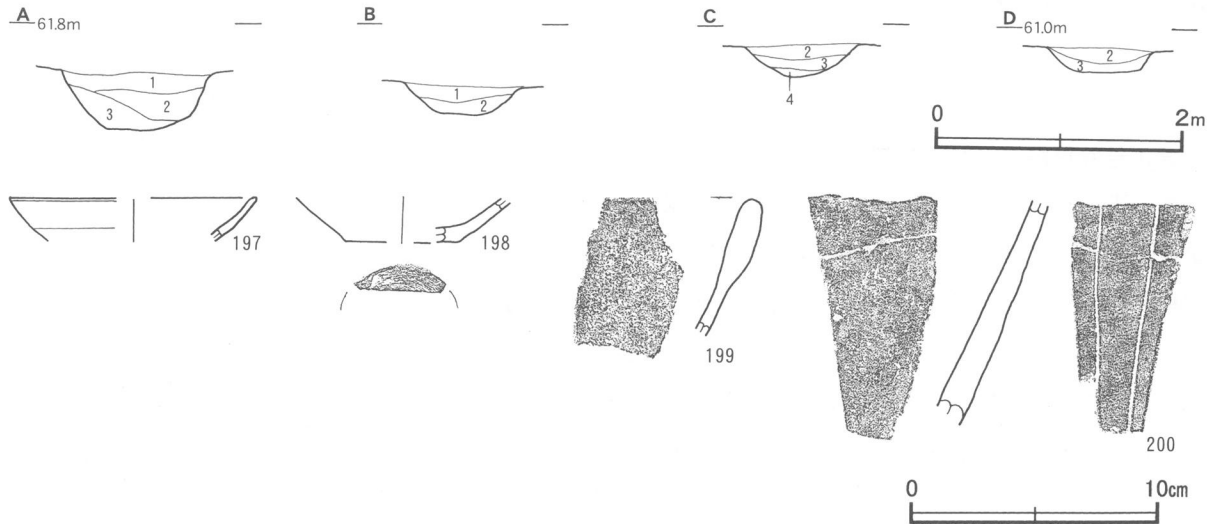
覆土 4層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 極暗褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 黒褐色 炭化粒子少量, ロームブロック微量
- 3 黒褐色 ロームブロック微量, 焼土粒子極微量
- 4 灰褐色 ロームブロック中量

遺物出土状況 土師質土器片3点（小皿2，鍋1），陶器片1点（搦鉢）と，流れ込みと考えられる縄文土器片2点，弥生土器片4点，土師器片35点，須恵器片1点が出土している。第34図197～200は，南東部の覆土中から出土したものである。

所見 平面や断面の形状から，排水溝または流水溝と考えられる。時期は，古墳時代の第7号住居跡を掘り込んでいることや出土遺物などから，中世以降と考えられる。



第34図 第1号溝跡土層・出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第32図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
197	土師質土器	小皿	[9.8]	(1.8)	-	長石・雲母	にぶい橙	普通	ロクロ成形。	中央部覆土中	P197 5%
198	土師質土器	小皿	-	(1.8)	[4.6]	石英・長石・雲母・赤色粒子	にぶい黄橙	普通	ロクロ成形。底部回転糸切り。	東部覆土中層	P198 5%
199	土師質土器	鍋				石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内・外面，体部内・外面ヘラナデ。	東部覆土中層	TP199
200	土師質土器	搦鉢				石英・長石・雲母	にぶい褐	普通	口縁部内面播り目。体部外面ヘラナデ。	東部覆土中層	TP200

第2号溝跡（第4・35図）

位置 調査区北部から北西部のA1f7～A1j4区に位置し，台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 第11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認した長さは26.90mである。調査区北側から南側へ直線状にN-0°の方向で10.50m延び，向きを変えて南西側へ直線状にN-68°-Eの方向で16.40m延びている。上幅0.98～1.40m，下幅0.60～0.92m，深さ13～43cmで，幅と深さは北側から南西側に向かってやや大きくなっている。なだらかに立ち上がり，底面は皿状を呈している。

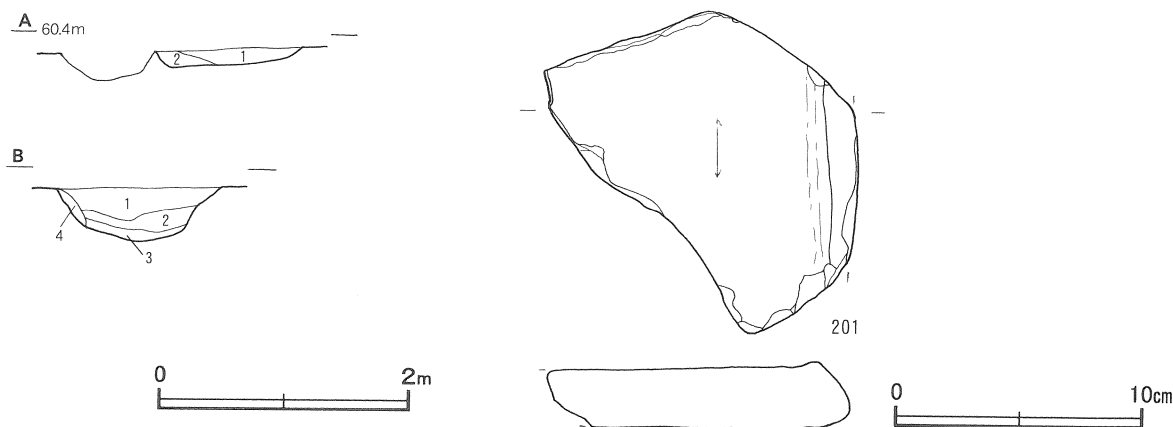
覆土 3層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 灰褐色 砂粒中量，ローム粒子少量
- 2 灰褐色 ロームブロック・砂粒少量
- 3 にぶい褐色 ロームブロック中量
- 4 暗褐色 ロームブロック少量

遺物出土状況 伴出の遺物は明確でないが、石製品1点（砥石）と、流れ込みと考えられる弥生土器片7点、土師器片31点、須恵器片1点、石器1点（凹石）が出土している。第35図201は、南東部の覆土中から出土したものである。

所見 平面や断面の形状から、区画溝または排水溝と考えられる。時期は、古墳時代の第11号住居跡を掘り込んでいることや出土遺物などから、中世以降と考えられる。



第35図 第2号溝跡土層・出土遺物実測図

第2号溝跡出土遺物観察表(第35図)

番号	種別	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
201	砥石	(13.1)	(12.7)	2.7	(559)	安山岩	自然礫素材。表面を砥面に使用。	覆土中	Q201 PL12

第3号溝跡（第4・36図）

位置 調査区北部のA 1 g7区に位置し、台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 第2号溝跡に掘り込まれている。

規模と形状 確認した長さは4.00mである。調査区北側から南側へ直線状にN-5°-Wの方向で延びている。上幅0.40~0.77m，下幅0.22~0.52m，深さ24cmで，なだらかに立ち上がり，底面は皿状を呈している。

覆土 2層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから，自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐灰色 ローム粒子微量
- 2 褐灰色 ロームブロック少量



第36図 第3号溝跡土層実測図

遺物出土状況 出土していない。

所見 平面や断面の形状から，区画溝または排水溝と考えられる。時期は，並行している第2号溝に掘り込まれていることから，ほぼ同時期中世以降と考えられる。

第4号溝跡（第4・37図）

位置 調査区北部から北西部のA 1 j8 ~ B 1 c2区に位置し，台地裾部の平坦面に立地している。

重複関係 第10・11号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 確認した長さは25.40mである。調査区北東側から南西側へ直線状にN-65°-Eの方向で延びて

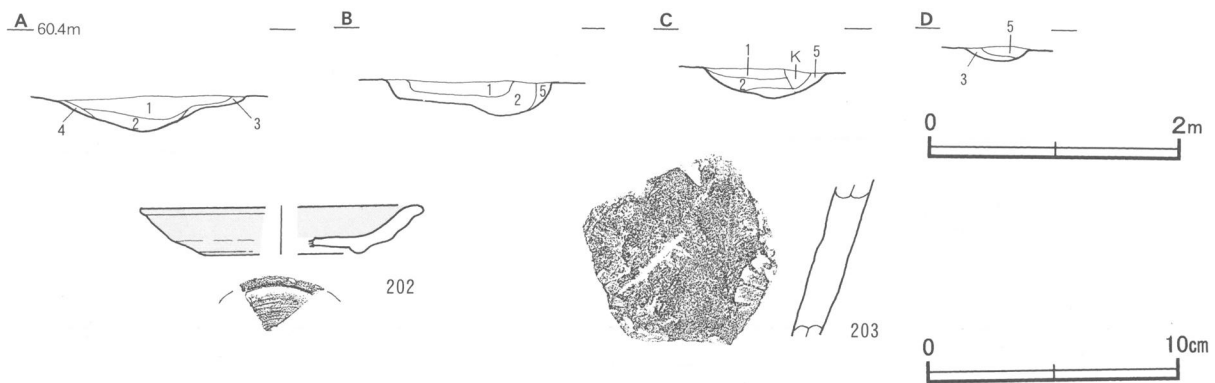
いる。上幅0.44~1.44m, 下幅0.24~0.40m, 深さ11~27cmで, 幅と深さは北東側から南西側に向かってやや大きくなっている。なだらかに立ち上がり, 底面は皿状を呈している。

覆土 5層に分層される。レンズ状の堆積状況を示していることから, 自然堆積と考えられる。

土層解説

- | | | | |
|-------|---------------------|-------|-----------|
| 1 黒褐色 | ローム粒子少量, 炭化粒子極微量 | 4 褐色 | ロームブロック少量 |
| 2 黒褐色 | ローム粒子・砂粒少量, 焼土粒子極微量 | 5 灰褐色 | ローム粒子中量 |
| 3 褐色 | ロームブロック中量 | | |

遺物出土状況 陶器片5点(小皿2, 甕3)と, 流れ込みと考えられる弥生土器片6点, 土師器片27点, 須恵器片5点, 石器1点(磨石)が出土している。第37図202・203は, いずれも南東部の覆土中から出土している。所見 遺構平面や断面の形状から, 排水溝または流水溝と考えられる。時期は, 古墳時代の第10・11号住居跡を掘り込んでいることや出土遺物などから, 中世以降と考えられる。



第37図 第4号溝跡土層・出土遺物実測図

第4号溝跡出土遺物観察表(第37図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
202	陶器	小皿	[11.0]	1.9	[6.4]	長石	灰	良好	ロクロ成形。底部回転糸切り。体部内・外面に乳白色釉を施釉。	南東部覆土中	P201 30%
203	陶器	甕	長石			にぶい橙	普通		体部内・外面へラナデ。無釉。外面に花卉状の押印。	南東部覆土中	TP202 常滑系

5 その他の遺構

その他の遺構として, 時期および性格不明の土坑3基が確認された。一覧表中に掲載し, 平面図については全体図で示すことにする。

表2 陥し穴一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	ピット	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)						
1	B1a6	N-86°-E	長楕円形	2.53 × 1.36	36	緩斜	凹凸	-	自然	-	SK3
2	B1a7	N-56°-E	楕円形	2.34 × 1.10	64	緩斜	平坦	-	自然	-	SK5

表3 弥生時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長軸径×短軸径(m)	壁高(cm)			柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	炉				
3	B1j6	N-12°-W	隅丸長方形	3.77 × 3.32	8	平坦	-	4	-	1	-	-	自然	弥生土器	後期後半	
5	B1g9	N-25°-E	楕円形	4.59 × 3.90	17~26	平坦	-	4	-	-	1	1	自然	弥生土器, 紡錘車, 焼成粘土塊, 炉石	後期後半	
7	B1f7	N-18°-W	[隅丸長方形]	(3.90) × 3.71	15~20	平坦	-	-	-	-	-	1	人為	弥生土器	後期後半	本跡→SD1
9	B1a8	N-28°-W	隅丸長方形	4.62 × 4.02	4~12	平坦	-	4	-	4	2	1	自然	弥生土器, 焼成粘 土塊, 炉石	後期後半	

表4 古墳時代住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向	平面形	規模		床面	壁溝	内部施設					覆土	主な出土遺物	時期	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長軸径×短軸径(m)	壁高(cm)			柱穴	貯蔵穴	ピット	出入口	炉				
1	C1a4	N-4°-W	[方形または長方形]	4.61 × (2.63)	6~14	平坦	-	-	-	-	-	竈1	人為	土師器(坏, 甕)	後期前半	本跡→SE1
2	B1j4	N-77°-E	[方形]	[5.09] × [5.05]	25	平坦	-	-	-	-	-	竈1	人為	土師器(坏, 埴, 甕)	後期前半	
4	B1j6	N-10°-E	[方形または長方形]	(2.76) × (1.10)	-	平坦	-	-	-	-	-	-	不明	土師器(甕)	後期	
8	B1d4	N 151° W	長方形	4.26 × 3.83	10~35	平坦	半周	4	1	-	1	竈1	自然	土師器(坏, 埴, 高坏, 甕, 甑)	中期末葉	
10	A1i8	N-8°-E	[長方形]	2.88 × 2.66	10~20	平坦	-	4	-	1	-	炉1	人為	土師器(坏, 高坏, 甕), 土玉	中期後半	本跡→SD4
11	A1i7	N-41°-W	[長方形]	4.90 × 4.30	12~20	平坦	-	4	-	1	1	炉1	人為	土師器(坏, 高坏, 埴, 甕), 双孔円 板	中期後葉	本跡→SD2・ SD4
12	A1g8	N-24°-E	[方形または長方形]	(3.86) × [3.40]	9~12	平坦	-	-	-	-	-	-	自然	土師器(坏, 甕)	後期前半	SK2→本跡
13	A1h6	N-43°-W	隅丸長方形	5.16 × 4.01	13~18	平坦	-	4	-	2	-	炉1	自然	土師器(坏, 高坏, 甕), 支脚, 砥石	中期後葉	

表5 井戸跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	C1b4	-	円形	0.83 × 0.79	(130)	直立	-	人為	-	S11→本跡

表6 溝跡一覧表

番号	位置	長径(軸)方向	平面形	規模				壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長さ(m)	上幅(cm)	下幅(cm)	深さ(cm)					
1	B1f2~ B2g2	N-75°-E	弧状	(40.2)	0.51~ 1.98	0.16~ 0.49	20~46	緩斜	皿状	自然	土師質土器(小皿, 鍋), 陶器(播鉢)	S17→本跡
2	A1f7~ A1j4	N-0° N-68°-E	直線状	(26.9)	0.98~ 1.40	0.60~ 0.92	13~43	緩斜	皿状	自然	砥石	S111→本跡
3	A1g7	N-5°-W	直線状	(4.0)	0.40~ 0.77	0.22~ 0.52	24	緩斜	皿状	自然	-	本跡→SD2
4	A1j8~ B1c2	N-65°-E	直線状	(25.4)	0.44~ 1.44	0.24~ 0.40	11~27	緩斜	皿状	自然	陶器(小皿, 甕)	S110・11→本跡

表7 その他の土坑一覧表

番号	位置	方向	形状	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考 新旧関係(旧→新), その他
				長径×短径(m)	深さ(cm)					
1	B1f8	N-13°-W	楕円形	1.69 × 1.41	54	緩斜	皿状	自然	-	
2	A1g8	N-22°-W	長楕円形	1.13 × 0.72	14	緩斜	皿状	人為	-	本跡→S112
4	B1a6	N-33°-E	長楕円形	2.03 × 1.14	36	緩斜	凹凸	自然	-	

第4節 ま と め

高幡遺跡の調査の結果、縄文時代の陥し穴2基、弥生時代の竪穴住居跡4軒、古墳時代の竪穴住居跡8軒、中世以降の井戸跡1基、溝跡4条、時期不明の土坑3基が確認された。また、これらの遺構とともに、各時代を特徴づける土器や石器、土製品・石製品などが出土し、当遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが明らかになった。ここでは、特に当遺跡内で集落が形成された弥生時代と古墳時代の遺構と遺物を中心に、特筆すべき点を取り上げながら、各時代の概略を述べまとめとしたい。

1 縄文時代

陥し穴2基が確認された。遺構の形状から縄文時代と判断したが、詳細な時期を特定することは困難であった。当遺跡内の一角は、狩猟場として利用されていたと考えられる。遺物としては、遺構に伴わない縄文土器と石器が出土している。縄文土器は細片であるが、中期後葉の加曾利EⅡまたはEⅢ式期に編年されるものであろう。住居跡など居住活動を示す遺構は確認されていないものの、石器としては、磨石、凹石、石皿など、生業に関わるものが含まれていた。

これまでの分布調査の結果などから、当遺跡で確認されている縄文土器の時期は、前期関山式期、中期阿玉台式期から後期加曾利B式期¹⁾とされているので、調査区域以外の周辺地域において集落などが形成されていた可能性が高いと考えられる。

2 弥生時代

確認された弥生時代の竪穴住居跡4軒は、調査区南部を中心に分布していた。住居跡の形状や内部施設等については、耕作機械による攪乱等により全体像を明確にできない部分も存在するが、平面形は第3・7・9号住居跡が隅丸長方形で、第5号住居跡のみが楕円形を呈していた。ピットは第7号住居跡では確認されなかったが、他の住居跡で確認され、主柱穴と考えられるピット数は4か所を基本としている。さらに、出入口施設に伴うピットや棟持ち柱の柱穴と考えられるピットが加わる住居跡も確認された。

炉跡は3軒の住居跡で確認され、第5・9号住居跡では角柱状の自然礫を用いた炉石が据えられていた。岩瀬盆地を挟んで西側に位置する松田古墳群の調査においても、炉石を設置した住居跡が確認されており²⁾、県西部における炉石を用いた住居跡の分布を示す新たな事例と言える。炉石は、いずれも住居跡の主軸と想定される方向と直交するように炉内に設置されており、茨城県の後期弥生文化を代表する十王台式土器と上稲吉式土器の文化圏において確認された住居内の炉石でも、同じような設置方法がとられている³⁾。異なる土器文化圏と対比しながら、炉の形態や構築方法を検討していくうえでも、重要な手がかりを与えるものと思われる。

遺物としては、弥生土器、紡錘車などが出土している。弥生土器は小片または細片がほとんどで、器形全体をうかがえるような土器は少ない。壺形土器の文様は、大きく口縁部、頸部、胴部の3つの文様帯で構成されている。口縁部は、折返し口縁または複合口縁と、単純口縁に大きく分けることができる。折返し口縁または複合口縁部には、羽状構成の附加条一種（附加2条）縄文が施されるものが多く、無文の割合は少ない。口縁部下端の調整は、指頭による押圧を加えたもの、キザミを施したもの、刺突文を施したものなどが見られるが、縄文原体の押圧がなされる割合が高い。単純口縁の場合は、櫛歯状工具によって多条の波状文または連弧文が施されている個体がほとんどである。また、口縁部を中心に赤彩が施されている土器片（第17図106・107・110）も見られ、内部に赤色顔料の痕跡が残る壺形土器（第11図29）の出土とともに、施文の工程を考える上で

興味深い事例である。頸部の文様帯は、破片数が限定されてはいるが、有文のものと無文のものに大きく分けられる。有文のものは、櫛歯状工具による連弧文、縦位の区画文、横位の波状文、区画文と波状文の組み合わせによる文様などを施している。胴部と頸部を区画する位置には、多条櫛描文が周回するものやボタン状の瘤が貼付されるものが存在する。胴部は附加条一種（附加2条）縄文の施文が圧倒的に多く、施文方法も羽状構成が主体となっている。底部は、ほとんどが木葉痕であるが、わずかに布目痕も含まれている。

紡錘車は、第5号住居跡だけから3点が出土している。住居跡の平面形とともに出土遺物の様相が、他の住居跡とは異なっている。出土遺物は細頸の壺形土器（第11図20）とともに、壺や高坏のミニチュア土器（同図21・22・44・45）、高坏の脚部転用と考えられる器台（同図23）などが存在する。このような土器組成からは、祭祀的な行為がなされた住居であった可能性も考えられる。また、出土した紡錘車3点は、いずれも算盤玉状を呈していた。この形状の紡錘車の類例としては、水戸市十万原遺跡⁴⁾・二の沢B遺跡⁵⁾、笠間市石井遺跡群⁶⁾、茨城町石原遺跡⁷⁾、栃木県益子町車堂遺跡⁸⁾などに散見するが、数量的には少ないものと思われる。一般的には円盤状を呈しているものが多い中であって、算盤玉状の特異な形態の紡錘車を主体として、1軒の住居から3点以上出土している事例としては、車堂遺跡の第4号住居跡に見られる。この事実は単に生業の道具としてだけではなく、紡織に関わる儀礼的な行為の中で用いられるといった、実用以外の道具としての一端をも示唆するものではないだろうか。さらには、蓋形土器（第11図24）や焼成された粘土塊が確認されていることも、第5号住居跡の特異性を示していると考えられる。蓋形土器は手捏ね風の成形手法がとられ、端部に2個単位の穿孔がなされている。成形手法が類似し、口縁部に穿孔がなされた坏または皿形土器は、前述の十万原遺跡第20・23号住居跡や石原遺跡第45号住居跡から出土している。時期的な変遷の中で組成に加わった可能性が考えられると同時に、地域的な広がりの中での関連を予想される土器である。

このように、当遺跡出土の弥生土器や紡錘車は、成形や施文の方法、文様の構成など、栃木県方面から茨城県西部に分布する二軒屋式土器の特徴を有していると考えられるが、口縁部や頸部に多用されている櫛描文の文様構成からは、茨城県中央部から北部において成立した十王台式土器の要素を確認することができる。このような傾向は、同じ弥生時代の集落が確認された松田古墳群においては、あまり顕著ではなかった現象であり、時期的には当遺跡が後続の遺跡であると推定される。さらに、当遺跡は十王台式土器などの異なる文化圏との交流や影響が大きくなりつつある後期後半の時期にあって、一つの段階を示す遺跡であると捉えておきたい。

3 古墳時代

確認された古墳時代の竪穴住居跡8軒は、調査区全域に分布していた。出土土器と住居跡の形状や内部施設等をもとにして、中期と後期に大別することが可能である。

中期の住居跡は、第8・10・11・13号の4軒が該当する。調査区中央部から北寄りの範囲を中心にして、住居跡が確認されている。住居跡の規模と形状は、長軸4～5m、短軸4m前後の長方形または隅丸長方形を呈し、中形が主体であるが、第10号のように長軸および短軸が3mに満たない小形の住居跡も確認された。内部施設等について見ると、ピットはすべての住居跡で確認され、支柱穴はすべて4か所を基本としている。さらに、出入口施設に伴うピットも、第8・11号住居跡で確認された。炉は第10・11・13号の3軒の住居跡で、床面の中央またはやや北西寄りの位置で確認され、すべて地床炉であった。第8号住居跡では、南西壁のほぼ中央部に竈が付設されていた。煙道部は壁外への掘り込みが見られず、火床部も住居内の床面を直接用いているなど、形態的な特徴から初期竈と捉えられる。岩瀬町裏山遺跡⁹⁾の第27号住居跡においても、同様の竈の付設が推定されている。時期的には、出土土器や煙道部が壁外へ掘り込まれていない段階¹⁰⁾の竈という判断から、5世紀

中葉から後葉にかけての時期と考えられる。また、当住居跡では、壁溝と貯蔵穴が確認されている。竈の付設位置、竈と貯蔵穴との位置関係、竈と出入口との位置関係など、詳細な検討によって、過渡的な時期にあった住居の構造や性格が明らかになるであろう。

これら4軒の住居跡から出土した遺物は、土師器が主体で、石器、石製品、土製品がわずかに含まれていた。器種は、坏、高坏、椀、甕、壺、埴、甑などで構成されており、坏、椀、甕の出土割合が高い。坏と椀の形態は、口縁部付近で内彎し、器種の区別が明瞭にできないものがあり、時期的な特徴とも考えられる。また、口縁部内面に稜を有し、わずかに屈曲する器形の坏も見られる。整形の手法はヘラナデが主体で、さらに体部内面はヘラミガキ、体部下端から底部はヘラ削りによる調整がなされている。底部は、ヘラ削りによって成形された平底と丸底が存在する。高坏は第10・11・13号住居跡で出土しているが、第11号住居跡からは4点が確認されている。脚部は円筒状あるいは朝顔状を呈し、坏部の下位に稜を有する。第27図173・第28図170の高坏は、坏部と脚部にそれぞれ鏝状の凸帯が付けられ、形態の特徴から木器を模倣した高坏と考えられる。

特に、第11号住居跡では双孔円板が5点出土しており、高坏や埴などの器種構成とともに、祭祀的な行為がなされていたことを十分に想定できる住居跡である。また、限られた調査区内ではあるが、1軒の住居跡から集中して祭祀に関わる遺物が確認されたことは、ほぼ同時期における岩瀬町裏山遺跡¹¹⁾でも同じ様相が見出されており、集落内における祭祀形態を示すものと言えるであろう。甕の形態は、大きく2つに大別できる。体部は球形状を呈し肩部が張り、頸部は屈曲して外反しながら口縁部にいたる器形と、底部がやや突出し、体部と口縁部の径がほぼ同じ器形のものが見られる。整形の手法は、口縁部内外面はヨコナデ、体部内外面はヘラナデが主体であるが、体部外面にヘラミガキが加わるものもある。甑は、第8号住居跡で第25図161の1点が出土している。この甑は無底式のもので、内彎しながら立ち上がり、口縁部に最大径を持つものである。

これらの土器は、概ね5世紀中葉から後葉に位置付けられるものと考えられる。この古墳時代中期末から後期初めの過渡的な時期に集落が形成されるとともに、住居内に竈が導入されていたものと思われる。

後期の住居跡は、第1・2・4・12号の4軒が該当する。調査区東部から南部の範囲を中心にして、住居跡が確認されている。規模と形状は、調査区域外に延びるものや、調査区南部では耕作機械による著しい攪乱を受けているものなど、全体像を明確にできないものが多かった。確認された範囲で判断すれば、平面形はいずれも方形または長方形と考えられる。規模は、第1・2号住居跡が一边4.5～5.0m前後で、第12号住居跡が一边4.0m以下で、やや小形と推定される。いずれの住居跡においても、ピットや壁溝などは確認されなかったが、2軒の住居跡からは竈が確認された。竈の付設位置は、第1号住居跡が北壁中央部、第2号住居跡が東壁中央部となっている。第1号住居跡の竈は、煙道部の壁外への掘り込みがわずかに確認され、初期的な竈から発達したものと捉えることができるであろう。

出土した遺物は、土師器のみである。器種は、坏、甕、鉢が確認された。坏が主体であり、形態を見ると、体部からやや内彎しながら立ち上がって口縁部に至るものと、口縁部がわずかに屈曲して稜を有するものが存在する。底部が完全に残存している個体はないが、ほとんどが丸底になると考えられる。整形の手法は、体部内外面ともにヘラナデが主体で、口縁部がわずかに屈曲して稜を有する坏の内面には、ヘラミガキが加わるものが含まれる。甕も器形全体をうかがうことはできないが、体部は球形と考えられ、頸部で屈曲して口縁部は緩やかに外反している。口縁部と体部の内外面は、ヘラナデによる調整がなされている。

これらの土器は、概ね5世紀後葉から6世紀初頭に位置付けられるものと考えられる。この時期の住居跡は、調査区の南東寄りで確認されており、住居内における竈の定着とともに、前時期とは位置をわずかに変えて、集落が展開していったものと考えられる。

古墳時代における当遺跡の集落変遷は、中期後葉から後期前葉にかけてたどることができた。集落の規模は、決して大きいものではないと思われるが、岩瀬盆地東部では、同時期における裏山遺跡や磯部遺跡¹²⁾の様相、さらには当遺跡の周辺に多く分布する古墳の築造などと関連付けて、集落の動態を追究することが重要と考えられる。たとえば、盆地を挟んで当遺跡から西方の丘陵上に立地している松田古墳群¹³⁾では、古墳時代前期後半から中期前半の住居跡が確認されており、当遺跡に先行する時期に、すでに集落が形成されている。また、古墳が築造され始めたのは後期初頭と判断され、当遺跡においては集落が展開する時期に当たる。短絡的に集落の動向を捉えることはできないが、岩瀬町周辺における古墳時代をも含めた発掘調査が進展する中、広い視野からの遺跡や遺構、遺物の検討によって時代の様相が浮かび上がってくるであろう。

4 中 世

中世の遺構は、井戸跡1基と溝跡4条が確認された。遺物としては、溝跡から土師質土器や陶器などが出土している。具体的に人々の営みを示すような遺構は乏しいが、排水溝または流水溝と考えられる溝跡から出土した遺物から、15世紀以降の当遺跡の近隣には、居住活動の場が存在していたと考えられる。

- 1) 岩瀬町史編さん委員会『岩瀬町史 通史編』岩瀬町 1987年3月
- 2) 横倉要次 「松田古墳群 北関東自動車道（協和～友部）建設事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅴ」『茨城県教育財団文化財調査報告』第226集（財）茨城県教育財団 2004年3月
- 3) 鶴見貞雄 「炉石住居覚書－茨城県の弥生・古墳時代の住居例から－」『研究ノート』5号（財）茨城県教育財団 1996年6月
- 4) 皆川 修 「十万原地区市街地開発事業地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 十万原遺跡1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第179集（財）茨城県教育財団 2001年3月
- 5) 江幡良夫 黒澤秀雄 「二の沢A遺跡 二の沢B遺跡（古墳群）ニガサワ古墳群 十万原新住宅市街地開発事業・都市計画道路十万原東西線街路整備事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第208集（財）茨城県教育財団 2003年3月
- 6) 能島清光 「第1章 原始社会と古墳文化」『笠間市史 上巻』笠間市 1993年12月
- 7) 村上和彦 「やさしさのまち『桜の郷』整備事業に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 石原遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第163集（財）茨城県教育財団 2000年3月
- 8) 岩上照朗他 『車堂』益子町史編さん委員会 1985年3月
小森紀男 「第3章 弥生時代 車堂遺跡」『益子町史 第1巻 考古資料編』益子町 1987年3月
- 9) 黒澤秀雄 「一般県道西小埜真岡線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書 裏山遺跡」『茨城県教育財団文化財調査報告』第73集（財）茨城県教育財団 1992年3月
- 10) 樫村宣行 「星合遺跡における初期カマドの様相について」『菟玖波』第3号 菟玖波倶楽部 1999年3月
- 11) 9) に同じ。
- 12) 野村幸希 『磯部遺跡調査報告書』岩瀬町教育委員会 1972年3月
- 13) 2) に同じ

第4章 加茂東遺跡

第1節 遺跡の概要

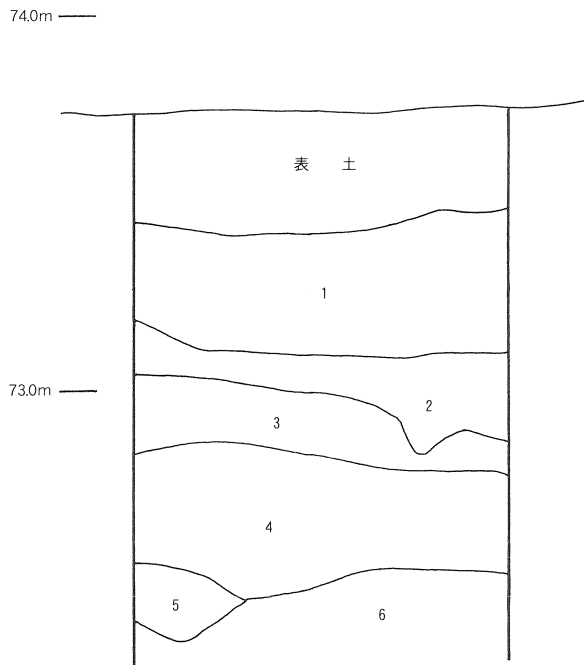
加茂東遺跡は、縄文時代と平安時代の複合遺跡である。調査前の現況は畑地で、調査面積は平成13年度と14年度を合わせて573.76㎡である。

調査の結果、竪穴住居跡を4軒、土坑3基、溝跡1条、道路跡1条を確認した。

遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に6箱出土している。出土した主な遺物は、縄文土器、土師器、須恵器、灰釉陶器、石製品（砥石）である。

第2節 基本層序

A1h8区にテストピットを設定した。現地表面より約1.4m掘り下げると岩盤に達したため、基本土層の観察はそれよりも上の土層の観察に留まった。



第38図 基本土層図

第1層は黒褐色の表土層で、粘性・締まりは強い。粘質土に粒子の細かい砂粒が混じる。層厚は30～35cmほどである。

第2層は暗褐色の粘土層で、粘性・締まりは強い。粒子の細かい砂粒が混じる。層厚は15～28cmほどである。

第3層は黒褐色の粘土層で、この層より砂粒の含有量が少なくなる。粘性・締まりは強い。層厚は10～25cmほどである。

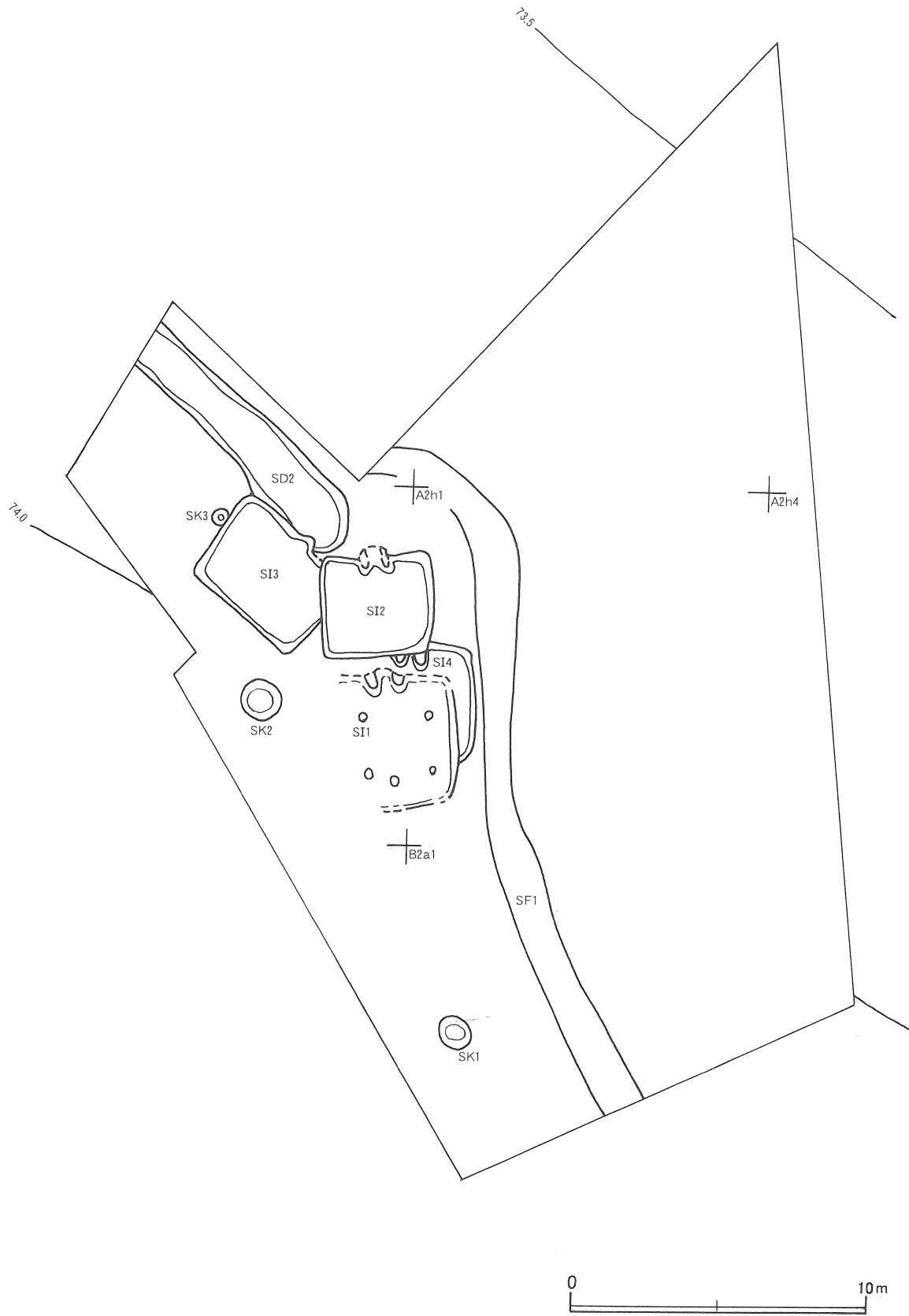
第4層は暗灰黄色の粘土層で、鉄分の中ブロックを多く含む。粘性・締まりは強い。層厚は25～45cmほどである。

第5層は暗褐色の粘土層で、鉄分の小ブロックを多く含む。粘性・締まりは強い。層厚は20cmほどである。

第6層は橙色の岩盤層で、鉄分を多く含む。



第39図 加茂東遺跡調査区位置図



第40図 加茂東遺跡遺構全体図

第3節 遺構と遺物

1 平安時代の遺構と遺物

平成13・14年度の調査では、竪穴住居跡4軒、土坑3基、溝跡1条、道路跡1条が確認された。以下、遺構と遺物について記述する。

(1) 竪穴住居跡

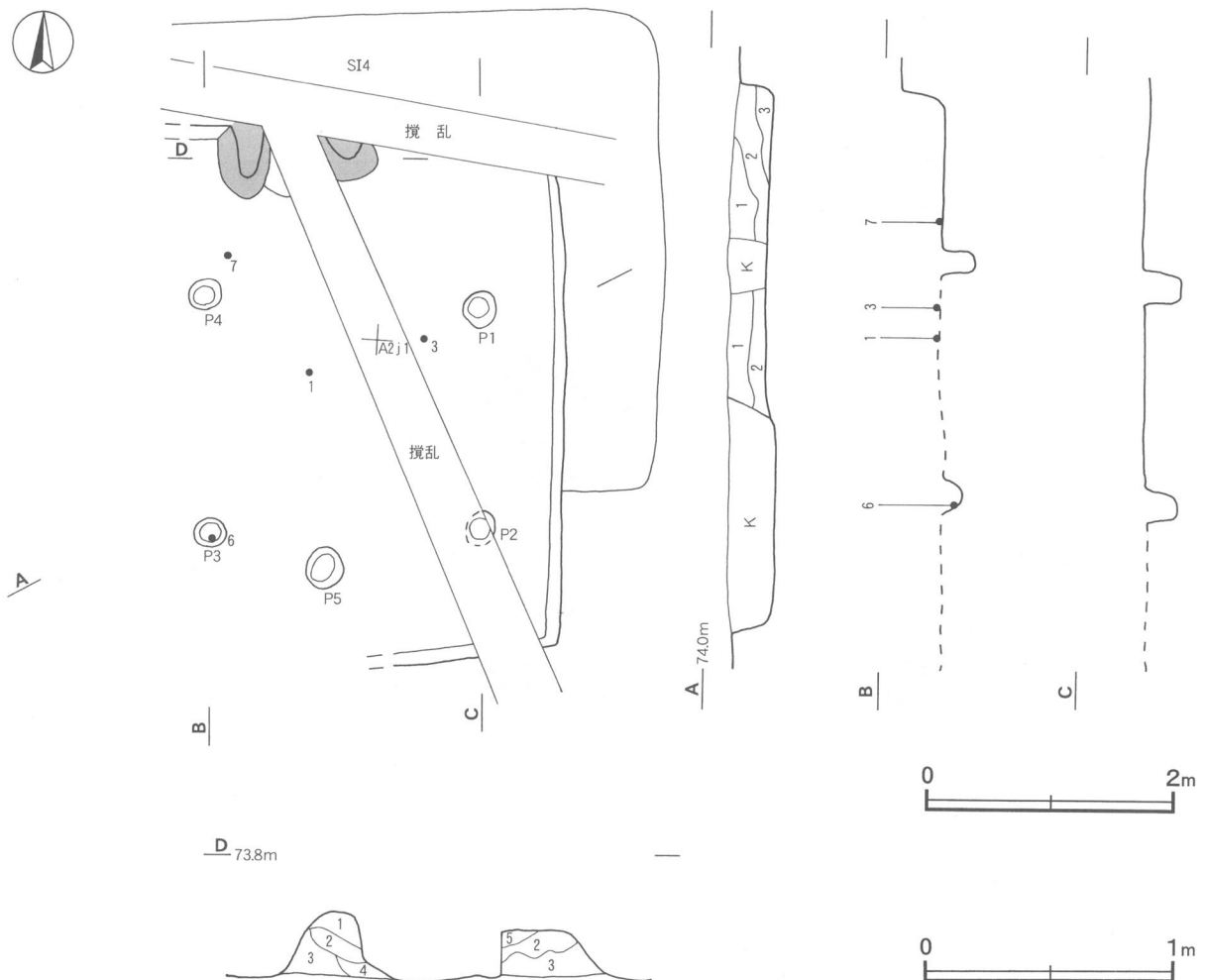
第1号住居跡（第41・42図）

位置 A1j0区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第4号住居跡を掘り込んでいる。

規模と形状 攪乱のため遺存状態が悪く、壁の立ち上がりは部分的に確認されただけである。長軸は北壁と南壁の残存部から4.41mと推定され、短軸は不明であるが方形と推定される。主軸方向はN-4°-Wである。壁高は残存部で29cmであり、垂直に立ち上がっている。

床 地山をそのまま床面としており、確認された部分はほぼ平坦で、硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。



第41図 第1号住居跡実測図

竈 北壁の中央部に付設されていたと推定される。攪乱により遺存状態が悪く、袖部が確認されただけである。袖部幅は現存値で45cmであり、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 粘土粒子多量，ローム粒子・砂粒微量
- 2 黒褐色 粘土粒子・砂量中量，小礫少量，ローム粒子微量
- 3 黒褐色 粘土粒子多量，砂粒・小礫少量，ローム粒子微量
- 4 黒褐色 粘土粒子多量，砂粒中量，ローム粒子微量
- 5 暗赤褐色 焼土粒子中量，炭化粒子・粘土粒子少量，ローム粒子微量

ピット 5か所。支柱穴はP1～P4で、深さ17～35cmである。出入り口施設に伴うピットはP5が相当し、深さは15cmである。

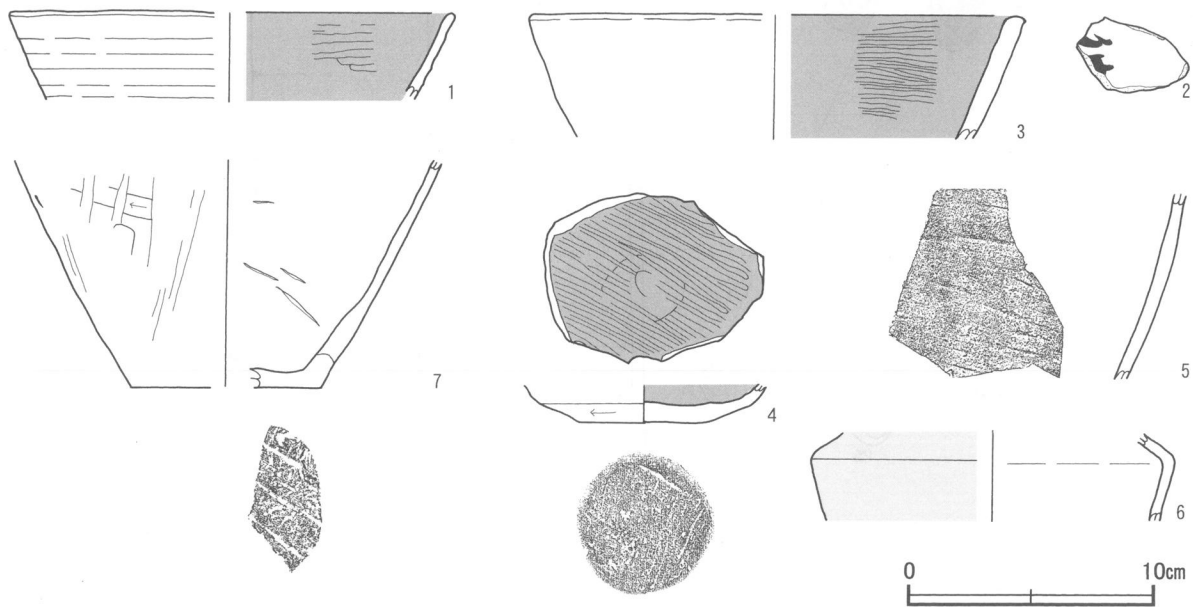
覆土 3層からなる。攪乱により西壁側からの堆積の様相が確認できず、堆積状況は不明である。

土層解説

- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒・小礫少量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒・小礫少量
- 3 暗褐色 砂粒・小礫中量，ローム粒子・炭化粒子少量

遺物出土状況 土師器片167点（坏53，椀6，甕108），須恵器片15点（坏12，高台付坏1，甕2），灰釉陶器片1点（長頸瓶），縄文土器片5点，陶器片2点が出土している。遺存状態の良い東壁側では、覆土上層から下層にかけて土器片の集中がみられる。須恵器片は上層からの出土であり、混入と考えられる。1・3・7は床面上から、6はP3内から出土している。2の墨書土器は覆土中からの出土である。

所見 時期は、9世紀末葉の第4号住居跡を掘り込んでいることや須恵器が伴わないことおよび出土土器から10世紀前半と考えられる。



第42図 第1号住居跡出土遺物実測図

第1号住居跡出土遺物観察表(第42図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
1	土師器	坏	[17.9]	(3.6)	—	石英・長石・雲母	橙	普通	内面ヘラミガキ	中央部床面	5% 内面黒色処理
2	土師器	坏カ	—	(3.0)	—	赤色粒子	黄橙	普通	内面ヘラミガキ	覆土	5% 墨書 体部 横位 [□]

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
3	土師器	椀	[20.0]	(5.0)	—	赤色粒子	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ	中央部床面	5% 内面黒色処理
4	土師器	坏	—	(1.5)	5.2	赤色粒子・雲母	橙	普通	体部下端手持ちヘラケズリ, 底部回転ヘラ切り	覆土	10% 内面黒色処理
5	須恵器	甕	—	(7.1)	—	小礫	灰	普通	斜め方向の平行叩き	覆土	5%
6	灰釉陶器	長頸瓶	—	(3.7)	—	小礫	暗オリーブ	普通	ロクロナデ	P3内	5% 黒色のふきだし
7	土師器	甕	—	(9.2)	[7.6]	石英・長石・雲母	褐	普通	外面ヘラケズリ後ヘラミガキ	竈前床面	

第2号住居跡 (第43・44図)

位置 A 1 h0 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第3・4号住居跡を掘り込んでいる。

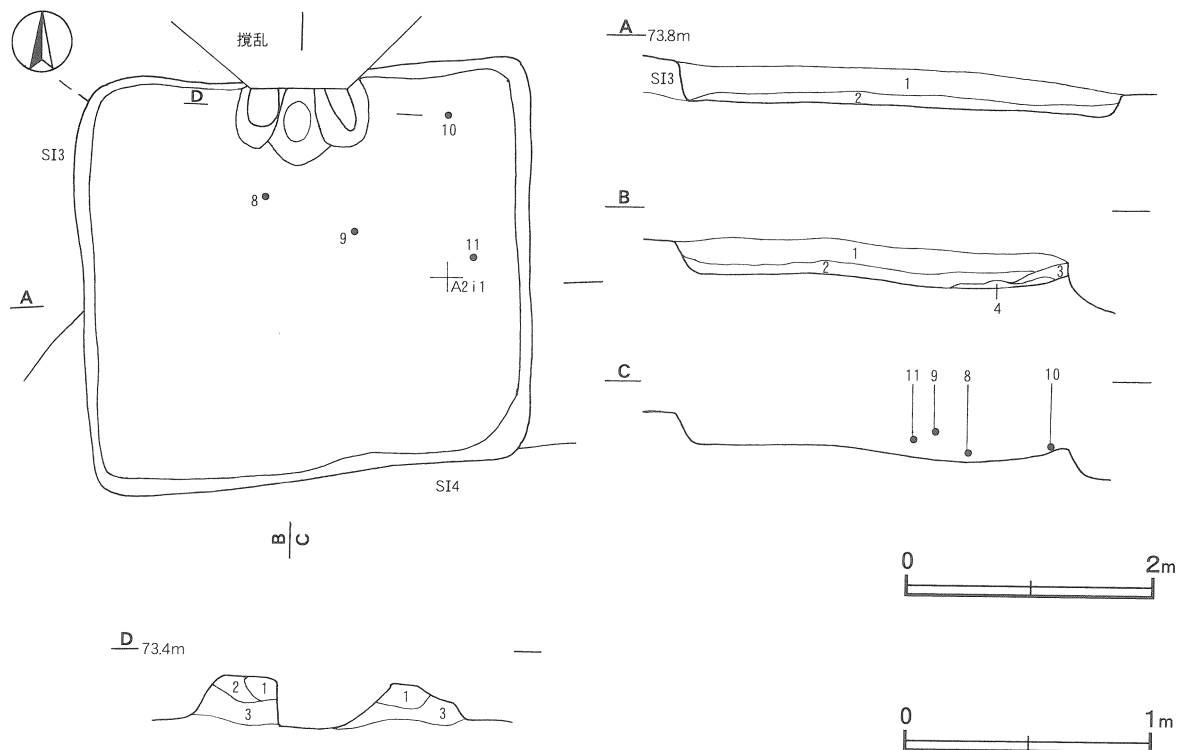
規模と形状 長軸3.65m、短軸3.35mの方形で、主軸方向はN-1°-Wである。壁高は18~24cmで、各壁とも外傾して立ち上がっている。

床 地山をそのまま床面としており、ほぼ平坦で硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部に付設されており、煙道部が攪乱により壊されている。袖部幅は30cmであり、床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し、焼土・炭化粒子の広がりが見られるだけで、赤変していない。

竈土層解説

- 1 黒褐色 砂粒中量, 粘土ブロック・炭化粒子少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 2 黒褐色 粘土粒子中量, 砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・砂粒微量
- 3 黒褐色 粘土粒子多量, 砂粒・小礫少量, ローム粒子微量



第43図 第2号住居跡実測図

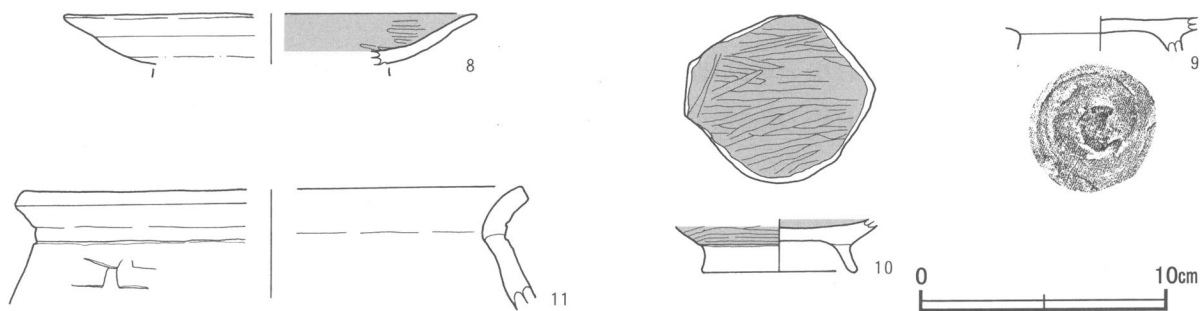
覆土 4層からなり、各層とも水平に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子少量，ローム粒子・砂粒・小礫微量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量，砂粒・小礫微量
- 3 黒褐色 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子・砂粒少量
- 4 黒褐色 焼土ブロック・炭化粒子少量，ローム粒子微量

遺物出土状況 土師器片332点（坏102，椀3，甕227），須恵器片64点（坏31，高台付坏1，甕30，蓋2），灰釉陶器片2点（碗），縄文土器片6点が出土している。土器片は中央部から南西コーナー付近の覆土上層から中層にかけて集中している。須恵器や灰釉陶器はすべて細片で上層からの出土であり、住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。8・9・11は覆土下層，10は床面上から出土している。

所見 時期は、9世紀末葉の第3号住居跡を掘り込んでいることや須恵器が伴わないこと及び出土土器から10世紀前半と考えられる。



第44図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡出土遺物観察表(第44図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
8	土師器	高台付皿	[16.6]	(2.0)	—	石英・長石・雲母・小礫	橙	普通	内面ヘラミガキ	竈前覆土下層	10% 内面黒色処理
9	土師器	椀	—	(1.3)	—	石英・長石・雲母	にぶい橙	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼りつけ	竈前覆土下層	20%
10	土師器	椀	—	(2.1)	6.2	長石・雲母	黒	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼りつけ	北東部床面	20% 内外面黒色処理 PL16
11	土師器	甕	[20.2]	(5.0)	—	石英・長石・小礫	褐	普通	口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラケズリ	東壁際覆土下層	10%

第3号住居跡（第45・46図）

位置 A 1h0 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第3号土坑，第2号溝跡を掘り込み，第2号住居に掘り込まれている。

規模と形状 長軸3.80m，短軸3.30mの長方形で，主軸方向はN-39°-Eである。

床 地山をそのまま床面としており，ほぼ平坦で，硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。

竈 北東壁の中央部に付設されており，焚口から煙道部まで77cm，壁外への掘り込みは50cmほどである。袖部幅は60cmであり，床面と同じ高さの地山面に砂質粘土で構築されている。火床面は床面と同じ高さの地山面をそのまま使用し，焼土・炭化粒子の広がりが見られるだけで，赤変していない。

竈土層解説

- 1 黒褐色 砂粒多量，炭化物微量
- 2 黒褐色 砂粒多量，焼土粒子・炭化粒子少量
- 3 黒褐色 焼土ブロック少量，炭化粒子微量

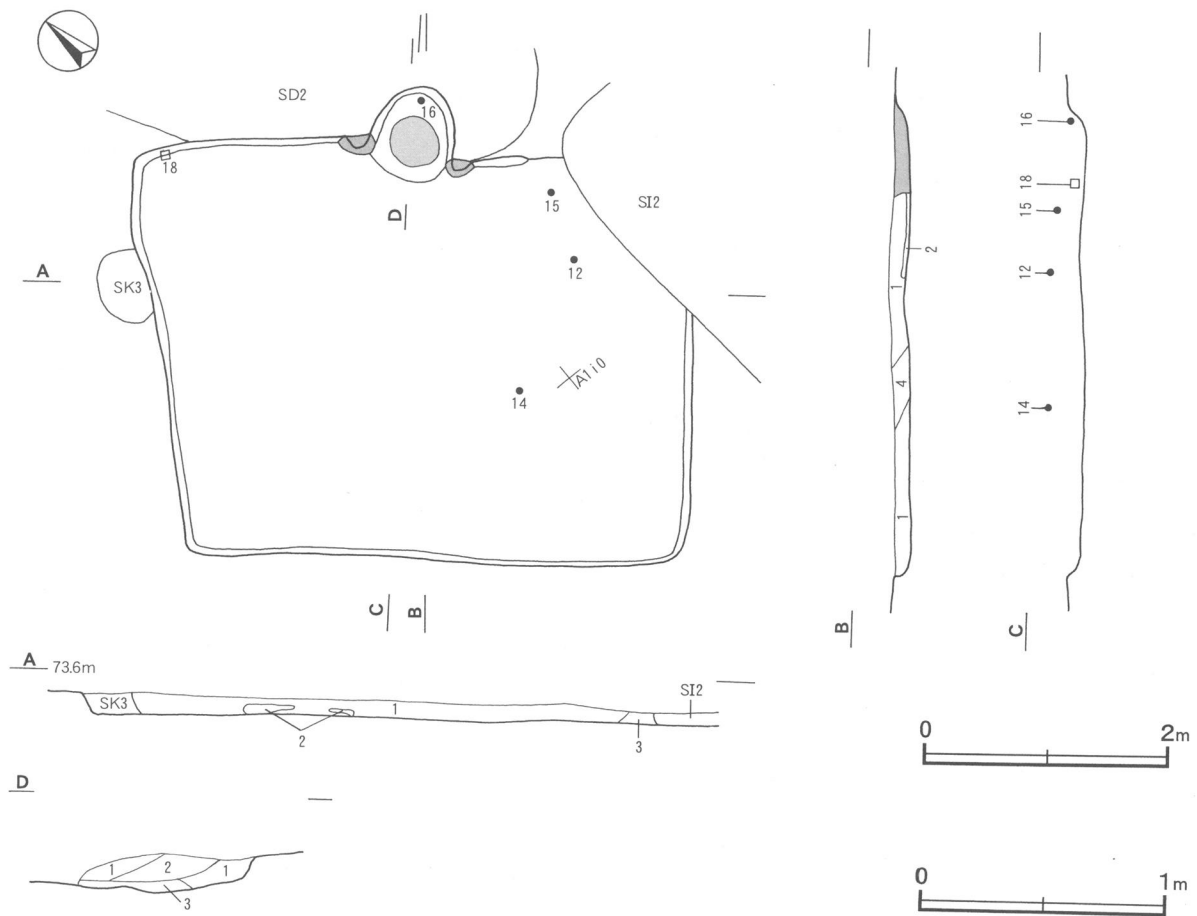
覆土 4層からなり、層中に投げ込まれたと考えられる焼土や粘土があることや、土質が違う土砂が不均等に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 砂粒多量、焼土粒子・炭化粒子少量
- 2 浅黄褐色 粘土ブロック多量
- 3 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 4 褐色 砂粒少量、炭化粒子微量

遺物出土状況 土師器片97点（坏23，甕74），須恵器片25点（坏19，甕5，蓋1），石製品1点（砥石），縄文土器片10点，陶器片1点が出土している。土器片は竈周辺の覆土中に集中しており，須恵器はすべて細片で覆土中からの出土であり，住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。12・15は南東コーナー部の覆土上層から，14は中央部覆土上層から，16は竈煙道部の覆土下層から，18は北東壁際の覆土下層から斜位で出土している。

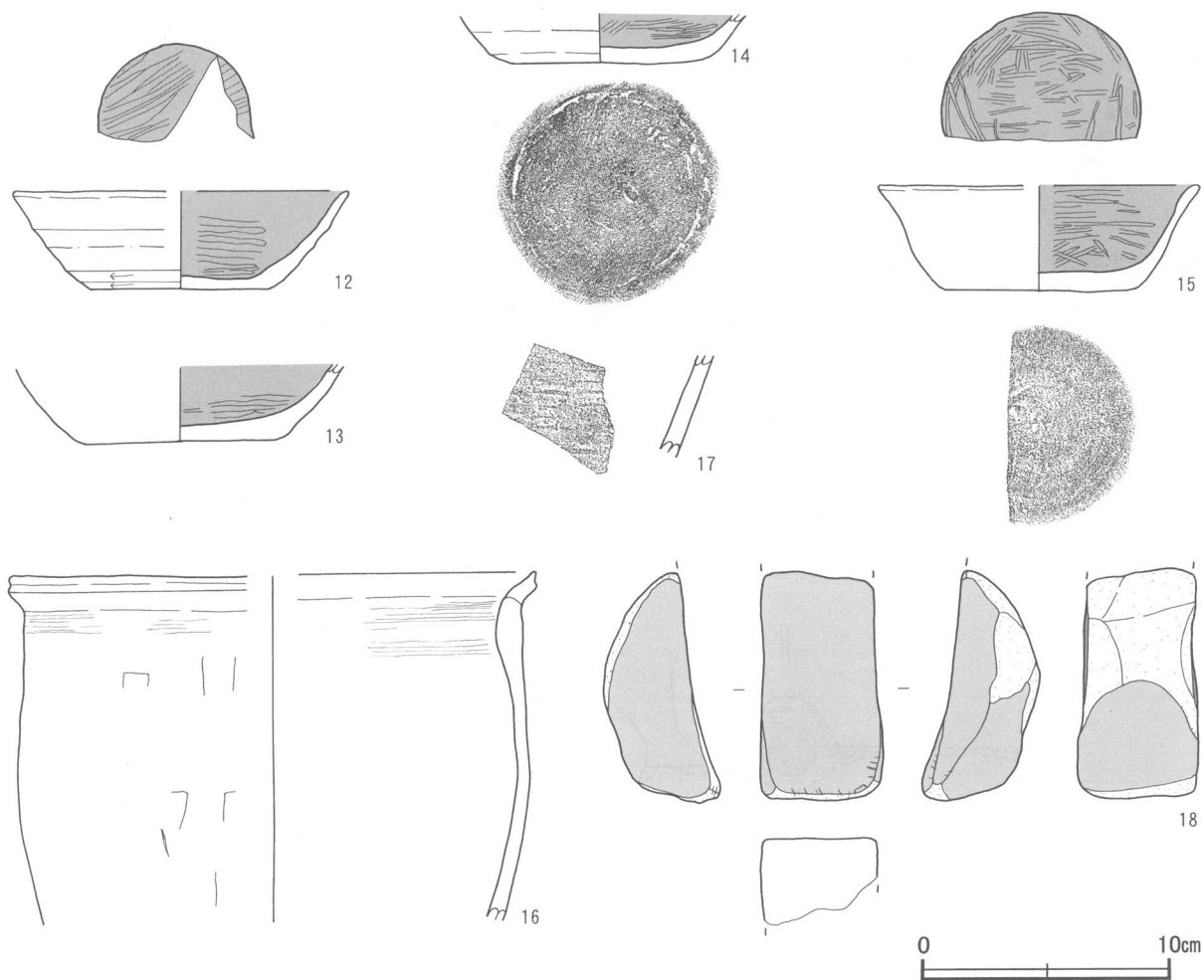
所見 時期は，10世紀前半の第2号住居に掘り込まれていることや須恵器が伴わないこと及び出土土器から9世紀末葉と考えられる。



第45図 第3号住居跡実測図

第3号住居跡出土遺物観察表(第46図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
12	土師器	坏	[13.4]	3.9	7.0	赤色粒子	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ，底部回転ヘラ切り	南東コーナー部覆土上層	50% 内面黒色処理 PL16
13	土師器	坏	—	(2.9)	7.6	赤色粒子・雲母	橙	普通	内面ヘラミガキ，底部回転ヘラ切り	覆土	30% 内面黒色処理
14	土師器	坏	—	(1.9)	7.5	赤色粒子・雲母	橙	普通	内面ヘラミガキ，底部回転ヘラ切り	中央部覆土上層	50% 内面黒色処理



第46図 第3号住居跡出土遺物実測図

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
15	土師器	坏	[12.8]	4.1	7.8	赤色粒子・雲母	にぶい橙	普通	内面ヘラミガキ, 底部回転ヘラ切り	南東コーナー部覆土上層	50% 内面黒色処理 PL16
16	土師器	甕	[21.0]	(14.0)	—	小礫, 雲母	橙	普通	口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ	竈内	20%
17	須恵器	甕	—	(4.1)	—	小礫	黄灰	普通	横方向の平行叩き	覆土	5%

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
18	砥石	(9.3)	4.9	4.7	(214)	凝灰岩	4面に使用痕	北東コーナー部覆土下層	PL16

第4号住居跡 (第47・48図)

位置 A 2 i l 区に位置し, 北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第1・2号住居に掘り込まれている。

規模と形状 残存している壁から南北軸は3.86mであり, 東西軸は不明であるが方形と推定される。主軸方向はN-7°-Wと推定される。壁高は残存部で15cmであり, やや外傾して立ち上がっている。

床 地山をそのまま床面としており, 確認された部分はほぼ平坦で, 硬化面は確認されなかった。壁溝は認められない。

竈 北壁の中央部に付設されており、煙道部が壊されている。袖部幅は35cmであり、床面と同じ高さの地山面上に砂質粘土で構築されている。

竈土層解説

- 1 黒褐色 砂粒中量, 焼土粒子・炭化粒子・粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 2 黒褐色 炭化粒子・砂粒中量, 粘土粒子少量, ローム粒子微量
- 3 黒褐色 砂粒多量, 小礫少量, ローム粒子微量
- 4 暗赤褐色 焼土粒子・砂粒中量, 炭化粒子・粘土粒子少量
- 5 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化粒子・砂粒少量, ローム粒子・焼土粒子微量
- 6 黒褐色 砂粒多量, 粘土粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子少量, ローム粒子微量
- 7 褐色 ローム粒子・砂粒多量, 粘土粒子中量
- 8 黒褐色 粘土粒子・砂粒中量, ローム粒子・焼土粒子少量

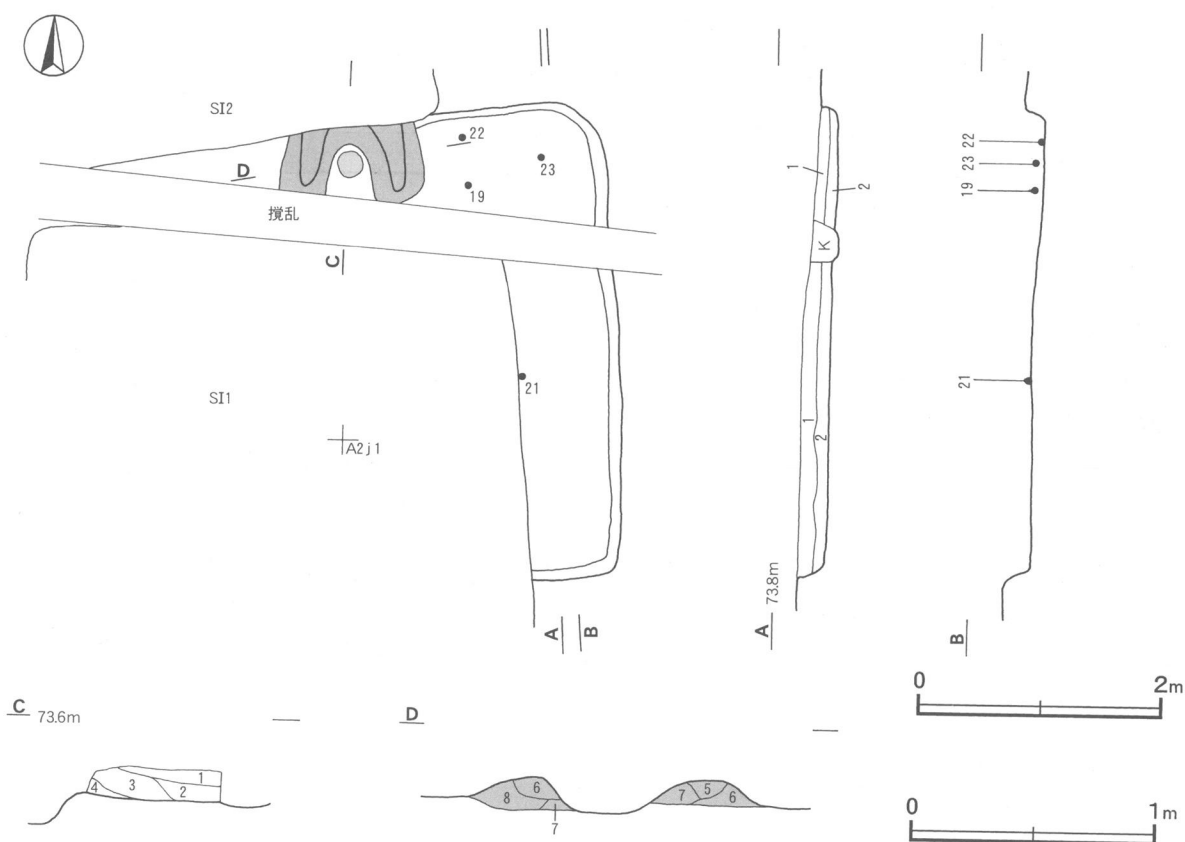
覆土 2層からなる。各層とも水平に堆積していることから人為堆積と考えられる。

土層解説

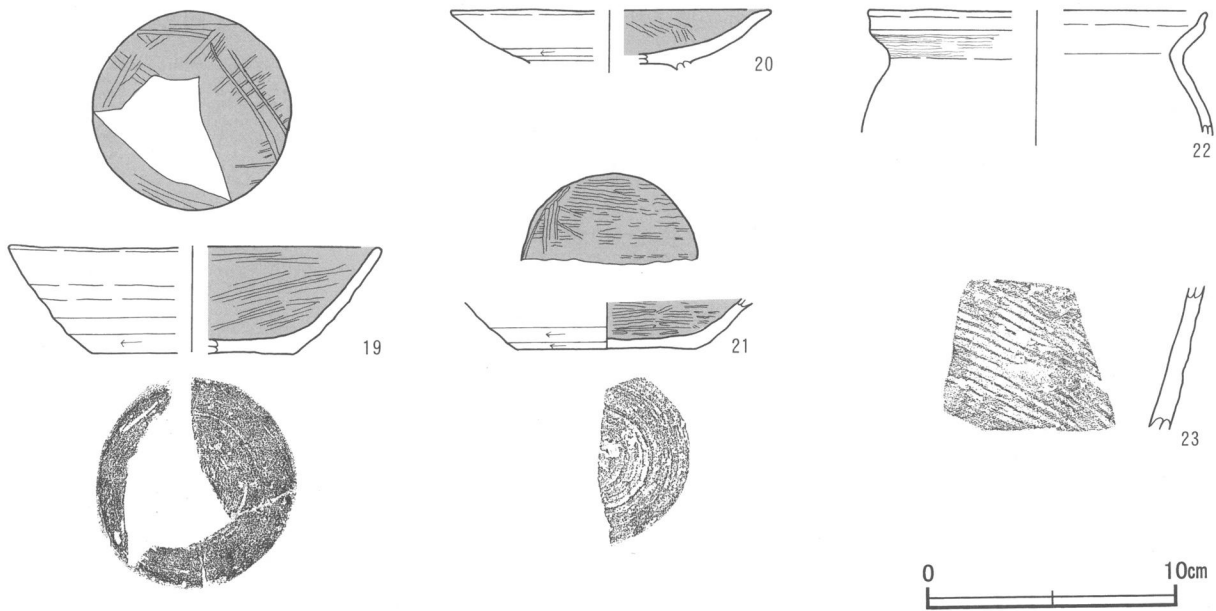
- 1 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子・小礫少量
- 2 黒褐色 ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量

遺物出土状況 土師器片113点(坏37, 碗2, 高台付皿1, 甕73), 須恵器片30点(坏18, 甕10, 蓋2), 縄文土器片1点, 陶器片1点が出土している。須恵器の供膳具は細片で覆土中からの出土であり, 住居を埋め戻す段階で混入したものと考えられる。19・23は覆土下層, 21・22は床面上から出土している。

所見 時期は, 10世紀前半の第1号住居に掘り込まれていることや須恵器が伴わないこと及び出土土器から, 9世紀末葉と考えられる。



第47図 第4号住居跡実測図



第48図 第4号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡出土遺物観察表(第48図)

番号	番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
19	土師器	坏	[14.8]	4.2	[8.0]	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ, 底部回転ヘラ切り	北東コーナ一部覆土下層	70% 内面黒色処理 PL16
20	土師器	高台付皿	[12.8]	(2.4)	—	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ, 内面ヘラミガキ	覆土	20% 内面黒色処理
21	土師器	坏	—	(1.8)	[7.0]	石英・長石・雲母	にぶい・橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ, 底部回転ヘラ切り	東部床面	30% 内面黒色処理
22	土師器	甕	[13.4]	(4.9)	—	石英・長石・雲母	暗赤褐	普通	口縁部ヨコナデ, 外面ナデ	北東コーナ床面	10%
23	須恵器	甕	—	(5.8)	—	長石・雲母	灰	普通	斜め方向の平行叩き	北東コーナ一部覆土下層	5%

(2) 溝跡

第2号溝跡 (第49・50図)

位置 A1f8～A1h0区に位置し, 北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

重複関係 第3号住居に南東端を掘り込まれている。

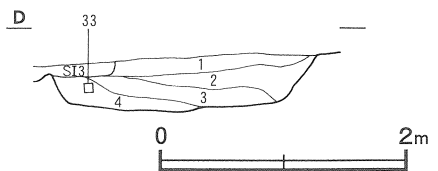
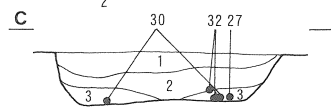
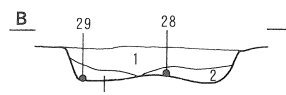
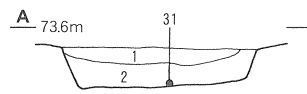
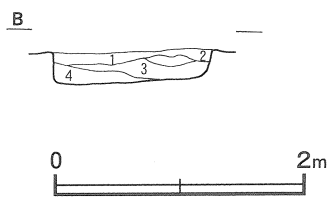
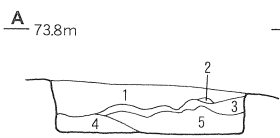
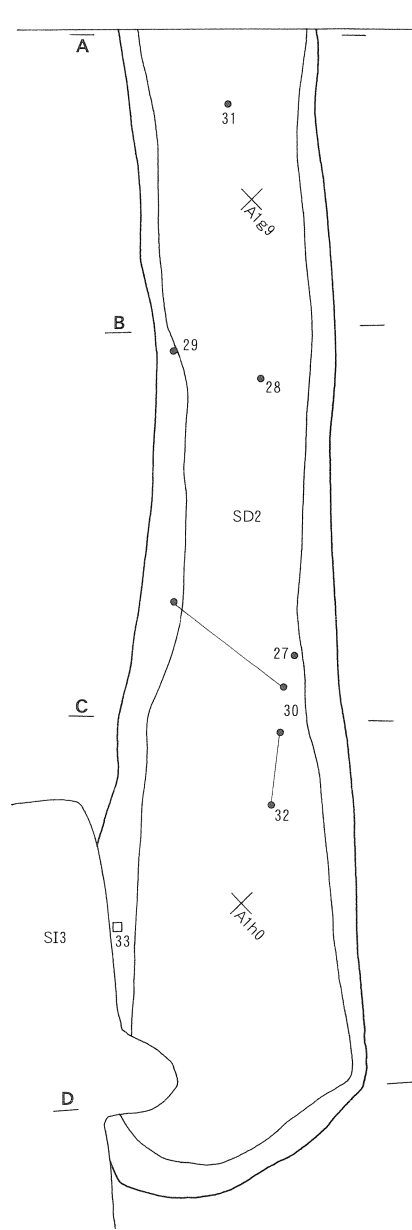
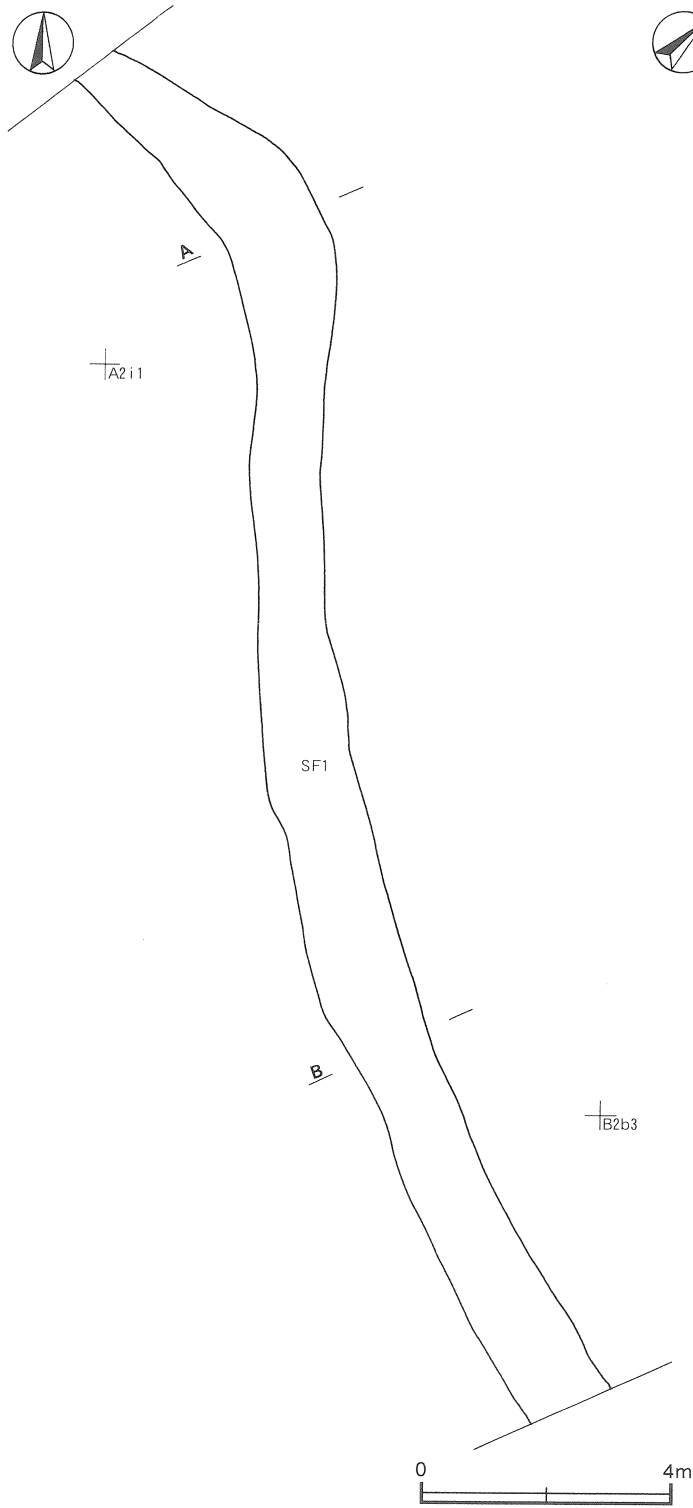
規模と形状 N-45°-Wの傾きで直線的に掘削されており, 南東方向はA1h0区で外傾して立ち上がり, 北西方向は調査区域外にさらに伸びている。上端幅1.42～1.97m, 下端幅0.98～1.57mで, 底面が狭く壁が外傾して立ち上がる断面逆台形を呈している。底面は平坦で, 確認面から底面までの深さは北西端で23cmで, 南東に向かって緩やかに深くなっていき, 南東端での深さは42cmである。

覆土 4層からなり, 壁際から土砂が堆積している状況から自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 暗褐色 砂粒多量, 焼土粒子・炭化粒子微量
- 2 暗褐色 焼土粒子・炭化粒子微量
- 3 黒褐色 砂粒少量, 炭化物・焼土粒子微量
- 4 黒褐色 炭化物少量, 焼土粒子微量

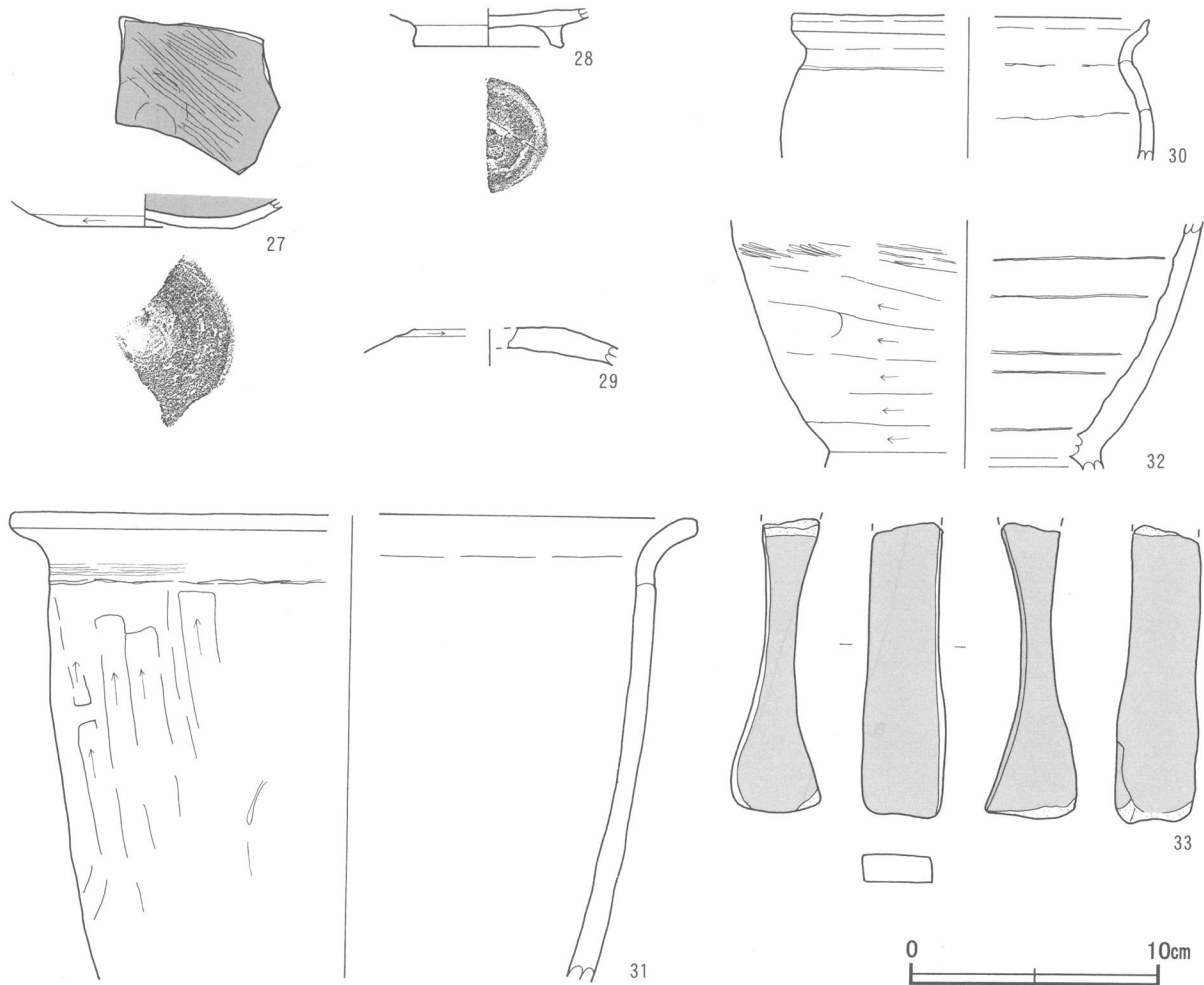
遺物出土状況 土師器片81点(碗30, 甕51), 須恵器片26点(坏12, 高台付坏1, 甕11, 長頸瓶2), 縄文土器片21点, 陶器片4点が出土している。1層から出土した土器はすべて細片であり, 破断面が磨耗していることから, 土砂の堆積と一緒に流入したものと考えられる。27・29・30は壁際の底面から出土しており, 壁際堆積土とともに流入したものと考えられる。28・31は中央部底面から出土しており, 28・31は破断面の磨耗が少



第49图 第1号道路迹・第2号沟实测图

ないことから、廃棄されたものと考えられる。32は壁際の底面出土の破片とやや浮いた位置から出土した破片が接合したものである。壁際堆積土とともに流入したものと考えられるが、流入に若干の時間差があるものと考えられる。33は壁際の上層から斜位で出土している。

所見 9世紀末葉の第3号住居に掘り込まれていることや、底面出土の土器から9世紀の早い段階に埋没がはじまった可能性が考えられる。調査区域には本跡と同時期の遺構は無く、性格も不明である。調査区域外にその時期の遺構の存在がうかがわれる。



第50図 第2号溝跡出土遺物実測図

第2号溝跡遺物観察表(第50図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
27	土師器	坏	—	(1.3)	6.8	石英・長石	にぶい橙	普通	体部下端回転ヘラケズリ, 底部回転ヘラ切り	壁際底面	20% 内面黒色処理
28	須恵器	高台付坏	—	(1.5)	6.0	石英・長石・海綿骨針	灰	普通	底部回転ヘラ切り後高台貼りつけ	中央部底面	20% 底部ヘラ記号「/」
29	須恵器	蓋	—	(1.6)	—	石英・長石	灰	良好	天井部回転ヘラケズリ	壁際底面	30%
30	土師器	甗	[14.2]	(5.7)	—	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ	壁際底面	10%
31	土師器	甗	[27.2]	(18.6)	—	石英・長石・雲母・小礫	にぶい橙	普通	口縁部ヨコナデ, 外面ヘラケズリ, 内面ナデ	中央部底面	30% PL16
32	須恵器	長頸瓶	—	(10.0)	—	長石・小礫	灰	普通	体部外面回転ヘラケズリ	壁際底面・覆土下層	30% PL16

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
33	砥石	(12.0)	3.3	3.7	(140)	凝灰岩	4面に使用痕	壁際土層	PL16

2 その他の遺構と遺物

今回の調査では、時期及び性格不明の道路跡1条、土坑3基を確認した。以下、遺構と遺物について記述する。また、遺構に伴わない土器が出土しているため、特色ある土器を抽出し、実測図を掲載する。

(1) 道路跡

第1号道路跡 (第49図)

位置 A 1 h1 ~ B 2 c2 区に位置し、北東に緩やかに傾斜した丘陵裾部に立地している。

規模と形状 両端が調査区域外に伸びており、全長26.46mほどが確認された。B 2 c2 区からN-5°-Wほどの傾きで直線に伸びており、A 2 i1 区付近で西にやや屈曲する。硬化した路面は1面で、幅は1.04~1.60mであり、掘り方底面はほぼ平坦で、幅は路面幅とほぼ同じである。

覆土 5層からなり、黒色土と粘土の混合土で路面を構築しており、硬化している。

土層解説

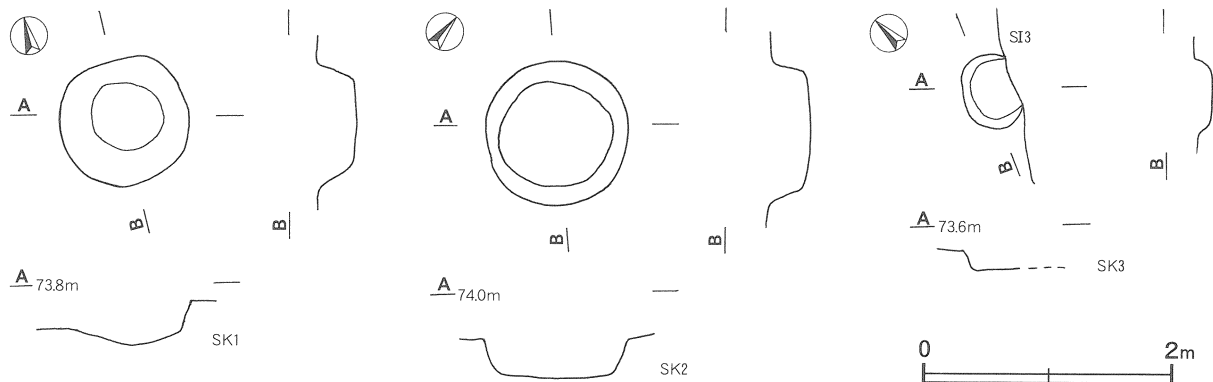
- 1 暗褐色 粘土粒子中量, 炭化物・ローム粒子・砂粒少量
- 2 黒褐色 粘土粒子多量, 炭化物・砂粒少量
- 3 オリーブ 粘土粒子多量, 炭化粒子・砂粒少量
- 4 オリーブ 粘土粒子多量, 砂粒中量
- 5 褐灰色 粘土粒子多量

遺物出土状況 須恵器甕片2点が、路面構築土内から出土しているが、細片のため図示することができなかった。

所見 9世紀末葉から10世紀前半の竪穴住居跡群を避けるように屈曲しており、それらを意識して構築された様子がうかがえる。しかし遺構外から近世の陶器片が出土しており、その時期の可能性も推測できるが、特定はできない。

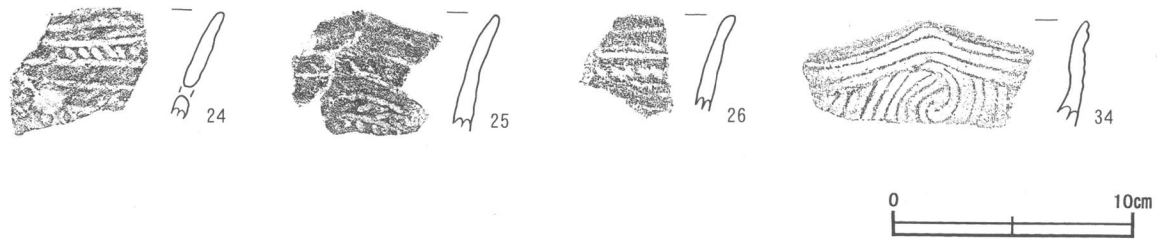
(2) 土坑 (第51図)

時期及び性格不明の土坑であり、実測図と一覧表で掲載する。



第51図 土坑実測図

(3) 遺構外出土遺物 (第52図)



第52図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第52図)

番号	器種	文様の特徴	出土位置	備考
24	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文	表土	早期後半
25	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文	表土	早期後半
26	深鉢	2本沈線の区画内に刺突文	表土	早期後半
34	深鉢	波状口縁, 浮線により渦巻文描出	表土	前期後半

表8 住居跡一覧表

番号	位置	主軸方向 (長軸)	平面形	規模(m) (長軸×短軸)	壁高 (cm)	床面	壁溝	内部施設					覆土	出土遺物	時代	備考 新旧関係 (古→新)
								主柱穴	出入口 ピット	ピット	竈	貯蔵穴				
1	A1j0	N-4°-W	[方形]	[4.41]×(-)	29	平坦	-	4	1	-	1	-	不明	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	10世紀前半	SI4→本跡
2	A1h0	N-1°-W	方形	3.65 × 3.35	18~24	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器, 須恵器, 灰釉陶器	10世紀前半	SI3, SI4→本跡
3	A1h0	N-39°-E	長方形	3.80 × 3.30	20	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器, 須恵器, 砥石	9世紀末葉	SI2, SK3→本跡 →SI2
4	A2i1	N-7°-W	[方形]	(-) × 3.86	15	平坦	-	-	-	-	1	-	人為	土師器, 須恵器	9世紀末葉	本跡→SI1, SI2

表9 土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	出土遺物	備考 遺構番号・新旧関係 (古→新)
				長径(軸)×短径(軸)(m)	深さ(cm)					
1	D1e4	-	円形	0.6 × 0.6	20	緩斜	平坦	-	-	
2	B1i4	-	円形	0.5 × 0.5	14	緩斜	平坦	-	-	
3	A1h0	-	円形	0.2 × 0.2	20	緩斜	平坦	-	-	本跡→SI3

表10 溝跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模(m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考
				長さ	深さ	上幅	下幅						
2	A1f8~ A1h0	N-45°-W	逆台形	(10.55)	0.23~ 0.42	1.42~ 1.97	0.98~ 1.57	外傾	平坦	自然	土師器, 須恵器	9世紀以前	

表11 道路跡一覧表

番号	位置	方向	断面形	規模(m)				壁面	底面	覆土	出土遺物	時代	備考
				長さ	深さ	上幅	下幅						
1	A1h1~ B2c2	N-5°-W	皿状	[26.46]	0.21	1.04~ 1.60	1.05	外傾	平坦	路面	須恵器	-	

第4節 ま と め

今回の調査では、平安時代の竪穴住居跡4軒、それら住居跡群との関連がうかがわれる道路跡1条、溝跡1条、時期及び性格不明の土坑3基が確認された。また、遺構は確認されていないが、縄文時代の深鉢片や近世陶磁器片が出土している。ここでは、平安時代の遺構について概要を述べ、まとめとしたい。

丘陵の斜面部に9世紀末から10世紀前半の住居跡群が重複して位置している。土器の形態や器種組成に明確な時期差は認められないことから、住居の構築・使用・廃絶が短期間だったと考えられる。ただし住居跡群より古い段階の溝跡が存在することは、その時期の遺構があることを示唆しており、集落はさらに古い段階から形成されていた可能性がある。

道路跡は住居跡群のある所でそれらを避けるように屈曲しており、丘陵部から谷津に向かって伸びている様子がうかがえる。集落内の「道」である可能性を指摘しておきたい。

当遺跡では二か年にわたる調査によって、丘陵の斜面部の平安時代集落跡が確認できた。しかし調査区は遺跡の一部であり、地形的に集落が周辺に広がっていることが考えられる。

第5章 犬田山神古墳

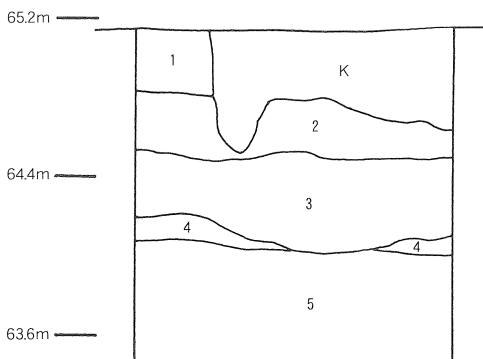
第1節 遺跡の概要

今回の調査の結果、縄文時代から中世にかけての複合遺跡であることが判明した。調査面積は705.31㎡である。

遺構は、古墳（周溝）1基、溝跡2条、土坑2基である。遺物は、遺物コンテナ（60×40×20cm）に1箱出土している。出土した主な遺物は、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器、石器（台石）、金属製品（不明鉄製品）である。

第2節 基本層序

調査区の北東部にテストピットを設定し、基本土層の観察を行った（第53図）。以下、テストピットの観察結果から土層の解説を行う。



第53図 基本土層図

第1層は黒褐色の表土である。粘性・縮りは普通で、層厚は25～30cmである。

第2層は黄色の鹿沼パミス層で、粘性・縮りはともに弱い。層厚は8～30cmである。遺構は本層の上面で確認できた。

第3層は褐灰色の層で径1.5～2.0cmの小礫を少量含む。粘性・縮りは強い。層厚は30～47cmである。

第4層は褐色の層で、径3～5cmの赤褐色の砂岩を多量に含む。粘性・縮りは強い。層厚は2～12cmである。

第5層は黄褐色の層で、径1.0～2.0cmの小礫を少量含む。粘性・縮りは強い。層厚は現状で12cm以上あるが下層が未掘のため本来の厚さは不明である。

第3節 遺構と遺物

1 古墳時代の遺構と遺物

(1) 古墳

第1号墳（第56図）

位置 調査区南部のA 1 e2区からA 1 h7区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第2号溝、第1・2号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 墳丘は削平されており、周溝のみ半円形状に確認された。周溝の南部は調査区域外の道路下に延びているため、円形になるのか、前方後円墳の後円部になるのかは不明である。周溝の内径は東西で約16mである。



第54図 犬田山神古墳調査区位置図



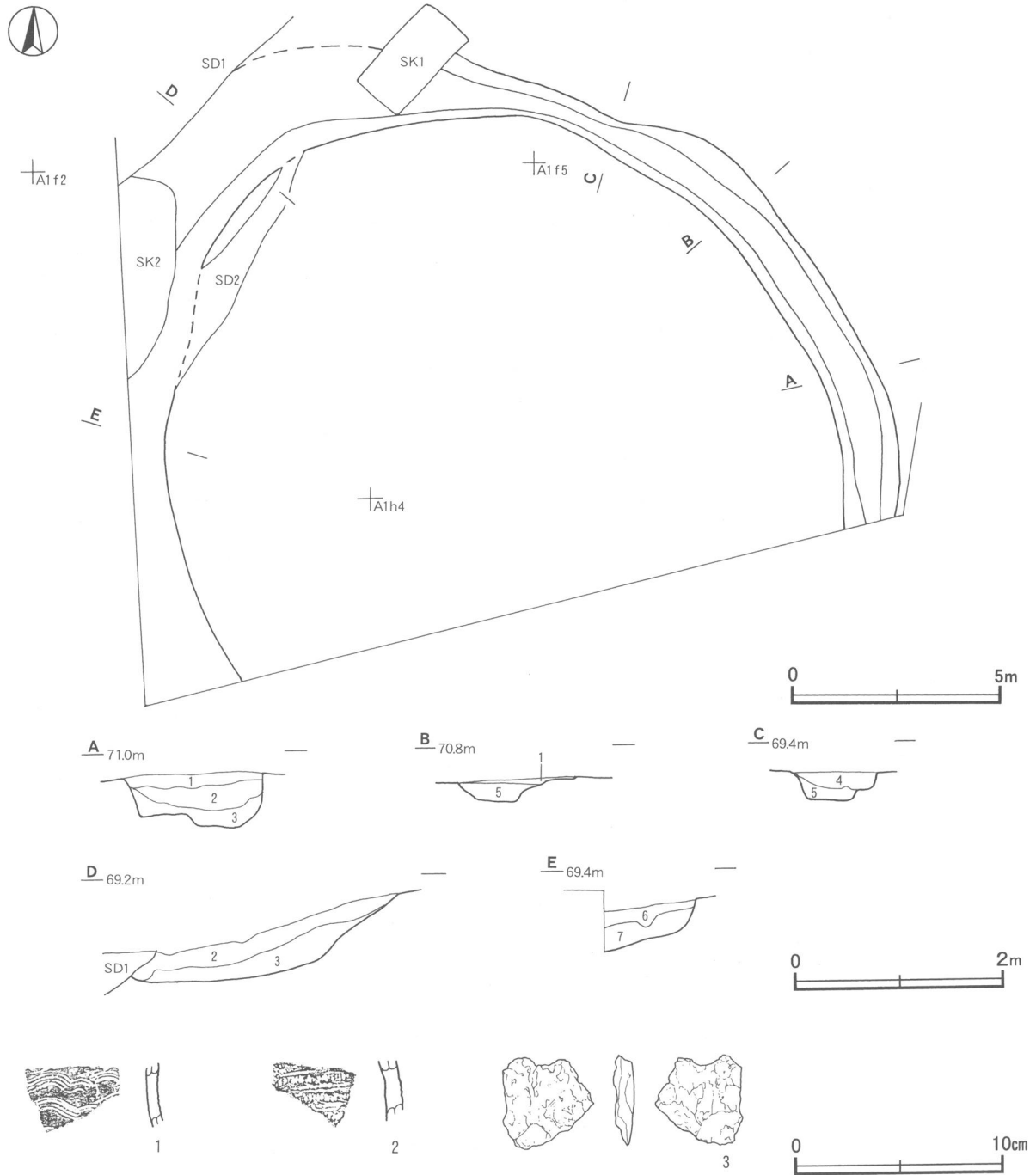
A1a1
X = 38420
Y = 24720



第55図 犬田山神古墳遺構全体図

周溝 上幅80~140cm, 下幅35~100cmの半円形で, 深さは20~50cmである。底面はほぼ平坦で, 壁はやや外傾して立ち上がっている。

覆土 周溝内の覆土は7層に分層される。東側ではレンズ状に, 西側では斜面上部から土が流れ込んだ状態で堆積しており, 自然堆積と考えられる。



第56図 第1号墳・出土遺物実測図

周溝土層解説

- 1 暗 褐 色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量, 縮り強
- 2 暗 褐 色 ロームブロック・鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量
- 3 暗 褐 色 鹿沼パミス中量, ロームブロック少量
- 4 暗 褐 色 ロームブロック少量, 炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 5 褐 色 ローム粒子多量, 粘性・縮り弱
- 6 暗 褐 色 炭化粒子少量, ロームブロック微量, 粘性・縮り弱
- 7 暗 褐 色 ローム粒子中量, 炭化粒子微量, 粘性・縮り弱

遺物出土状況 縄文土器片 8 点, 弥生土器片 61 点, 鉄製品 1 点 (不明鉄製品) が出土している。縄文土器と弥生土器はいずれも覆土中からの出土で破断面が摩滅しており, 流れ込みと考えられる。

所見 墳丘が削平されており, 主体部も確認できなかった。周溝も一部を確認できただけで, 平面形は確定できなかった。良好な遺物が出土しておらず, 時期を限定できないが, 遺物に埴輪片が見られないことから 7 世紀以降の可能性はある。

第 1 号墳出土遺物観察表 (第 56 図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎 土	色 調	焼成	文 様 の 特 徴	出土位置	備 考
1	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	石英	にぶい黄橙	普通	櫛描波状文 (4 本 1 単位)	覆土中	5%, 後期後半 PL18
2	弥生土器	壺	-	(3.0)	-	石英, 長石	にぶい橙	普通	附加条一種 (附加 2 条) 縄文施文	覆土中	5%, 後期後半

番号	器 種	長さ	幅	厚さ	重量	材 質	特 徴	出土位置	備 考
3	不明鉄製品	4.3	4.3	1.0	18.1	鉄	表面茶褐色, 内面暗褐色	覆土中	PL18

2 中世の遺構と遺物

(1) 溝跡

第 1 号溝跡 (第 57・58 図)

位置 調査区北西部の A 1 d4 区から A 1 e2 区に位置し, 南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

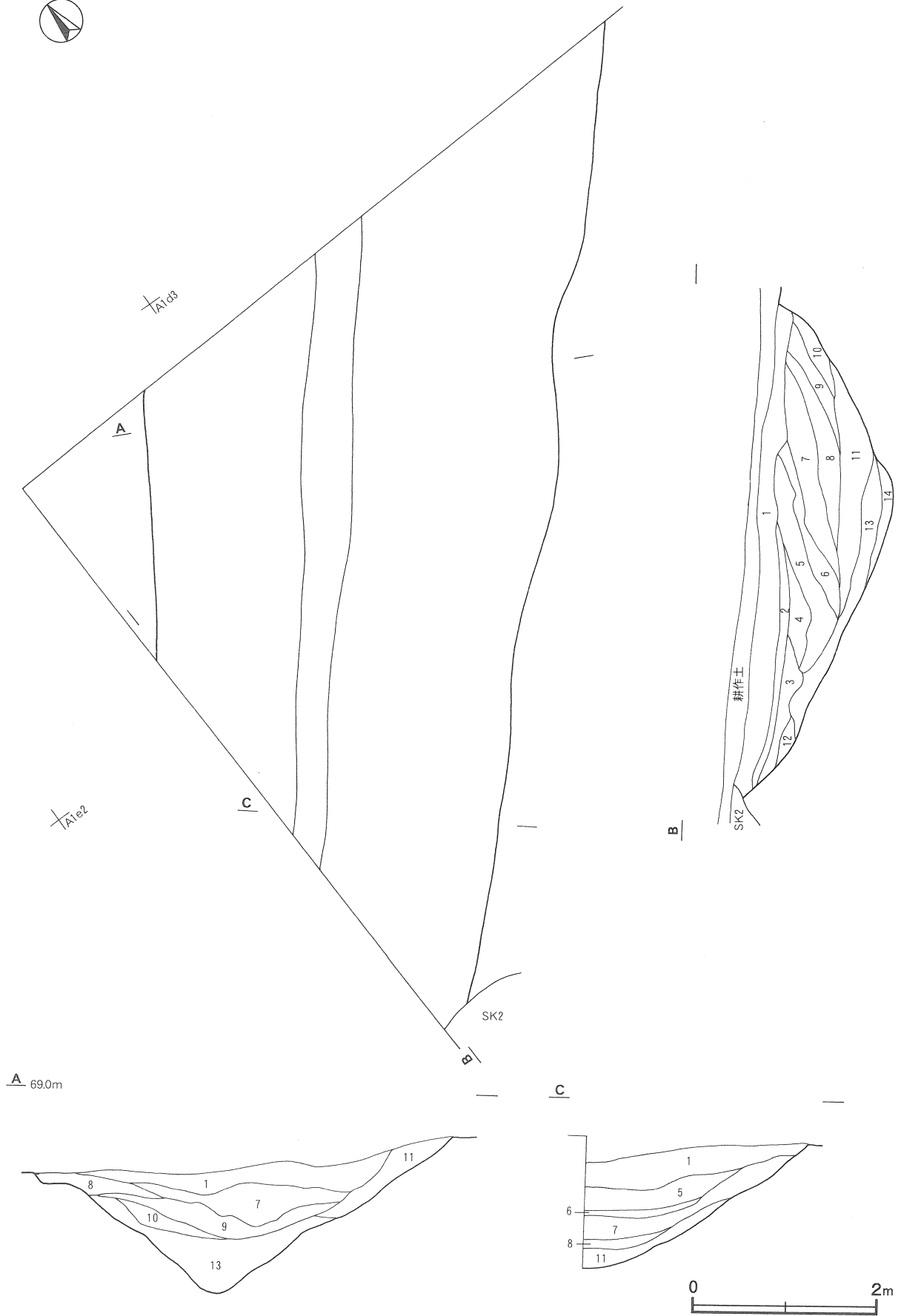
重複関係 第 2 号土坑に掘り込まれている。

規模と形状 A 1 e2 区から北東方向 (N-40°-E) へ直線的に伸びている。両端は調査区域外へ伸びており, 確認された長さは約 11m である。規模は上幅 400~440cm, 下幅 30~55cm, 深さ 130~150cm である。底面はほぼ平坦で, 壁は外傾して直線的に立ち上がる箱葉研状である。

覆土 14 層に分層される。第 11 層以下は斜面上部から土が流れ込んだ状態で堆積しており, 自然堆積と考えられる。第 10 層より上層はロームブロックを多く含み, 黒色土と褐色土が北西方向から交互に堆積していることから, 斜面の下方から人為的に埋め戻したものと考えられる。

土層解説

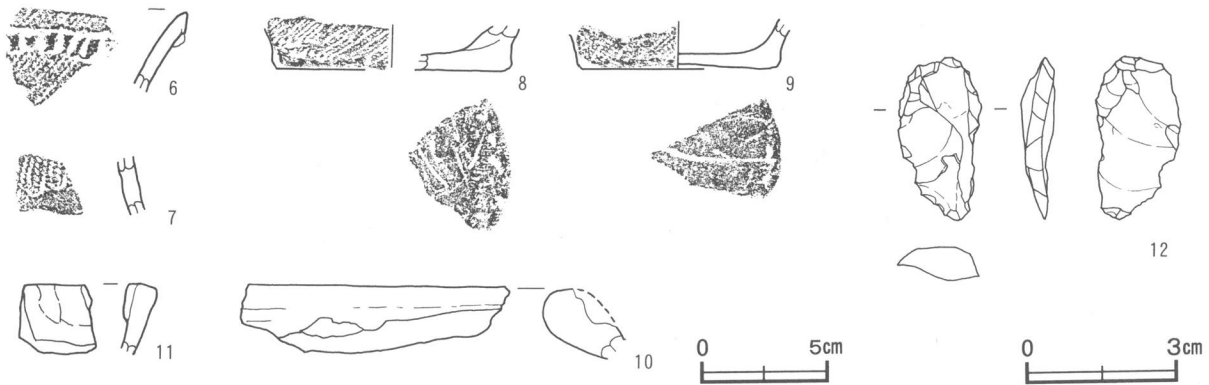
- 1 褐 色 ロームブロック少量, 炭化物・鹿沼パミス微量, 粘性・縮り弱
- 2 暗 褐 色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス少量, 炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 3 褐 色 ローム粒子中量, 鹿沼パミス微量, 縮り弱
- 4 黒 褐 色 ローム粒子少量, 縮り弱
- 5 褐 色 ロームブロック多量, 鹿沼パミス中量, 粘性・縮り弱
- 6 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量, 粘性・縮り弱
- 7 褐 色 ローム粒子多量, 鹿沼パミス微量
- 8 黒 褐 色 ローム粒子少量, 炭化粒子・鹿沼パミス微量
- 9 褐 色 ローム粒子中量, 縮り弱
- 10 暗 褐 色 ローム粒子微量, 縮り弱
- 11 暗 褐 色 ローム粒子微量, 縮り強
- 12 暗 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 13 黒 褐 色 ローム粒子・炭化粒子微量, 粘性強
- 14 黒 褐 色 ロームブロック・鹿沼パミス微量, 粘性・縮り強



第57図 第1号溝跡実測図

遺物出土状況 縄文土器片3点, 弥生土器片23点, 土師質土器片2点(内耳鍋, 火鉢カ)が出土している。縄文土器と弥生土器はいずれも覆土中からの出土で破断面が摩滅しており, 流れ込みと考えられる。

所見 南東から北西方向へ降りている尾根を, 傾斜に直交する形で掘り込んでいる。出土した土器の内で最新は16世紀代のもので, 周囲からも同時期の遺物が出土しており, 遺構の形状と合わせて判断すると, 中世城郭に伴う堀切と考えられる。土層の堆積状況を見ると比較的短期間で放棄し, 埋め戻されたものと考えられる。



第58図 第1号溝跡出土遺物実測図

第1号溝跡出土遺物観察表(第58図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
6	弥生土器	壺	-	(3.2)	-	石英	橙	普通	折り返し口縁部に隆帯添付, 隆帯上に連続刻み, 附加条一種(附加2条)縄文施文	覆土中	5%,後期後半 PL18
7	弥生土器	壺	-	(2.5)	-	石英,長石	にぶい橙	普通	附加条一種(附加1条)縄文施文, 結節を有す	覆土中	5%,後期後半
8	弥生土器	壺	-	(1.9)	[9.6]	石英,長石	にぶい黄橙	普通	附加条一種(附加2条)縄文施文	覆土中	5%,底部植物繊維状の圧痕,後期後半
9	弥生土器	壺	-	(1.9)	[8.2]	石英,長石	にぶい橙	普通	附加条一種(附加2条)縄文施文	覆土中	5%,底部木葉痕,後期後半

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
10	土師質土器	火鉢カ	-	(2.8)	-	石英,金雲母,赤色粒子	灰褐	普通	内外面ナデ	覆土中	5%,内面煤付着
11	土師質土器	内耳鍋	-	(2.8)	-	石英,金雲母	にぶい黄橙	普通	内外面ナデ, 耳部貼り付け	覆土中	5%,外面煤付着 PL18

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
12	剥片	3.2	1.7	0.8	3.38	チャート	縦長剥片	覆土中	PL18

3 その他の遺構と遺物

(1) 土坑

第1号土坑(第59図)

位置 調査区北西部のA1e4区に位置し, 南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 長軸260cm, 短軸135cmの長方形で, 深さは95~115cm, 長軸方向はN-43°-Eである。底面は平坦で, 壁は直立している。北東部の底面に長径65cm, 短径50cmの楕円形で, 深さ50cmのピットが1か所掘り込

まれている。

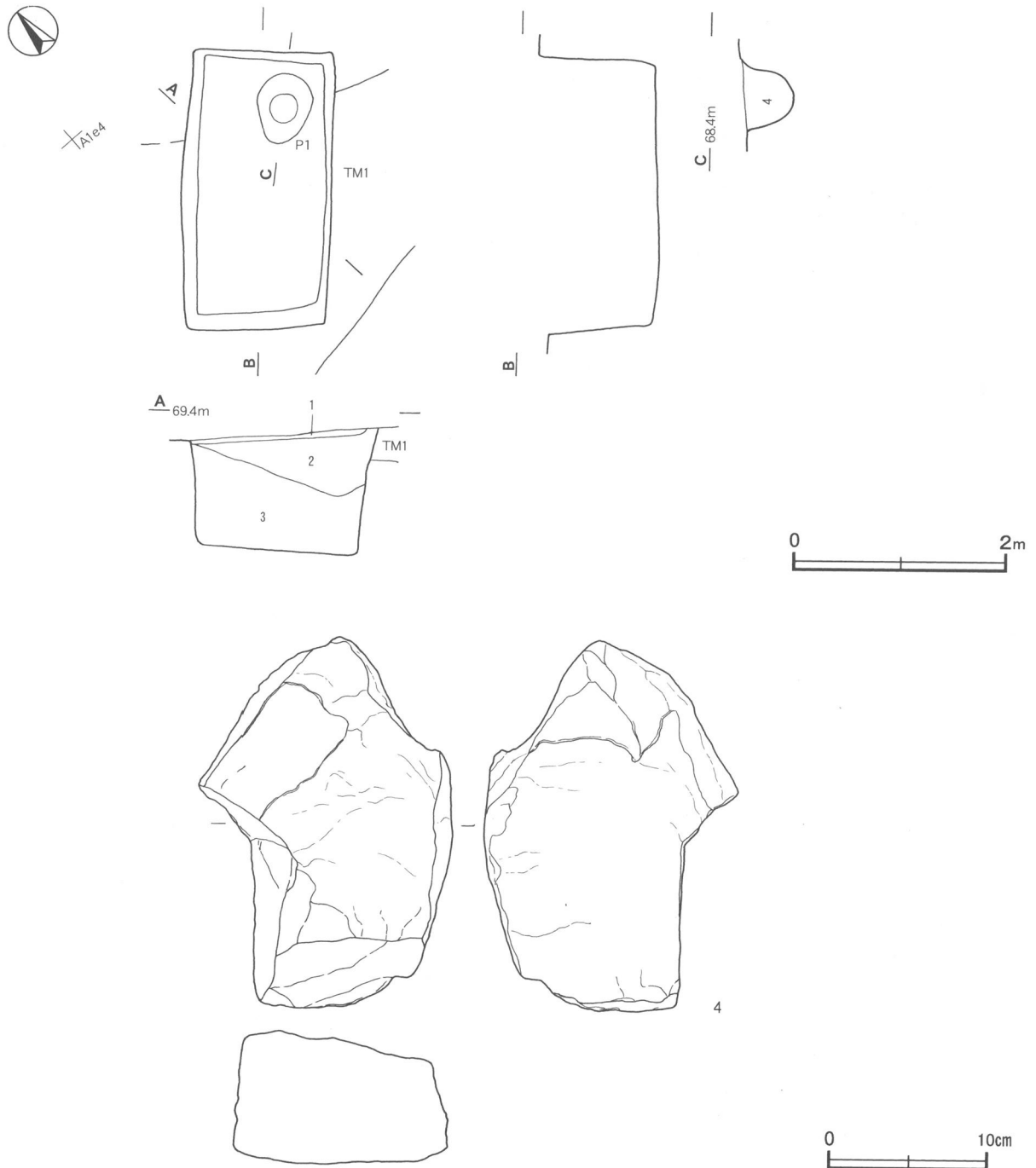
覆土 4層に分層される。層内にロームブロックを不均一に含んでおり、人為堆積と考えられる。

土層解説

- 1 黒褐色 ロームブロック少量, 粘性・縮り弱
- 2 黒褐色 ロームブロック・炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 3 暗褐色 ロームブロック多量, 炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 4 褐色 ローム粒子・鹿沼パミス微量, 粘性・縮り強

遺物出土状況 縄文土器片1点, 弥生土器片2点, 土師器片1点(甕), 礫2点が出土している。土器片はいずれも覆土中からの出土で破断面が摩滅しており, 流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できる遺物が出土しておらず, 時期・性格ともに不明である。



第59図 第1号土坑・出土遺物実測図

第1号土坑出土遺物観察表(第59図)

番号	器種	長さ	幅	厚さ	重量	材質	特徴	出土位置	備考
4	台石カ	23.2	15.5	8.4	3700	砂岩	表面に剥離痕	覆土中	

第2号土坑 (第60図)

位置 調査区北西部のA1 f2区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号墳と第1号溝跡を掘り込んでいる。

規模と形状 西側が調査区域外にあり、現状で長軸480cm、短軸150cmのみ確認できた。形状は長楕円形と推測され、深さは80cmである。底面は皿状で、壁はやや外傾して立ち上がっている。

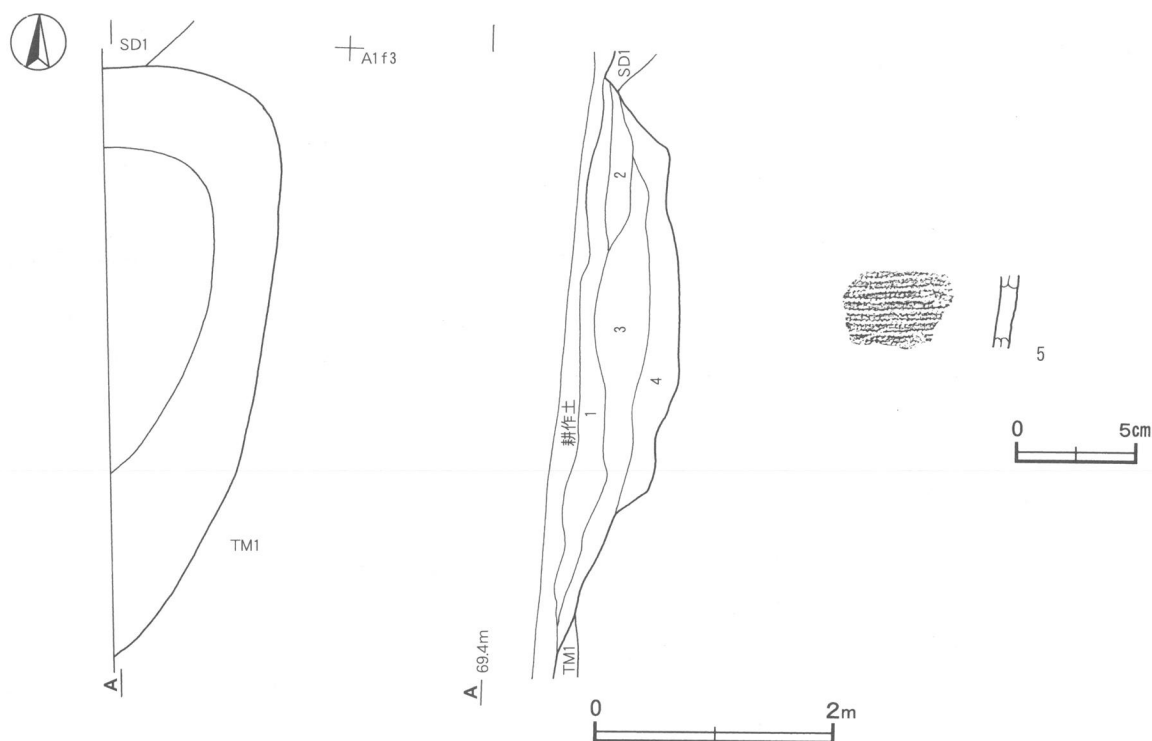
覆土 4層に分層される。レンズ状に堆積しており、自然堆積と考えられる。

土層解説

- 1 褐色 ローム粒子中量, 焼土粒子・炭化粒子微量, 粘性・縮り弱
- 2 褐色 ロームブロック少量, 炭化物微量, 粘性・縮り弱
- 3 黒色 ローム粒子微量
- 4 暗褐色 ロームブロック中量, 鹿沼バミス微量, 粘性強

遺物出土状況 弥生土器片1点が出土している。破断面が摩滅しており、流れ込みと考えられる。

所見 時期を判断できる遺物が出土していないが、16世紀代と考えられる第1号溝跡を掘り込んでおり、時期はそれ以降と考えられる。



第60図 第2号土坑・出土遺物実測図

第2号土坑出土遺物観察表(第60図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	文様の特徴	出土位置	備考
5	弥生土器	壺	-	(3.1)	-	石英	赤褐	普通	附加条一種(附加2条)縄文施文	覆土中	5%後期後半 PL18

(2) 溝跡

第2号溝跡 (第61図)

位置 調査区北西部のA1f2区からA1f3区に位置し、南東から北西へ下がる傾斜地に立地している。

重複関係 第1号墳を掘り込んでいる。

規模と形状 A1f2区から北東方向(N-35°-E)へ直線的に伸びている。両端は削平されており、確認された長さは約6mである。規模は上幅30~120cm, 下幅10~50cm, 深さ20cmである。底面は皿状で、壁は外傾して立ち上がっている。

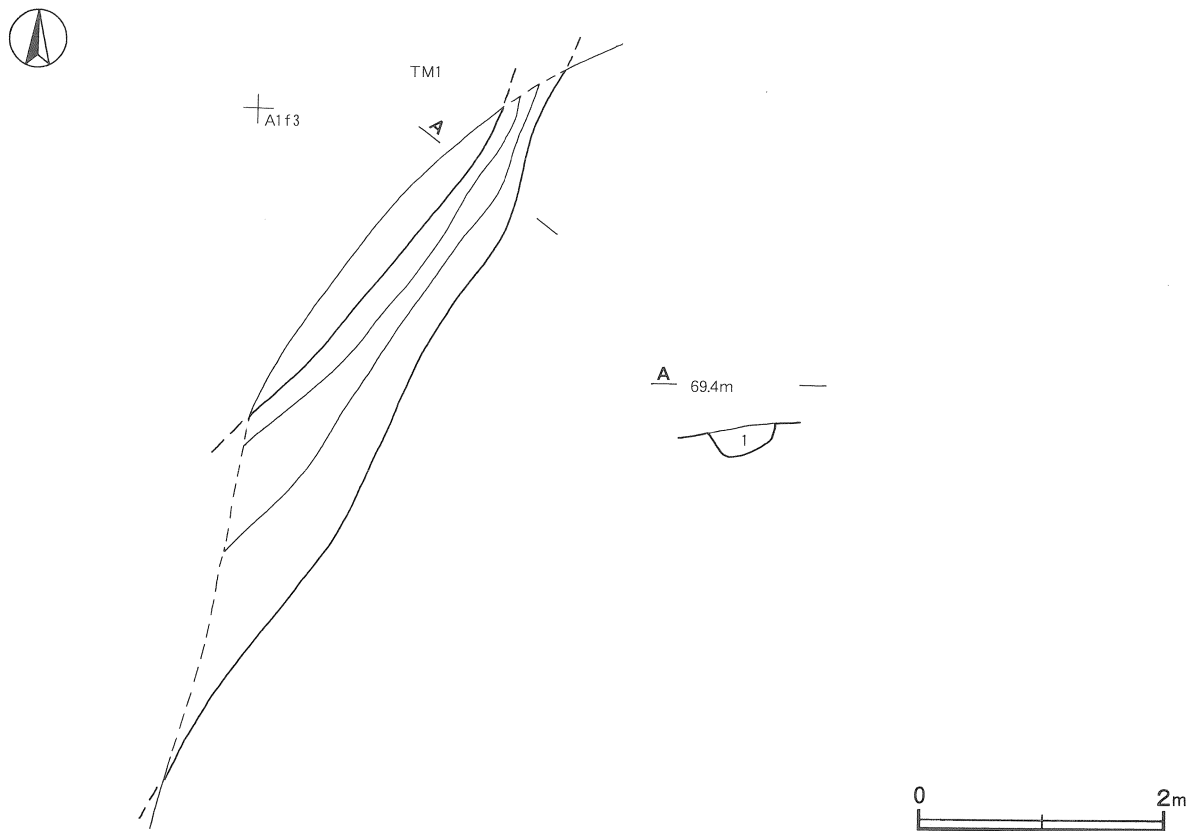
覆土 単一層で、堆積状況は不明である。

土層解説

1 暗褐色 ロームブロック・炭化粒子微量, 粘性・締り弱

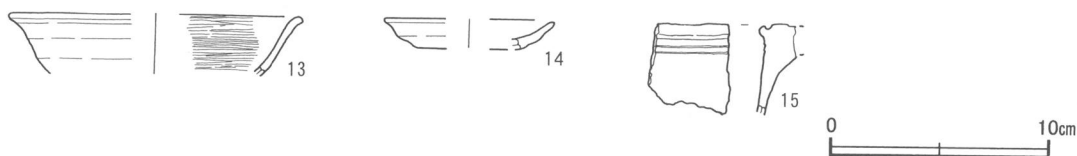
遺物出土状況 遺物は出土していない。

所見 遺物が出土しておらず、時期・性格ともに不明である。



第61図 第2号溝跡実測図

(3) 遺構外出土遺物 (第62図)



第62図 遺構外出土遺物実測図

遺構外出土遺物観察表(第62図)

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	手法の特徴	出土位置	備考
13	土師器	坏	[13.2]	(2.7)	-	長石, 金雲母, 赤色粒子	にぶい橙	普通	外面ナデ	表採	10%
14	土師質土器	小皿	[7.6]	1.3	[4.8]	長石	にぶい橙	普通	内面ナデ, 底部回転糸切り	表採	15% PL18
15	瓦質土器	火鉢カ	-	(4.2)	-	長石	褐灰	普通	内外面ナデ, 口唇部・内面に沈線	表採	5% PL18

第4節 まとめ

今回の調査では、古墳1基、土坑2基、溝跡2条を確認した。以下、当遺跡の概要を述べてまとめとしたい。

1 縄文・弥生時代

縄文時代と弥生時代の遺構は確認されていないが、他の時代の遺構や表土から土器片が確認されている。縄文時代の土器はほとんどが細片で、中期がその中心である。弥生時代の土器は後期後半のものであり、破片数も多く周囲に遺構が存在する可能性が高い。

2 古墳時代

古墳時代に属する遺構は古墳1基のみで、遺物もほとんど出土していない。古墳は南部が調査区域外にあり、平面形が確定できなかった。主体部も削平されたか、調査区域外に存在しているためか、確認できなかった。当遺跡の南西約20mには径10mほどの円形の地ぶくれがあり、さらに南の畑地内には黒雲母片岩が石室状に存在し、古墳の石室か石棺であった可能性も考えられる。地元の方にかがったところ、他にも周囲に古墳が存在し石室か石棺が見えていたということで、当遺跡は古墳群であったと考えられる。おそらく尾根上に数基による古墳群が形成されていたと考えられ、埴輪片が出土していないことや古墳の規模が小さいことなどを考えると、時期は7世紀代と推測される。

3 中世

中世では溝跡が1条確認できた。時期は遺物から16世紀代と推測され、立地や形状から判断すると城郭の堀切であると考えられる。当遺跡が存在する尾根から約1.6km東に上がった山上には橋本城跡が存在し、北西約600mには中世後期の遺構・遺物が多く出土している犬田神社前遺跡が存在することを考えると、当遺跡は橋本城跡か、それに付属する小規模な城郭の一部であった可能性が考えられ、周囲にも同様な遺構の存在が予想される。

写 真 图 版

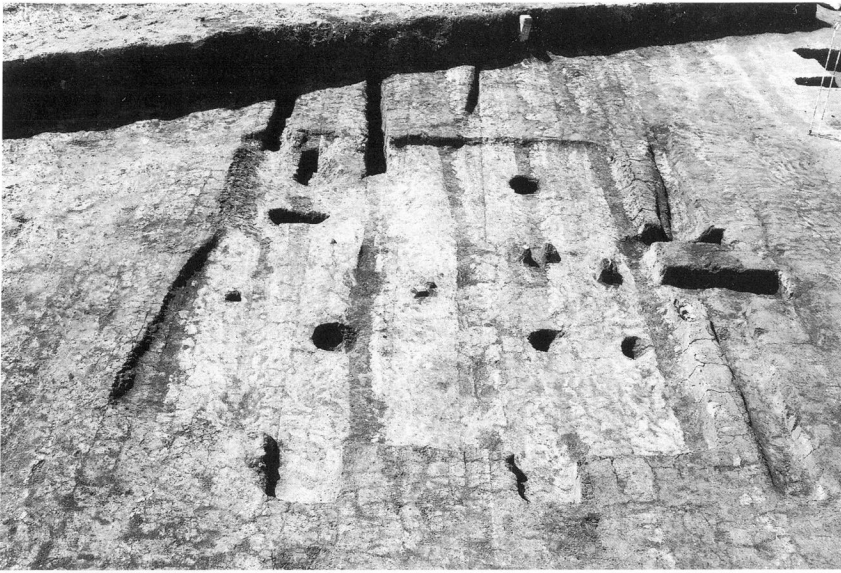
高 幡 遺 跡
加 茂 東 遺 跡
犬 田 山 神 古 墳



完掘状況（北から）



完掘状況（北西から）



第 3 号住居跡
完 掘 状 況



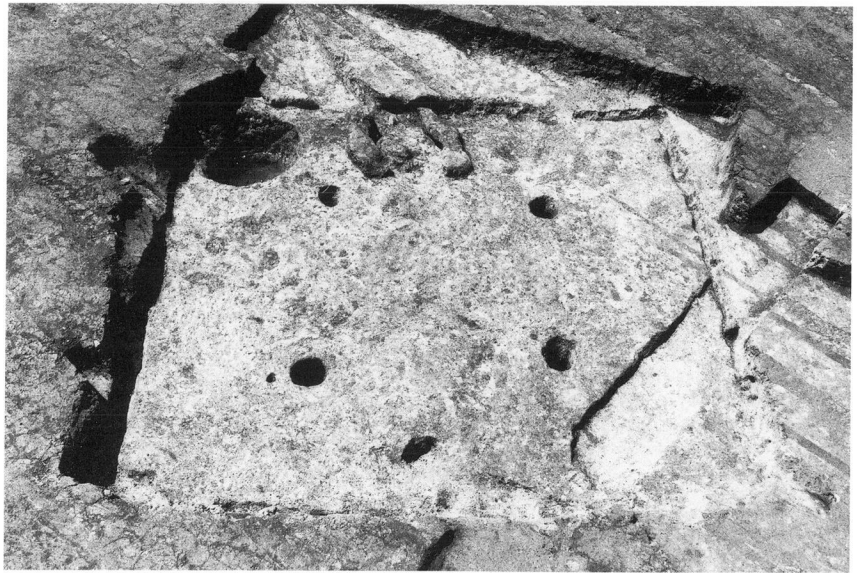
第 5 号住居跡
遺物出土狀況



第 9 号住居跡
完 掘 状 況



第 1 号住居跡
完 掘 状 況



第 8 号住居跡
完 掘 状 況



第 8 号住居跡
遺物出土狀況



第 8 号住居跡竈
遺物出土状況



第 8 号住居跡貯蔵穴
遺物出土状況



第 10 号住居跡
完掘状況



第10号住居跡
遺物出土状況



第11号住居跡
完掘状況



第11号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡
遺物出土状況



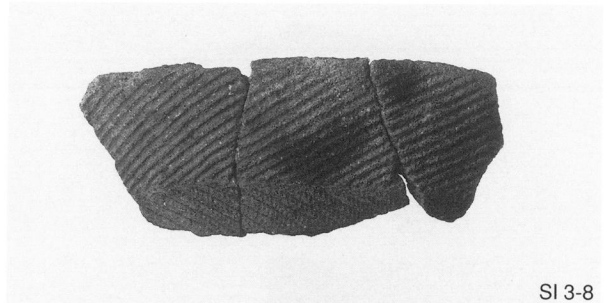
第13号住居跡
遺物出土状況



第5号土坑
完掘状況



遺構外-1



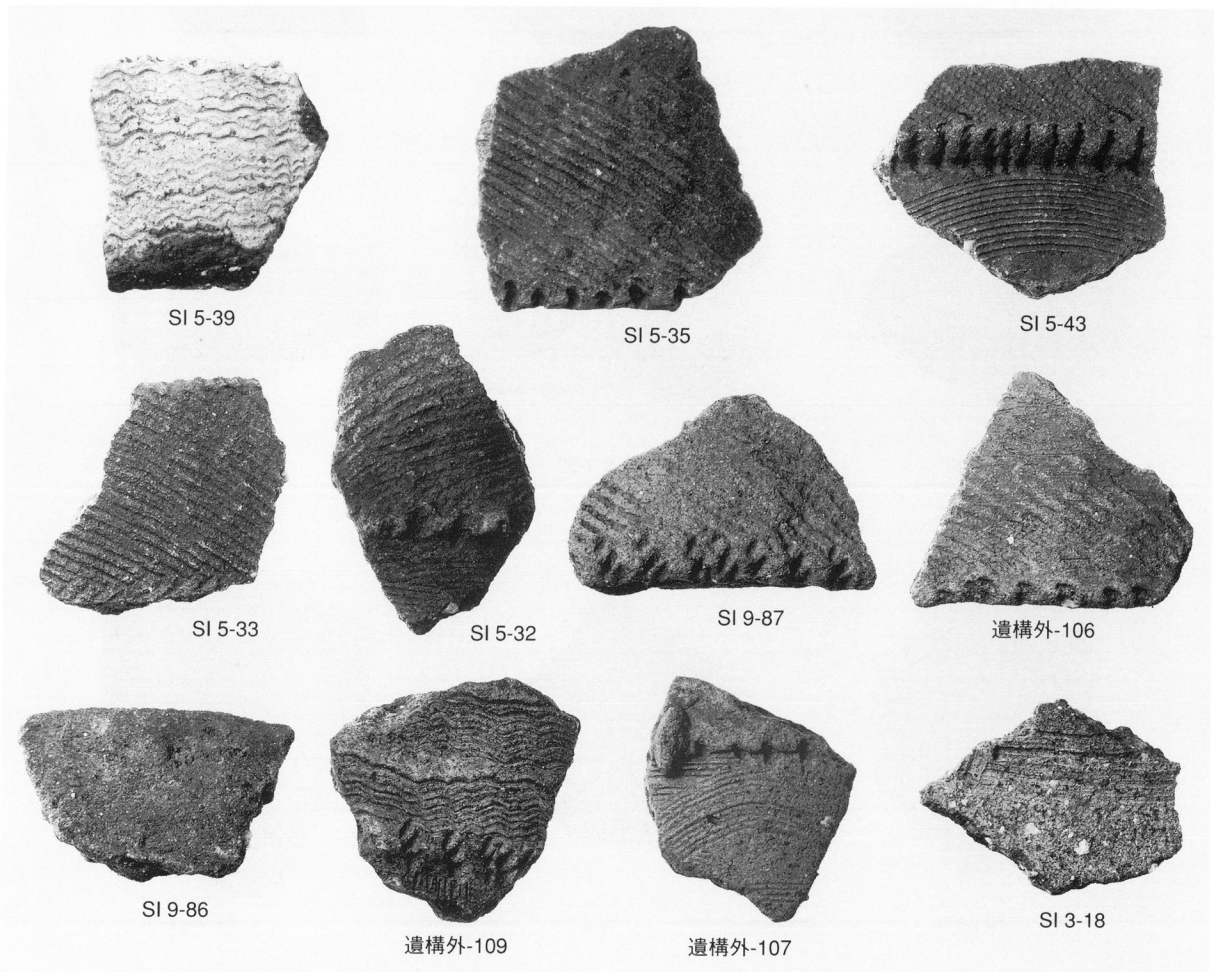
SI 3-8



遺構外-2



遺構外-104



SI 5-39

SI 5-35

SI 5-43

SI 5-33

SI 5-32

SI 9-87

遺構外-106

SI 9-86

遺構外-109

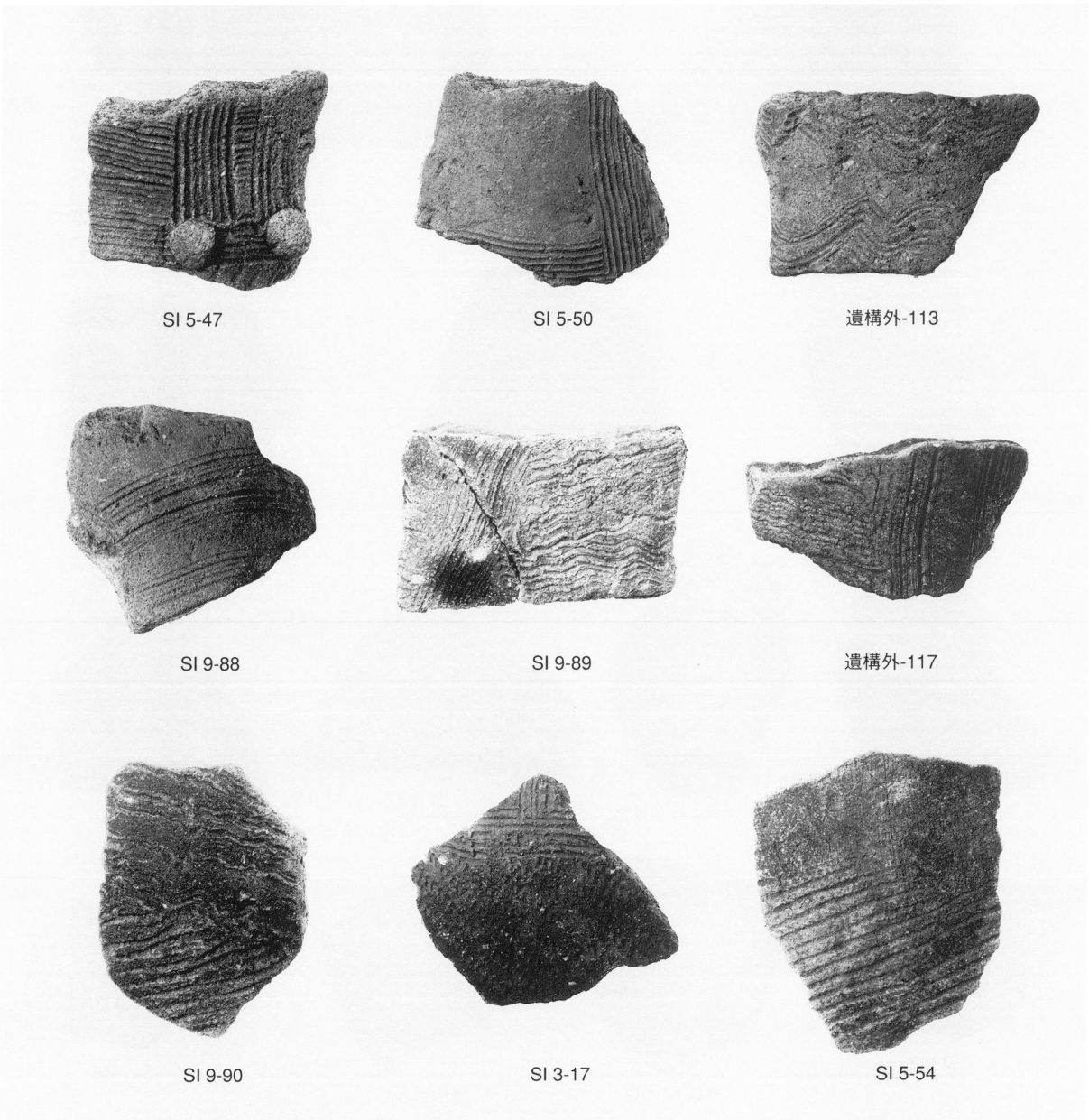
遺構外-107

SI 3-18



SI 5-20

SI 3-9



SI 5-47

SI 5-50

遺構外-113

SI 9-88

SI 9-89

遺構外-117

SI 9-90

SI 3-17

SI 5-54



SI 5-22



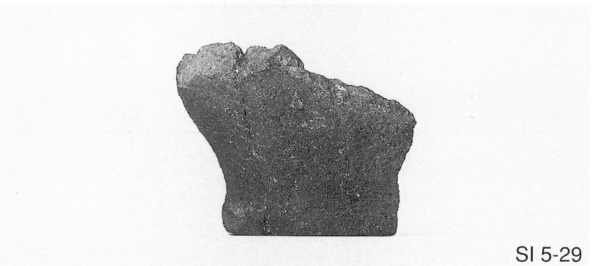
SI 9-84



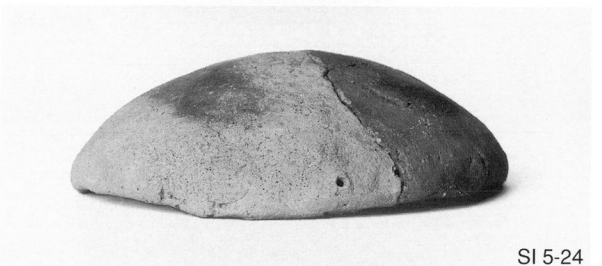
SI 5-21



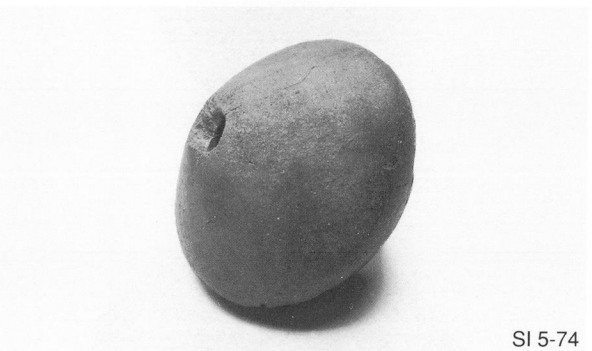
SI 5-23



SI 5-29



SI 5-24



SI 5-74



SI 5-75



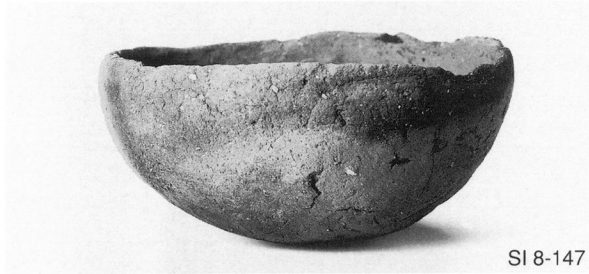
SI 5-73



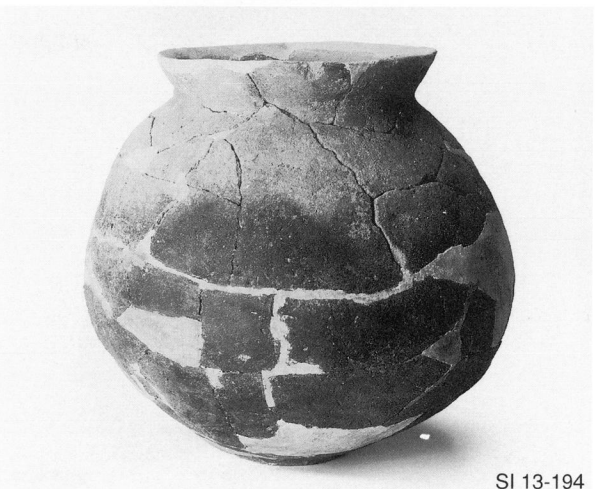
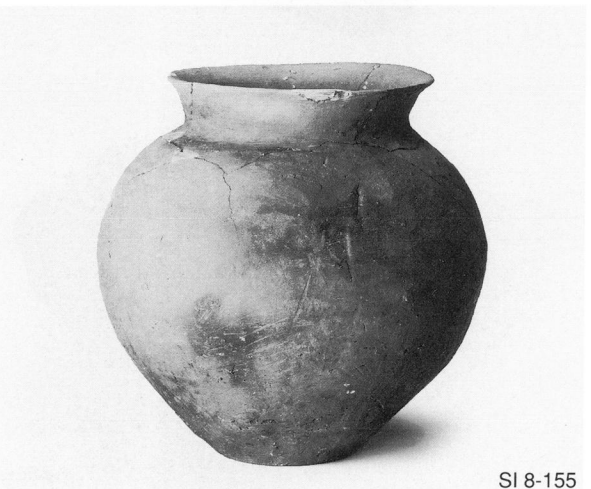
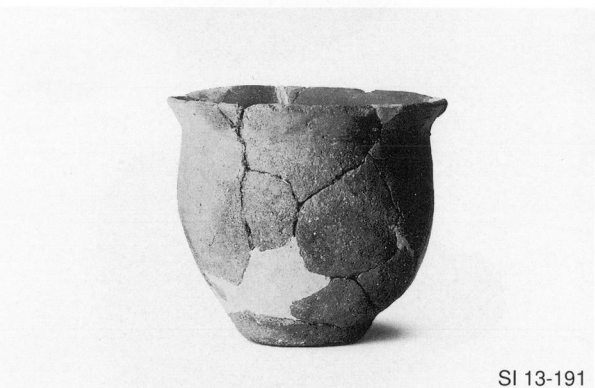
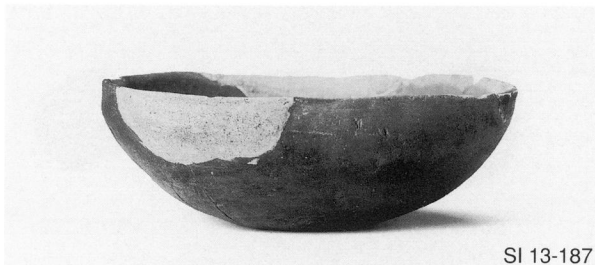
SI 10-167

PL10

高 幡 遺 跡



第 8 号住居跡出土遺物





SI 11-178



SI 11-180



SI 11-179



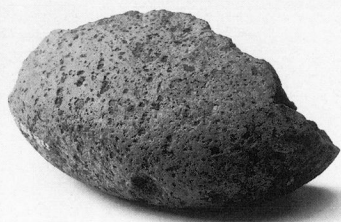
遺構外-135



SI 11-177



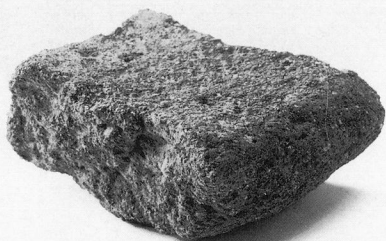
SI 11-176



遺構外-3



SD 2-201



遺構外-4



遺構外-5

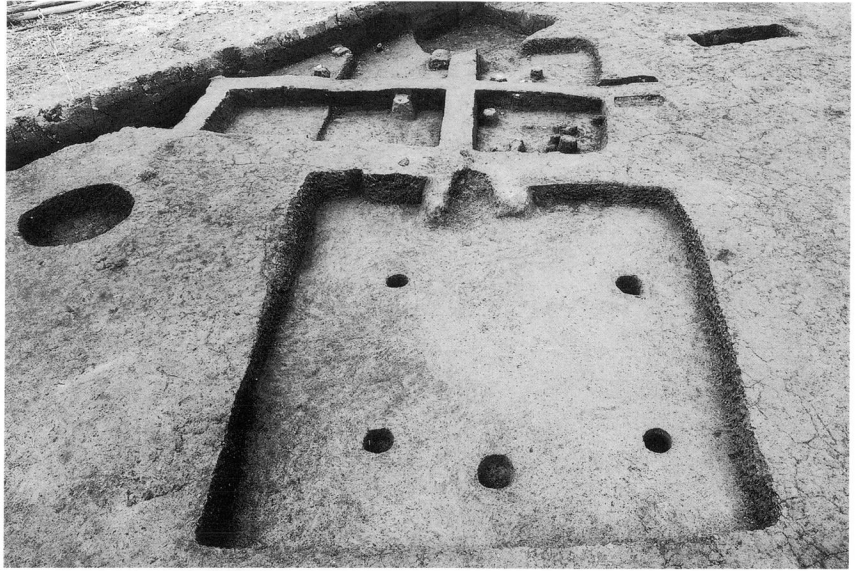


遺構外-7



遺構外-6

第11号住居跡，第2号溝，遺構外出土遺物



第1号住居跡
完掘状況



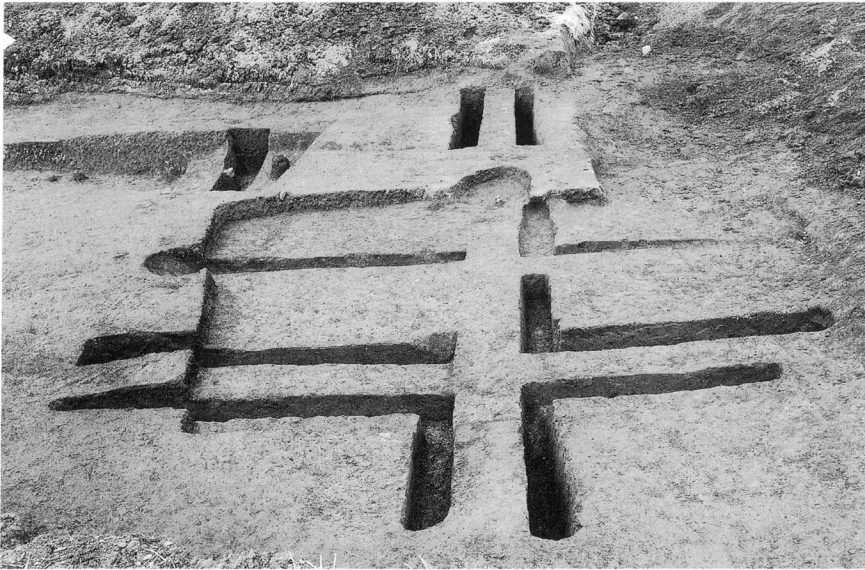
第2号住居跡
完掘状況



第2号住居跡
遺物出土状況



第2号住居跡
遺物出土状況



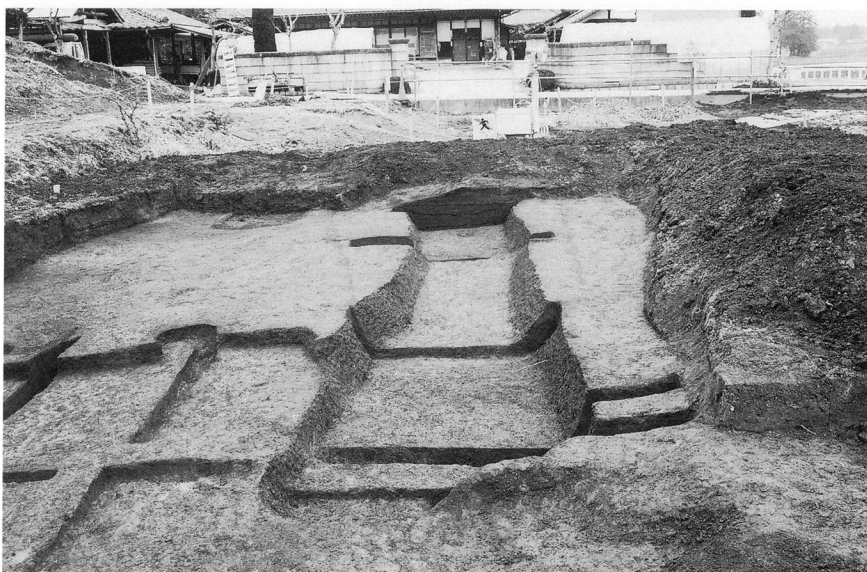
第3号住居跡
完掘状況



第3号住居跡
竈遺物出土状況



第4号住居跡
完掘状況



第2号溝
完掘状況



第2号溝
遺物出土状況





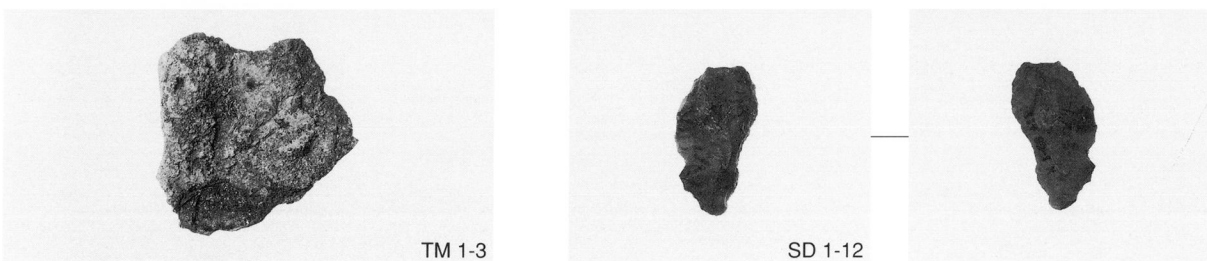
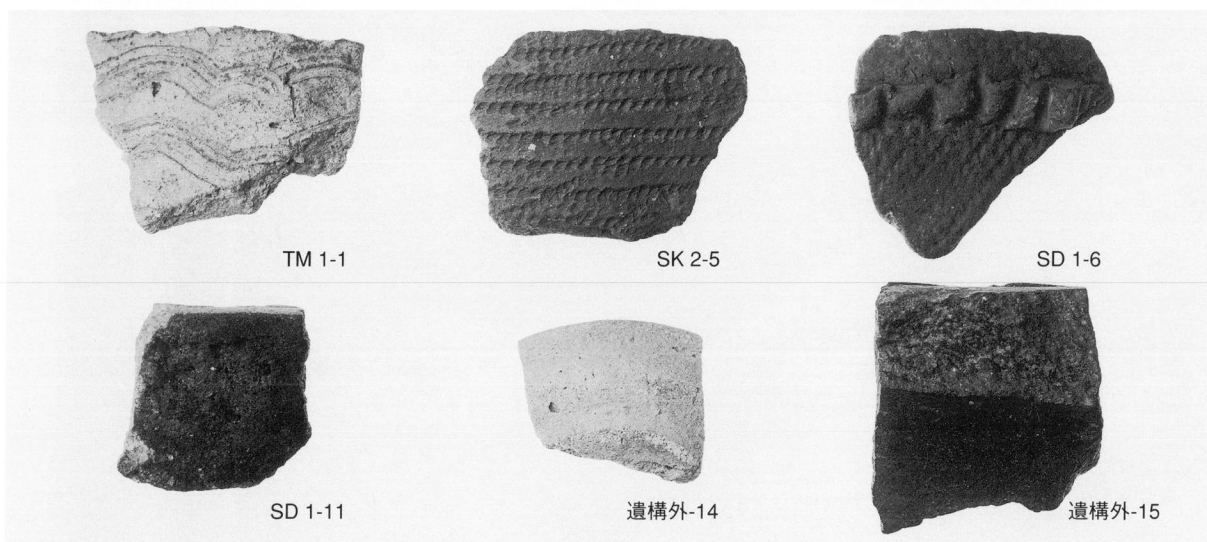
第1号墳完掘状況



第1号溝完掘状況



第1号土坑完掘状況



第1号墳、第2号土坑、第1号溝、遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第228集

高 幡 遺 跡
加 茂 東 遺 跡
犬 田 山 神 古 墳

平成 16(2004) 年 3 月 24 日印刷

平成 16(2004) 年 3 月 26 日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団
〒310-0911 水戸市見和1丁目356番地の2
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL 029-225-6587

印刷 山三印刷株式会社
〒311-4153 水戸市河和田町4433の33
TEL 029-252-8481